

# 天うつ浪

## 第一

幸田露伴

明治四十年一月 春陽堂



# 天そらうなみつ浪

## 第一

### 其一

秋あきは海樓かいろうの直簾すだれに動うごきて、ぱつと吹ふき來くる沖おきの風かせは、夕日ゆふひの餘光よけわう美うるは  
しきが中なかに、無む限げんの爽涼さうりやうの氣きを齎もたらせば、白帆しらほ明あるき遠方とほくの船ふねの數々かずく  
も、鉛色なまりいろなして漫々まんくたる潮うしほの果はてに却かへつて物淋ものさびしう見みえ渡わたりつゝ、竹芝たけしば  
の浦うらの浪靜なみしずかに、増上寺ぞうじやうじの鐘聲かねに暮くれ行ゆかんとす。

此この夕此ゆふべこの時とき、『見みはらし』の樓上ろうじやうの一室しつに、貸かし浴衣ゆかたの胸元むなもとゆたか  
にくつろげて、醉よひに嘯うそふく大胡坐おほあぐら、たゞ秋あきの飲酒さけに宜よろしきを知しつてその  
他たを知らぬ面構つらがまへきびくと、あはれも絲瓜へちまもあるものか、鳴しぎが飛とん  
だら撃うつて下物さかな、と云いはぬばかりの顔かほつきして、いづれも勇いさみを含ふくむ  
酒盃さかづきの遣やり取とり、火ひの珠たまも挾はさんで食くふべき年とし齡ばへの勢いきほひに、此方こなたの壯語さうご、

彼方の傲語、或は彼此哄然と一齊の天狗笑ひの響の中に、間近く通る瀟車の音をも埋めて仕舞ふまで、無邪氣に睦み語らへる四人連あり。

陽氣の歡笑は一トしきり濟みて、今しも談話は少し沈みぬ。

手さき頸筋に洋服の痕判然と知れて、誰が眼にも船人と喚る赭顔の日に焦けきつたる羽勝千造は、酒盃を擧げて一ト口飲みしが、不興氣に復下に置きて、

『フーム』とばかり力無く答へつ、猶其の對手の何事をか語り添ふるを待つが如き意を其の語氣に現したり。

羽勝に對ひて坐せる小男の、面清らかにして桃花の如き山瀬荒吉は其意を悟つて、果して直に言葉を足しぬ。

『ト云う次第なので水野君は來んのさ。今話した内情も解つて居たので、今日の會合の發起人の僕は、十分に情理を盡した手紙を興つて、是非出て來るやうにと勧めたんだが、たゞ差支があつて行かれないといふ冷淡極まる返事なんで、仕方が無いと斷念めて仕舞つた。實に水野君にも似合はない、全然無茶苦茶になつて居られるのだからね。』

見る／＼羽勝が面には憂色現れ、その眼は沈思に凝然と動かずなりたり。

羽勝が左方に坐して黙々と飲み居し骨太岩疊づくりの日方八郎は、突然として牛の吼ゆるが如くに叫び出し、

『山瀬、貴様も今は堂々たる新聞記者だ。往時のやうに想像談や法螺話は語るまいな。』

と、詰り氣味に問ひ糺せば、山瀬は聊か怫然として、

『日方陸軍少尉殿に伺ひます。報告は無責任を以て作爲すべきものでござりまする歟。はゝはゝはゝ。』

と遣り返して笑ふ。

日方は山瀬の戲言には頓着無く、怒れるが如く眞面目になりて、

『ムゝ、して見れば全く事實と見える。イヤ怪しからん、實に怪しからん。何だ！。愚劣極まる！。馬鹿々々しい。ナニ？。戀愛に陥って苦悶しちよる、それで朋友の集會にも出席しないと？。たッ白痴野郎め、何といふ事だ。そんな愚な奴では無かつたが、魔にでも憑かれ居

つたか、下らない。山瀬、貴様も幹事甲斐がない。其様な生温つこ  
い事を云はす法が有るか！。領上に手を掛けて引摺つて来りやあ、  
一同で引擲いて正氣に仕て遣るのに。』

ゑゝ、理由を聞かぬ間は知らぬが佛で腹も立たなかつたが、聞いて見  
りやあ馬鹿々々しくつて腹が立つ。山瀬！。一體貴様が薄つぺらで眞  
底からの信實氣が足らん。本來我々七人は何様いふ交情だ。みんな野  
州の田舎漢、碌な親を持つたものは一人も無くつて、役場の書記や小  
學教師、乃公あ人力車も曳ぱつた貧書生だが、自己が腕膺で食ふ貧乏  
同士、何時と無く知り合ひになつた七人が、男兒と生れて此狀ぢやあ  
死ねぬ、志すところは異つても互に助け助け合つて、有時は兄となつ  
て學資も貢ぎ、有時は弟となつて恩を報じ、勵み合い擁護ひ合つて進  
んで行つたら、世に立つて生き甲斐のある身ともなれやうと、七人集  
まつた宇都宮の二荒山神社の廣前で、此の願此の心渝るまじ、必ず  
信義を盡し合はんと、神に誓つた交情では無いか。指折り數ふれば速  
いもので既七年の往時になるが、其時からといふものは段々と、苦し

い同士で無理才覺、三人の財布を揮つては一人の遊學の支度を拵へ、五人の着物を賣つては一人の身の立つ本錢とするといふ始末で、ポツリ／＼と皆東京へ、漸く這ひ出してそれ／＼に、志す道へと身を入れ、如是交情だのに何の事だ！。胸糞の悪い戀愛なんぞに水野が迷つてゐるなら何故打棄つて置く？。ゑかも羽勝が始めて首尾よく遠洋漁業の長い航海を、終つて來た今日の欣喜の集會に、自己が勝手の女沙汰のために不參とは、我々を踏み付けた憎い我儘。山瀬汝は何故打棄つて置く？。汝が新聞記者になつた時は、我我七人皆揃つた。乃公が士官候補生になつた時にも皆集まつて悦んで呉れた。羽勝の今日の祝賀の會には、樫井は北海道に行つて居り、名倉は病氣、二人缺けて居るさへ残念なに、水野まで來ぬので只四人、第一羽勝君にも氣の毒千萬だ。戀愛も糞もあるものか、世間一統の愚物は知らず、何時でも現在に満足せいで、永久に進んで飽くこと知らぬを理想と定めた我我七人、戀愛なんぞといふアタ嫌らしい濕氣の蠱に、魂魄を蝕せて居る間は無い筈。一體全體癩に觸る！。何を讀んでも何處へ行つても、此頃

は戀愛といふ奴ばかり轉げて居るが、戀愛たあ何だ？、何だ正體は？。自己から見やあ貴いか知らぬが、他から見やあ石決明を當てがつて遣る價值も無い馬糞に劣つた貨物で、高が女にびりつく事だ！。水野は醜い醋のやうな恐ろしいところのある奴ぢやつたが、浮世に感染れたのは氣が緩んだ歟。打棄つて置ては利益にならん。直これから行つて引摺つて來やう。さあ山瀬！ 一緒に行け、立たぬかやい。水野めを引張つて來て此處で諫めて聽かずば擲き撲つて、正氣に返らせて呉れにやならぬ、さあ立て山瀬！。』

と云ひざまに、五分の慷慨、五分の醉、山瀬が肩頭を引攪んで氣勢猛に立上つたり。



## 其二

薄墨の夕の色は物蔭より擴まりて、廓然と晴れやかなりし樓の上も、  
手許やうやく暗くなり、いづくに歸る鶉の鳥の、浪を摩つて飛ぶ羽音  
も寂びたり。右の方は高輪八ツ山品川の一トつゞき、森も人家もたゞ  
一ト筆のなすり書と黒み、左に低き築地月島、洲崎は微にして消えん  
とする時、其處に電燈の白々と輝き出づれば、燈火華やかに此家にも  
點きて、室の内ぱつと明るくなり、外は全く海玄く風睡れる穏やかな  
る夜となり畢んぬ。  
日方が急き込み調子に物言ひても、特更に沈着を爲れる山瀬荒吉は、  
言ひ争はんともせで良少時、何事をお思ひ廻らし居けるが、今しも燈  
火の光を得て、心の中に索ね得し言葉の緒をや求め得けん、逸りきつ  
たる日方の面の、いさゝか怒をさへ帶びたるを、愛するが如く打見や  
りて、

『マア坐つて呉れ、日方！。成程打棄つて置ては水野の不利益になるから、君と一緒に尋ねて行つて、随分忠告も試みやう。併し水野のところは大分遠い。連れて来るにしても時間がかかる。もう此の通り夜にも入つて居る。連れて來たにしたところで話す間も無い。第一左様で無くつてさへ、七人の中が三人缺けて、四人しか居らぬ此の席を、君と僕と二人脱けて仕舞へば後は何様だ。羽勝君と島木君とたつた二人だ。今日の客たる羽勝君を、島木君と只二人に仕て仕舞つて、僕等が出て行くといふのは勝手過ぎる。それでは餘り無禮になる。こゝを無理に君と二人で行つたら、水野には成程親切にもならう。併し羽勝君には失敬に當らう。もとゝゝ君が怒り立つたのも、つまりは水野が羽勝君に對する仕方が冷淡だといふのにあらう。羽勝君に満足を感じしめぬ其事が悪むべき我儘だといふのだ。それなのに今僕等が此席を去つては、たゞ淋しさを増すばかりで、羽勝君はいよくおもしろく無く感じやう。今日は既十分に談笑も仕て、大分酔さえも廻つて居る。談話の序から不圖水野の事が出て、始めて君は其を聞いたと

ころから、大に忌はわしくも感じたらうが、何も今が今でなくちやならぬといふ事では無いから、彼を訪ふのは明日でも明後日でもの事として、其時戀愛嫌ひの君の存分に、諫めるとも擲るともするが宜からう。今日は先づ堪忍して一同と共に、飲んで居て呉れたつて可いでは無いか。』

と、他の言ふところは斜に外らせて、我が言ふところは斜に徹す才士の面は笑を湛へて、巧に粗獷なる相手を制すれば、正直三昧の日方は、脆くも、羽勝を重んずる情より、

『ムー、此の席が淋しくなる？。ア、其處へは些も氣がつかなかつた。成程今直引張つて來やうと云つたのは、乃公が悪かつた。こいつは一番山瀬にやられた。ハ、ハ、ハ。どうも山瀬は乃公より伶俐だ。ハ、ハ、ハ。』  
と、露ばかりの我執も無く笑つて仕舞つて、霽々したる顔色にも著き胸に何も遺さぬ有様は、譬へば風過ぎて林おのづから靜に、雲去つて山更に青きが如くなりしが、例の癖とて突然と、

『や、時に羽勝君一盃呉れたまへ。』

と云ひ出した。羽勝は機嫌良く盃をさして、  
『相變らず君は君の氣風で押通すナ。どうだ軍隊の生活は愉快かネ。』

と懷かし氣に問へば、

『ム。左様さ。快活な事ばかりといふ譯にも行かん。僕等の身分では随分箱詰になるのを甘んじなけりやならん事もあるが、其が即ち規律で、規律が即ち精神である、といふやうに考へて居りやあ、別に窮屈にも感じない。ホワイトシャツを着慣れて見ると、彼の硬いものを身につけるのが、却つて好い心持に思へて来る。丁度それと同じ事で、慣れてみると嚴肅な中には愉快があるから、僕はまあ不愉快には日を送らん。』

と答へて其の盃を乾して洗ふ。

『左様だ。規律を尊重する中には愉快がある。そして何の方面の事でも規律は大切だ。船の中などは特に然様だ。そればかりぢやあ無い、僕が私に思ふには、身體を扱ふのに規律が無いと身體が衰へる、心を扱ふにも規律が無いと心が歪んで、そこで戀愛など、いふものに取り憑

かれるのだ。』

と云ひながら徐に酒盃を受くれば、日方は

『確論、確論。』

と悦び叫んで、自ら酌を仕て遣らんと徳利を擧ぐれば、既飲み盡して二三滴のみ。山瀬は急ぎ手を拍き立つ。

此時までにやくくと笑ひながら、人々の談をのみ聞き居たりし布袋肥所に肥つたる、丸顔の眼下りなる島本は笑つて、

『ハ、、談話が惡つ固いから堪りやあ仕無い。婢だつて何だつて逃がたつきりだ。徳利の番兵は野暮ぢやあ使へ無えからな。ハ、、何だ。い。規律が無いといけ無いつて？ 戲談言つちやあいけない、舞臺に障るぜ。不規律の大將、實業家兼虚業家、相場師になつたつて、一同に怒られた、御利益は未だ蒙ら無いが拝金宗の信徒の、島木萬五郎様が此處に御坐なさるぜ。憚りながら乃公が何時戀愛に取り憑かれた。ハ、、其りやあ左様と水野の談は譯有つて一番乃公が知つている。どうも一同が氣に仕て居る。羽勝の腹の中では取り分け深く心配して

其二

居<sup>ゐ</sup>るやうすだから話<sup>はな</sup>して聞<sup>き</sup>かさうか。』  
と、始<sup>はじめ</sup>は戯<sup>たはむ</sup>れ、終<sup>をわり</sup>は眞<sup>ま</sup>面目<sup>じめ</sup>に云<sup>い</sup>ひ出<sup>い</sup>づれば、  
謹<sup>きん</sup>聴<sup>ちやう</sup>の聲<sup>こゑ</sup>は異<sup>い</sup>口<sup>く</sup>一<sup>いつ</sup>齊<sup>せい</sup>に出<sup>い</sup>  
でぬ。

## 其三

島木しまぎは驕おごれるにもあらず、慢あなれるにもあらず、たゞまた、かなる放肆だうつこ兒この、一家いつかの長者ちやうじやをもはゞからずして、自己おのの勝手かつてに泣なきも笑わらひもするやうに、ゑかも其その小兒こどもらしき顔かほに微笑ゑみをうかめて、

『ハ、ハ、ハ、日方ひかたまでが謹聽きんちやうと吐ぬかし居をつたな！。一體いつたい汝きさまは人ひとは好よいが、我がばかり強つよくつて思おもひ遣やりが足たらない。此この思おもひ遣やりの足たらない手合てあひが、他人たにんの戀愛れんあいの談はなしなどには、兎角とかくに點頭がってんしかねるものだ。線せんの無ない家うちにやあ電話でんわは通つうじない、思おもひ遣やりの足たらない奴等やつらにやあ戀愛れんあいは解げせない。そこへ行いつちやあ乃公おれなんぞは、身みに經驗おぼえがあつて同情おもひやりが強いから、ツーと云いやあカーと合點がてんがいくので、初心うぶな水野みづのの譚はなしなんざあ、何程いくら彼あれが心こころの奥おくに秘かくして居おつても、深い井いの床そこを鏡かみで照てらして、見て取るとるやうに譯わけも無なく見抜みぬく。本來ほんらい戀こひといふ事ことが罪惡つみぢやあ有あるまいし、日方ひかたのやうな暴論ばうろんの愚論ぐろん・・・』

と云ひかくる時日方は堪へず、

『何だ、暴論だ！。こりやあ怪しからん。汝も戀愛の奴隷臭いぞ。身に経験があつてとは何たる囁語だ。聞きぐるしいことを吐さずとも、さつさと水野のことを話すが可い。』

と怒鳴りつくれば、此方はいよく笑い傾き、

『安心しろ日方！。乃公あ女に惚れて戀はおぼえねえ。ヘン惚れられて惚れられて戀といふものは此様なものかと知つたんだからナ。アハ、、、、何様だい奴さん、如何でござる！。そこで惚れられて惚れられて悟つて見ると、水野を辯護するといふ譯ぢやあ無いが、戀は人間の情の自然の發動で、何も咎め立てをすることは有りやしない。日方にやあ日方だけの愚論もあらうが、乃公あ戀に迷つた彼の水野を、憫然だたあ思ふが惡かあ思はねえ。』

と云はせも果てず日方は目を剥き、

『馬鹿野郎ッ。』

と烈しく罵しつたる裂帛の一聲に氣合籠つて、人の肺腑に響き徹し



たり。

『マア待ち玉へ。』

『争つちやいかん。』

と、口を衝いて出でたる山瀬羽勝の二人の言葉は一句と一句と断る、  
間無く巧に續きて、突差に緊しく制し止むれば、流石に日方も羽勝を  
憚りて、言はんとして言はず已みけるが、眼には猶稜角を立て、島木  
を睨み、此の時遅く彼の時速く、

『そら又馬鹿野郎が御來臨なすつた。ハ、ハ、ハ、何程罵られても相手には  
ならねえ。汝は乃公に楯をついても、乃公あ汝を生吞に吞んで、そ  
して腹にも障らねえから。』

と、島木の冷やかに一矢酬ゆるに、

『何だ、呑んで居る。可矣ツ、吞まれたつて鐵釘が何となる！ 曲りも  
仕無いは！。丸くもならんは！。』

と、日方は又直に熱して答ふ。  
悠然と笑を含める羽勝は靜かに、

『可いさ、二人とも、もう可いさ。ハ、ハ、互に其の位威張つたら可いぢあ無いか。島木は日方に關はないで僕に話すつもりで話して呉れ玉へ。日方はまた島木に關はないで僕に交際つて聞て居て呉れ玉へな。つまりお互に水野の上が知りたいのだからネ。』  
と、優しく制すれば、

『や、濟まなかつた、僕が悪かつた。』

『ア、左様云はれりやあ乃公も下らなかつた。』

と日方も島木も争ひ止みて、誰勸めねど同じ思ひの、双方一時に酒盃を交して、笑つて仕舞つて痕跡もなし。

島木は此度はや、眞面目に、羽勝の方に向つて語り出したり。

『一同も知っている通り彼の水野は、我等の中では一番年下、乃公が今年は二十七だから、七、六、五、四と四つ目で丁度二十四だ。宇都宮から東京へ上る時にも、一番先へ出たのは羽勝だったが、一番後へ残つたのは水野だつた。若いに似合はず能く出来たから、君は若いけれども學業が出来、早く東京へ出て身を立てるが可いと、勧めたのは

乃公おれひとり一人で無なかつたが、いや小生わたくしの志こころざすところは些ちとちが違ちがふから、左様さう急いそがないでも可いい事ことだ、他ほかの人ひとは一日いちにち遅おそければ一日いちにち損そん、少すこしも疾はやく上京じやうきやうするが可いい、と妙めうに片意かたい地に謙遜けんそんして出でず。二番にばんに出でたが日方ひかた山瀬やませ、それから名倉なぐら、それから櫛井くし、それから乃公おれで、其後そのあとから漸やつと上京じやうきやうした。其その位くらゐ異おつに固かたいところのある男をとこで、東京とうきやうへ出でてからも一同みんなは誰たれしも、身みを立てる道みちに汲きく々くとして、随分ずぶん骨ほねを折をつてそれごとくに、辛からく出世しゆつせも仕して來きたに、彼あの男をとこばかりは澄すましかへつて、今いまでも小學教師せうがくけうしで甘あまんじて居おる。それで情なまけて居をるのかと思おもへば、一寸いっすんの暇ひまも惜をしんで勉強べんきやうして、あらゆる方面はうめんに行ゆき渡わたつて居ある。僕ぼくは一生いっしやうをかけて此この世よの中に、たゞ一篇いっぺんの詩しを留とどめれば可いいのだ。今いまは其その準備よういに勤つとめて居あるので、他ほかに慾よくも無なければ望のぞみも無い、半熟なまにえなものを世よに出だして、今いまつから文人ぶんじん顔がほするのほも差はかしいから、もう十年じうねんばかりは小學とく讀本ほんいぢりで、たゞ勉強べんきやうをするつもりだ、と隱君子いんくんし氣質かたぎで日ひを經へて居あたのは、羽勝はがちはじめ一同みんなも知しつて居あやう。ところで此この乃公おれは金かねまうけ主義しゆぎ、卑いやしいと云いつて一同みんなに罵ののしられた位くらゐだから、守まもるところの

ある浪人肌の、水野と氣の合ふ譯は毫も無いが、他の五人は上京して、二人だけ宮に残つた時、彼が熱を病んだのを介抱して、長い看護を爲て遣つた、其事が鎖になつて此地へ來ても、取り分け二人は親しく仕て居た。ゑかし乃公あ俗物、水野は仙骨、此方は飛んだり跳たりして悶躁いて居るので、中々往來することも多くは無かつた。さあ此處で白狀仕しなけりやならないが、丁度一昨年の暮だつた。實は此の乃公が山氣に逸つて、危ない橋を渡る輕業をやつたところ、運が悪くつて可厭な目が出て、甘く行きあ論はないことが打壞れたんで、たつた五十兩ばかりの有無で何様にも仕切れない機會へ臨んだ。そもく、投機を始めた其の時から、乃公あ危い事をする代りにやあ、乃公が一六沙汰を廢めぬ内は、金錢に關つた事では決して一同に、苦勞は掛けぬと誓言を立つた表があるから誰にも云へず思案に餘つて獨語のやうに、其譯を水野に話して見ると、手箱の底から書いたものを出して、此を山瀬君に頼んで賣つて貰つたら、其位の金は出來るか知れぬ、出來たら使ひ玉へといふ話。當にはならないと思つたが、山瀬に頼むと

其事そのが出来できて、そこで大おほきに助たすかつた。其そのの味あじを占しめたといふのでは無  
 いが、其そのの後のちも種子たねを耗すつた其時そのときは、三度さんどといふもの助たすけて貰もらつて、  
 矢種やだねをつぎく戦たたかつた末すゑ、どうやら遣やつて行いかれる身からだ體だになつた。そ  
 こで水野みづのに對むかつて乃公おれがいふには、貰もらつたものを返かへさうとは云いはない  
 が、金かねが要いる時ときは何時いつでも云いひたまへ、乃公おれが懷中ふところだけなら洗さらけ出だす  
 から、と此この春遇はるあつた時とき云いつて置おいた。ところが金かねを使つかふ水野みづのでは無  
 し、たゞ其限それぎりで濟すんで居ゐたが、此この夏なつになつて遣やつて來きて、眞赤まっかな顔かほ  
 をしてきまり惡わるさうに、三十兩りやうばかり貸かして呉くれる、と云いつたのが最  
 初まりで其後そのちも、ぼつりくと持もつて行ゆく。其事そのが乃公おれが勘かんを付つけたはじ  
 まりだつた。

## 其四

考<sup>かん</sup>へて見<sup>み</sup>りやあ合<sup>が</sup>點<sup>てん</sup>がい<sup>な</sup>かない。多<sup>た</sup>分<sup>ぶん</sup>では無<sup>な</sup>いが給<sup>き</sup>料<sup>りょう</sup>も取<sup>と</sup>るし、別<sup>べつ</sup>に  
蕩<sup>だう</sup>樂<sup>らく</sup>の無<sup>な</sup>い男<sup>をとこ</sup>だから其<sup>それ</sup>金<sup>金</sup>で一<sup>ひとり</sup>人<sup>にん</sup>身<sup>み</sup>の今<sup>こん</sup>日<sup>にち</sup>を濟<sup>す</sup>ませ<sup>て</sup>、剩<sup>あま</sup>餘<sup>り</sup>で書<sup>しょ</sup>物<sup>ぶつ</sup>を買<sup>か</sup>  
つて讀<sup>よ</sup>む位<sup>くらひ</sup>の事<sup>こと</sup>。その書<sup>しょ</sup>物<sup>ぶつ</sup>を買<sup>か</sup>ふにもたゞは買<sup>か</sup>はないで、何<sup>いつ</sup>時<sup>じ</sup>でも讀<sup>よ</sup>  
んで了<sup>しま</sup>つたのを下<sup>した</sup>に遣<sup>や</sup>つて、ま<sup>よ</sup>だ讀<sup>よ</sup>まぬものと取<sup>とり</sup>換<sup>か</sup>へる。それ<sup>それ</sup>を自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>  
でも可<sup>を</sup>笑<sup>かし</sup>がつて、何<sup>なん</sup>の事<sup>こと</sup>は無<sup>な</sup>い僕<sup>ぼく</sup>の爲<sup>す</sup>ることは書<sup>ほん</sup>肆<sup>や</sup>のた<sup>た</sup>めに、一<sup>まい</sup>枚<sup>まい</sup>  
蠹<sup>まい</sup>拂<sup>むし</sup>ひを叮<sup>てい</sup>嚙<sup>ねい</sup>に仕<sup>し</sup>て遣<sup>や</sup>るやうなものだ<sup>い</sup>と云<sup>い</sup>つて居<sup>ゐ</sup>た程<sup>ほど</sup>。併<sup>しか</sup>し左<sup>さ</sup>様<sup>やう</sup>い  
ふ遣<sup>や</sup>り方<sup>かた</sup>をして少<sup>すく</sup>な<sup>な</sup>錢<sup>ぜに</sup>で多<sup>おほ</sup>く讀<sup>よ</sup>む、それ<sup>それ</sup>だ<sup>だ</sup>け始<sup>しま</sup>末<sup>まつ</sup>の好<sup>よ</sup>い賢<sup>かしこ</sup>い水<sup>みづ</sup>野<sup>の</sup>が、  
何<sup>なん</sup>の彼<sup>か</sup>のと云<sup>い</sup>つては金<sup>かね</sup>を持<sup>も</sup>つて行<sup>ゆ</sup>く。ハテ是<sup>これ</sup>にやあ何<sup>なん</sup>ぞ仔<sup>さい</sup>細<sup>さい</sup>があら  
う、譯<sup>わけ</sup>が無<sup>な</sup>くちやあ要<sup>い</sup>らない金<sup>かね</sup>だ。い<sup>い</sup>くら表<sup>うへ</sup>面<sup>めん</sup>は物<sup>もの</sup>柔<sup>やは</sup>らかな君<sup>くん</sup>子<sup>し</sup>風<sup>ふう</sup>で、  
腹<sup>はら</sup>の底<sup>そこ</sup>にやあ恐<sup>おそ</sup>ろしい高<sup>かう</sup>慢<sup>まん</sup>、世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>中<sup>ちゆう</sup>の奴<sup>やつ</sup>を相<sup>あひ</sup>手<sup>て</sup>に<sup>て</sup>も、鼻<sup>はな</sup>の頭<sup>さき</sup>  
で笑<sup>わら</sup>つて居<sup>ゐ</sup>やうといふ沈<sup>しつ</sup>毅<sup>かり</sup>漢<sup>もの</sup>の、彼<sup>あ</sup>の水<sup>みづ</sup>野<sup>の</sup>でも、年<sup>とし</sup>齡<sup>れい</sup>やあ年<sup>とし</sup>齡<sup>れい</sup>だ。桃<sup>も</sup>  
の速<sup>はや</sup>いのも柿<sup>かき</sup>の遅<sup>おそ</sup>いのも、いづれ時<sup>とき</sup>が來<sup>く</sup>りやあ花<sup>はな</sup>は咲<sup>さ</sup>き出<sup>で</sup>す。才<sup>さい</sup>はじ

けたも謹まやかなも、時節因縁で情が萌える。乃公のやうな早熟やあ  
 十七八から、白粉や油の香に鼻もひこつかせたが、其代り浮氣の掛け  
 流しで、笑ふのも泣くのも二日か三日限り、思ふも思はれるも實は無  
 くつて、のほゝんで今日まで無事に來たが、水野のやうな彼様な男が、  
 悪くすると唯一途に純粹の、眞正直な戀に落ちて、人にも知らさず  
 獨り苦しみ、思ひ詰め思ひ詰めて忘れる間も無く、胸に解けかねる凝  
 塊を出かして、長く／＼悶へて悩むともあるもの。若や其様な事で  
 もあるならば、朋友のよしみ、年上の甲斐、特には誰にも知らさず内  
 々で、恩を受けて居る譯合もあり、一ト心配仕無けりあならぬと意を  
 定めて、さて其時から水野の様子を見ると推量の通り。何と無く人に  
 隔心がある。何と無くそは／＼としたところがある。此方から話す  
 談には身を入れて聞かぬ。彼が話す談には氣焔が足らぬ。人と對ひあ  
 つて坐つて居ながら、談話が一寸斷えれば胸の中では、既他方の事を  
 思つて居る様子。將來の希望は餘り言はずに、やゝもすると過ぎた事  
 を云ひ出しては、無邪氣だつた往時をなつかしがる。試みに浮世話を

三種四種爲て、何の話が彼の胸の中と響き合ふかと、探つて見れば全  
 然分つて、此の絃に和つて鳴るのは其の絃と、判然と正體の合點がい  
 った。さあ打棄つて置く譯にやあ行かない。相手さへ好けりやあ仔細  
 は無いこと。南方へ枝がさして花が咲くに何の罪！。人情の溫暖を  
 得やうとおもつて、若い心の動き出すのが何無理だらう！。年齢が年  
 齡だもの、有り内の事だ。然し縁は異なるもの危いもの、よもやとは思  
 ふけれど、萬が一にも、素性や筋の悪い女が相手だった日には水野の  
 不幸、止め立も争ひ立も仕無けりやならぬ。金の要るだけに氣が、り  
 などころがある。と思つたので乃公の身體にやあ暇も無かつたが、或  
 日水野の不在を覗つて、水野を置いて世話をしている山路の老夫を捕  
 へて糺しかけると、彼の老夫も中々の親切者で、特さら水野の平生の  
 品行に惚れて居るので、實は水野様の御利益を思つて、貴下でも御来  
 臨になつたら申し上げたいと、内々願つて居たところでござりました、  
 といふので一切の事情は老夫の口から知れた。



## 其五

老夫の談話を聞いて見りやあ水野は實に憫然だ。勿論其の老夫の云つたことが一から十まで眞實とも限るまいが、岡目の評判なり老夫の言葉なり、大體は違ふ氣遣はあるまい。そもくは今年の春の始、水野の出で居る學校の女教師が一人故郷へ歸つたので關員が出来た、其の補闕として新に來たのが、まだ教員になりたての、年の若い岩崎五十子といふ女だつた。老夫も度々見て知つてゐるさうだが、極可愛らしい惚れくするといふやうな顔立では無いけれど、眼の清しい鼻の高いい端然とした女で、まあ當世の下司根性から云へば、あれだけの容貌をもつて居ながら、何だつて教師なんぞになつて居るだらう、と陰口も云はれ兼ねない女ぶりださうさ。まかも、容貌の佳い奴は十人が八人まで、兎角他人に甘つたれるやうな調子があつて、學問などは得て出來ないが、中々其女は能く出来る上、それこそ日方の云ひ草ぢやあ無

いが、いつでも現在に満足しないで、永久に進んで飽くことを知らぬ  
 歟、感心に自分は自分の勉強を仕て居るさうだ。ゑて見りやあ容貌も  
 佳いし、心掛も可いし、別に難はない女なんだ。左様いふ女が現れた  
 ので、學校の内でも外でも珍らしがつて、何とか彼とか評判が立つて  
 居たが、其内に水野が迷ひ出した。何様いふ機會から水野の心が其女  
 に傾いたかは解らないが、乃公が思ふにやあ別な事はない。淨瑠璃の  
 文句にある通り、琥珀の塵や磁石の針で、眼に見えて何處が何様とい  
 ふ事は無いが、たゞ譯も無く引き寄せられて、心が其處へ行くのが  
 戀の習ひだ。こりあ俗物でも仙骨でも同じ事、いくら水野が俊才だ  
 つて、生血を包んだ五尺の身體を、抱へて居るのだもの無理も無い、  
 矢張り年齢が年齢だから迷つたんだらう。ゑかし相手も商賣人ぢあ無  
 し、水野も獨身で居なけりあならぬといふので無いから、全く深く思  
 ひ込んだものならば、縁を纏めりやあ其で可いのだが、さあ、水野の  
 不仕合といふのは其處の事で、俗にいふ蟲が嫌ふといふものでゝもあ  
 らうか、其女が水野の眞心を受け納れぬので、それで水野は懊惱して

居るといふのだ。もつとも水野が明らかに、其女に何事を云つたで  
もあるまいが、これは世間に老いた山路の老夫が、水野の様子を見て  
察しての話だ。さて其にしたところで其限りの事なら、芥火の燃え  
るやうにぶすりぶすり、水野が物を思つて居るだけで済むのだが、  
こゝに其の五十子の親にお關といふ、可憎な強欲な惡婆がある。勿論  
生の母では無くつて、五十子とは別々に住んで居るほど、氣性も合は  
ねば仲も悪いのだが、時々五十子のところへ來ては無理を云つて、無  
け無しの金を絞つて行く。其奴が水野の腹を見て取つて、其の初心な  
ところに付け込んで、いろいろさまざまな事を云ひ散らしちやあ、つ  
まり幾干かつ、捲き上げるさうだ。金は些少の事だから仔細は無い  
が、金を取らう爲ばかりに其婆めが、好い加減な事を云つて煽り立  
つて燃え立たす。ところが一方ぢやあ又、肝心の人によそ／＼しく  
冷っこく待遇はれる。火にあひ水にあふのだから敵はない、水野の心  
の靜穩なことは、今は一時でも有りさうも無い譯。そこで今までの  
行状とは打つて變つて、家に居る時は鬱々として、たゞ沈みきつて物

も言はず、机に對つても書は讀まずに、長太息を吐く時のみ多く、朝は心よく起きる日も無く、夜も寐苦しく過すさうだ。これは乃公が老夫から聞いたゞけで、無論山路の老夫のつもりでは、乃公に意見して遣れといふのだつた。あかし乃公は乃公の考で、水野のためには幾干でも、盡力したいと思つて居ることは思つて居るが、意見を仕て利益になりさうな筋では無いと、見切つてつい其儘に過ごして來たのだ。』

辛くも此時まで堪へたりし日方は再び叫び出しぬ。

『何故意見を仕ても利益にならん？。意見を仕無いで何と爲るんだ？。何様して水野の爲に盡力す？。』

『乃公あ出来る事なら水野の思ひの、徹るやうに爲て遣らうと思つて居るのだ。』

『何だと、馬鹿野郎ツ！、愚にもつかん！。そんな下らんことがあるものか、貴様は一體腐敗して居る！。』

『また馬鹿呼はりをするナ！。汝こそ馬鹿だ。意見して役に立つ位なら乃公が爲るは。人は銘々に所考がある。乃公は乃公、汝は汝で可矣ぢ

やあ無えか。意見が仕たけりやあ汝爲ろ。』

『勿論だ。諫めて遣らないで何様するものか。女が美しくても悪くつても、何だ！、女が！。苟くも大丈夫たるものが高が一婦人に、志を喪ふとは何たる事だ。實に怪しからん、はがゆい奴だ。是非尋ねて行つて大に諫める。』

二人の問答はこゝに已んで、山瀬は爽やかに口を開きぬ。

『僕は他人の意思感情の自由を尊重するから、立入つては敢て兎角を言はぬ。まかしこれは水野君のために不利益と思ふから、一應は忠告を試みるつもりだ。』

人皆語れども羽勝は語らず、たゞ僅に吁然と息つけば、手にせし巻煙草の灰の長く續けるが、ぼたりと膝の上に落ちて脆く散つたり。

夜色は樓外に沈々として、澄みわたりたる天にかゝれる星斗は爛然と明らかに、明日は風にや其の大なるは、いづれ煌々と瞬目して、光の芒は搖ぎに搖げり。

## 其六

山瀬が催せし小集の、竹芝の浦に開かれし日なり、これは東京を丑寅に離れし東武線の鐘淵の停車場より、上り瀛車の今や出でんとするに駆け付けて、辛くも乗り込みし水野靜十郎は、車室の一隅に身をおちつけて、煎りつくが如き急き心に少からぬ路程を走り來りし胸の轟きを纔に息めぬ。

車窓の外は、目に障るものも無く廣々としたる葛飾の秋の稲田に、金色の夕陽の光線明るく斜に落ちて、折々ぱつと立つ群雀の空に散る景色も、土用の早の足りて豊なる年のゑるしと好もしく、暑かりし夏の日の汗の滴は、今皆やがて粒々の實となつて現るべき快き眺望なり。されば乗り合はせし人々も悦び顔して、

『先づ此の分に行きやあ豊年ですが。』  
と股引に草鞋穿きの農夫らしきが真先に云い出せば、

『さうです、風さへ無きやあ既大丈夫です。おほかた不景氣も直るでがせう。』

と同じ風の男が云ふ。その後より髪<sup>かみ</sup>の毛<sup>け</sup>を綺麗<sup>きれい</sup>に分けたる生意氣<sup>なまいき</sup>の若<sup>わか</sup>き男<sup>をとこ</sup>の、これは商人<sup>しやうにん</sup>と見えたるが、

『何<sup>なに</sup>にしる此夏<sup>このなつ</sup>の暑氣<sup>あつさ</sup>のおかげですもの、此位<sup>このぐらゐ</sup>の事<sup>こと</sup>あ無くちやあなりませんや。暑<sup>あつ</sup>かつた事<sup>こと</sup>あ無法<sup>むはふ</sup>に暑<sup>あつ</sup>うございましたが、何様<sup>どう</sup>でしやう全國<sup>ぜんこく</sup>ぢやあ其<sup>それ</sup>がために、去年<sup>きよねん</sup>に比べりやあ一千萬石<sup>いつせんまんこく</sup>も餘計<sup>よけい</sup>に穫<sup>と</sup>れる算盤<sup>そろばん</sup>だつて云<sup>い</sup>ふんですからなア！。一石十圓<sup>いつこくじうゑん</sup>としても一億圓<sup>いちおくゑん</sup>、四千萬人<sup>よんせんまんにん</sup>に割<sup>わ</sup>つてみると、一人前<sup>いちにんまへ</sup>が二圓五十錢宛<sup>にゑんごじうせんづゐ</sup>、畢竟<sup>つまり</sup>それだけ宛暑氣<sup>づゐあつさ</sup>の我慢賃<sup>がまんぢん</sup>に貰<sup>もら</sup>つたやうな譯<sup>わけ</sup>に當<sup>あ</sup>たりますから、随分暑<sup>ずぶんあつ</sup>かつたのも無理<sup>むり</sup>は有りません。併<sup>しか</sup>し如<sup>かう</sup>是<sup>は</sup>なつて見<sup>み</sup>りやあ有<sup>あ</sup>り難<sup>がた</sup>いもんで、屹度<sup>きつと</sup>景氣<sup>けいき</sup>も好<sup>よ</sup>くなりませあネ。』

など、口々<sup>くちぐ</sup>に語<sup>かた</sup>りあへど、思<sup>おも</sup>ひあ身<sup>み</sup>の水野<sup>みづの</sup>一人<sup>ひとり</sup>は、景色<sup>けしき</sup>も眼<sup>め</sup>に更<sup>さら</sup>に見<sup>み</sup>ざるがごとく、談話<sup>はなし</sup>も耳<sup>みみ</sup>に更<sup>さら</sup>に聞<sup>き</sup>かぬが如<sup>ごと</sup>く、身<sup>み</sup>じろぎも多<sup>おほ</sup>くはせで寂然<sup>じやくねん</sup>と坐<sup>すわ</sup>りつ、たゞ帶<sup>おび</sup>の間<sup>あひだ</sup>より時計<sup>とけい</sup>を出<sup>いだ</sup>して、恰<sup>あだか</sup>も氣車<sup>きしや</sup>の速力<sup>はやさ</sup>を疑<sup>うたが</sup>ふ

やうに、幾度か其の鍼を甲斐無く視詰めぬ。淺黒き其の面は底に蒼色を帯びて、鳳眼とやらん人のいふ魚尾上りの眼は、どんよりと曇りて光り澱み、やゝ狭き鼻はつんと高くして、血の色薄き一の字口の唇は、復び開かるゝ時の無からん如くに飽まで緊しく閉られたり。眼鼻立は醜きにあらぬ男ながら、水野が今の顔の氣色は、稚兒は之を望まば怖れて泣くべし。

瀟車のやがて吾妻橋停車場に着きし時には、暮れやすき秋の日は既没りて、千點萬點の燈火に飾られたる夜の東京は眼の前に現はれぬ。

水野は人を突き退くるまでに忙がはしく歩みて、忽ち停車場を出で、忽ち吾妻橋を越え、忽ち茶屋町を過ぎ、忽ち並木を経て、忽ち藏前に至り、其處に住へる月日は未だ長からねど、淺草一との噂を得たる醫學士相良公平の玄關に至り、

『頼む。』

と一聲音づれたり。



其七

應と答へて出で來れるは、盤臺面の鼻の下に薄髭しよぼくと煙の如く生えたる、二十七八の物體ぶつた男なり。水野が紺飛白の單衣に、着皺も見ゆる薄羽織といふ身の周圍を見て、突立ちたるまゝ、尊大に、『もう診察の時間は濟んだが。』

と云ひかけしが、また其の顔色の好からぬを見て、

『お前さんかね。』

と僅に愛想あり。

水野は叮嚀に會釋して、

『イヤ私ではございません。御書留置き下すつたといふ事ですが、昨日使丁を以つて願ひました四木村の平井と申す者の方の病人、岩崎五十といふものを御來診願ひたいので出ましたのです。』  
と云へば、

『ア、其その四よツ木ぎとかいふところは、非常ひじやうに遠とほいところぢやさうだナ。知らんものだから仕方しかたが無い、小梅こうめか請地うけちの近傍ちかくかと思おもうて、ム、可よし矣願ねがつて置いて遣やると僕ぼくが受合うけあつたが、後あとで先生せんせいに酷ひどく叱しかられた！。重病人ぢゆうびやうにんや長病人ちやうびやうにんを澤山たくさんに扣ひかへて居ゐられるから、中々なか／＼其様そのような遠とほいところへ御往診おいでにはなりかねるといふことだ。どうか他家よそへ行いつて頼たのんで見てくれ。』

と、實じつに酷ひどく叱しかられや仕しけむ、其その時ときの不平ふへいは今いまの顔かほに膨ふくれ出だして、逐拂おつぱらつて仕舞しまふつもりものいの物言なひ仁慈な無なし。

二三度四五度呼よびに遣やりける、といふ前句まへくに、引ひく息いきの絶たゆるに醫者いしやのおどろかず、と付つけたるを、西鶴さいくわくが撰えらみし其その疇昔むかしより、世よに勢威いきほひある醫者いしやを、富とみも無なく名なも無なき賤人しやうにんが伏屋ふせやに請しやうじ入いれんとするほど、心こころに任まかせで口惜くちをきは無なし。相良さがらが書生しよせいの冷ひややかなる言葉ことばも、今いまさら珍めづしからぬ浮世うきよの態さまなれば、腹はらは立たてねども差當さしあたつて恨うらめしく悲かなしく、

水野みづのは

『左様仰さうおつしあつては當惑たうわくいたします。實じつは昨日さくじつから今御來臨いまおいでか今御來臨いまおいでか

と御待ち申して居ました様な譯でございますから。』

と云ひかくるを、書生は面倒と云はぬばかりに、

『だから、うつかり受合つた段は僕が謝罪る。たゞし先生は御忙がしくつて御來診になれんといふのぢやから仕方が無いぢや無いか。』

と後を言はせぬやうに壓し被せて云ふ。それを此方は押返して、

『では御座いませうが其處を何卒、もう一度御願ひ下すつて見て頂きたいのです。先生より他の方を願はう氣は無くつて、かうして態々四ツ木から、御願ひに出たのでございますから。』

と、低き聲音に顫動をさへ帶びて、思ひ入つて頭を下げてゑみぐくと頼み聞えぬ。見れば其面は深き憂愁の陰雲に生氣を鎖されて、疑懼に潤める眼の中には、限無き悲痛の色を浮めたり。至誠に動かされて争ひかねたる書生は是非無く立ち上がつて、

『それぢやあ先伺つて見て上げやうから、其處へ上がつて待つて居なさい。』

と、猶水野を田舎漢あしらひにして奥へ行きぬ。

丁度人の途絶えし夜食の頃とて、人も無き玄關にたゞ我ひとり、兀然として坐り居れば、我が影子淋しく古畳に浸みて、偶然見れば低く吊りたる電燈の蓋裏に、弱々としたる白き蛾の、蝶といふほども無く小なるが、やがて力盡きての身の果をも思はず、飛んでは止まり、止まつては飛びて狂ひ居れり。

待つこと少時して間の劃の唐紙をがらりと明けて、書生は復び入り來りぬ。

『何様も他の病家の都合もあつて出られぬと仰ある。氣の毒だけれども他へ行つて下さい。』

言葉の柔しくなりたるだけに拒絶の意はいよく堅し。さりとして病める五十子が曾てより信じて、苦悶の床の上の獨語に頼みたしといひしは、たゞ此の家の主人なるを、いづくにか行き他人を頼まん。水野はほとほと行き詰まりて、言葉も無く力も無く首を垂れしが、搏き已めぬ彼の白き蛾の、電燈の周圍を飛び廻る其の陰翳眼の前にちら／＼と落つれば、噫、我も取りかぬる燈の近傍を、猶去らぬ蟲と愚にも愚な

れど、かひな甲斐無くも飛とび直なほしくするごとく、ことば言葉かを換かへて頼たのみて見みん  
と、そのば其場たは立たたんともせざる折をりから、おく奥はうの方ちやうより丁いしといふ石子ひやの響ひやき、  
たしか確ひとに人の碁ごを打うてる音おとの、かすか幽こなたに此方きこに聞きこえたり。

## 其八

人おのく我が娯樂に使はれるは無し。中にも暮好は聖に近く愚に近  
 く、假の與奪の白黒の石に、氣を遣ひ心を苦めて一切を忘れ果て、一  
 寸の暇を偷んで始めし争戦にも、思はず半日の尻を腐らせて悔まぬが  
 常なり。されば殆ど一日の忙しき業務を終へし擧句、心蘇生へる晚餐  
 の小酌の後に、憎くも可愛くもある其敵を得て、罪無き樂みを取る一  
 手々々の、興の極めて旺なるところへ、熟知にもあらぬ病家の、ゑか  
 も普通外れて遠きより、夜陰に及びて呼び迎へんとするとも、門前の  
 雀羅、藥局の蛛網、客に饑ゑきつたる庸醫はいざ知らず、苟くも名の  
 通つたるほどの人の應ぜざるべきは、思へば無理も無き事情なりと、  
 鈍からぬ水野は早くも悟りしが、物に脆からぬ性質の猶思ひ棄てず、  
 何をか考へ得しや此度は氣輕く、  
 『や、たびく御面倒を願ひまして、有り難うございました。』

と、云ひながら多少錢を手早く白色包にして、

『煙草でも購つて參つて獻げるべきですが。』

と、言葉を飾って取りつくろひ、流石手を出しては取りかぬるを無理やりに握らすれば、まさかに投げ返すこともせず、

『どうも御氣の毒で、』

と、我が師の迎に應ぜぬが氣の毒なやら、我が錢使はせしが氣の毒なやら、どちら付かぬ挨拶して、うづくとりぬ。

印を結び、呪を誦すること、今は流行らず、世にたゞ錢術ありて神に通ずるを、知らぬほど迂闊にはあらざりし水野は、書生が我が人情錢を収めしを見て、

『何様いふものでございませう？ 病人が思ひ込んで居るのでござい

ますから、一度だけなりと診て戴く譯には參りますまいか。こちらの先生の事でございますから、澤山の御病家の御都合もあつて、御暇の少ないのは承知して居りますから、始終來て戴きたいとは申しますまいが、只一度おいでなすつて下さるほどの事なら、然程御暇の取れる

では無し、御都合の出来ぬでも無からうと存じます。一度でも御診察下すつて、そして御指揮を仕て戴いたら、あとは村醫でも間に合はうかと存じますが、病人も信じて居りませぬ村醫ばかりでは、實以て傍觀にも案じられまして、癒るものも癒るまいかと心配致します。貴君には御無理を申して濟みませんが、折り入つて一つ此の譯を仰あつて、も一度何卒御願ひなすつて見てはいたゞけますまいか。』

と泣かぬばかりに掻口説けば、書生の面には難色見えしが、既に毒を盛られたれば争ひ難く、無下に酷くは斥けかねて、

『では始終病人を受合つて呉れといふのでは無くつて、診断だけで好いからといふのぢやネ。』

『ハイ、それで満足致しませうと申しますのですから、何卒枉げて御聞入れ下さるやうに御願ひなすつて。』

と一問一答の果てし後、澁るゝ弱つた氣色して奥へ行きぬ。水野は病める我が五十子が物憂げに、此の廣き世に只一人の誠意ある介抱者をも有たずして、頼み少き村醫の怪しき藥をのみ力としつゝ、心淋し



くも秋の夜悲しき田舎家の一室の内に横はれる光景を胸のうちに描きながら、こたびの返事は如何にぞと、聞く耳立て、意を注ぐれば、

『うるさい！。あつゝこい！。』

と叱る聲に次いで、負けかゝりたるに怒をや含みけん、パチリと強く石を下す音して、やがて書生は膨れかへつて出で来りぬ。挨拶は聞かずとも既解りたり。されど如是ても水野は屈せず、書生が何を云ひしやらも知らずに、如何にしてか我が念を遂げんと考へ沈みし後、思ひ得しところやありけん頭を擡げしが、其の面は何時か聊か色ざし来り、其の眼よりは今まで潛み居たりし炯々たる光の閃き出で、見るく如何なる任務にも堪ふべく、如何なる人にも争つて勝つべき峻烈の氣象を現し出しぬ。折から一つの彼の小さき蛾は、力盡き翼傷つきて翩々として、落花の枝を辭せしが如くに、あはれにも水野が膝の前に墜ちぬ。

## 其九

頭かうべを下さげ言葉ことばを低ひくくして、頼たのむほどは頼たのみ盡つくせしを、膠にべな無く色いろなく斷ことわりに斷ことわられたり。今は復また言いうべき餘よ地ちも無なからんを、水野みづのはそもく何なんとせんとかする。

水みづをもて解とくべからざるものは火ひをもて熔とかすべし、刀たうをもて截きり難がたきものは槌つちをもて碎くだき得えん。求もとめて已やまぬ願望ねがひの心こころあれば、おのづと働はたらく智慧ちゑの眼まなこは、我わが思おもへる地ちに到いたらんとするに平和おだやかなる路みちを取ることの甲斐かひ無なきを悟さとりたらん曉あかつき、いかで猶なほ別べつに峻さかしき一ひ條すぢの徑こみちありて其處そこに通つうずるを見出みいさざらんや。水野みづのは今いまその峻さかしきを見出みいして攀よぢ上のぼらんとするなり。火ひの力ちから、槌つちの力ちからを試こころみんとするなり。

其の顔かほつきの變かはれる如ごとくに、言葉ことばの調子てうしも俄にはかに變かはり、聲こゑもまたたかに大おおくなりぬ。

『いよく先生せんせいは御來臨おいでくだ下さらんと仰おつしあるのですか。イヤ、それは失禮しつれい

ながら左様ではございますまい、御取次の御言葉が足らるので、先生に御理解が無いのでしやう。遠方だから行つて遣らぬと、そんな事を仰ある先生では無い、そんな無慈悲な先生では無い。……』

と、今までは頭の低かりし男の、居丈高になつて、思ひの外なる強言を云い出せば、書生は其の意外なるに度を失つて、狼狽へながらも怫然として、急に遮り止めんと、

『バ、バ、馬鹿な事を、』

と、眞赤になりて抗辯はんとしけるが、紫電閃めきて出づるが如き水野の恐ろしき眼に眼を見合せて、睨み殺さんばかりに我を見据ゑたる其の異しき力に所以無くも氣壓され、云ひ甲斐無くも當り難くおぼえて、我知らず面を背向け言葉を呑みたり。水野は相手のたどろぎしに緩みを呉れず、往來にも鳴り渡れ、奥にも響けと、いよく聲を高め、言葉を荒くして、

『御當家の先生は仁慈深い先生だ、取次の君がまだ新參で、御當家の御風儀を知らないので、途中で間違つた忠義立で計らつて、其様な好い加

減<sup>げん</sup>な事を御<sup>おい</sup>言<sup>こと</sup>ひのだ。御慈<sup>おじ</sup>悲<sup>ひ</sup>深<sup>ふか</sup>い此<sup>こ</sup>方<sup>ちほう</sup>の先生<sup>せんせい</sup>だもの、遠<sup>えん</sup>方<sup>ぽう</sup>だつて來<sup>き</sup>て下<sup>くだ</sup>さるのだ。世<sup>せ</sup>間<sup>けん</sup>にも有<sup>あ</sup>り觸<sup>ふ</sup>れた藥<sup>くすり</sup>賣<sup>う</sup>り坊<sup>ばう</sup>主<sup>ず</sup>と、此<sup>こ</sup>方<sup>ちほう</sup>の先生<sup>せんせい</sup>とは譯<sup>わけ</sup>が違<sup>ちが</sup>ふ。商<sup>しやう</sup>賣<sup>ばい</sup>づくばかりで病<sup>びやう</sup>人<sup>にん</sup>をいぢる、其<sup>そん</sup>様<sup>やう</sup>な卑<sup>ひ</sup>劣<sup>れつ</sup>くさい先生<sup>せんせい</sup>では無<sup>な</sup>いのだ、先生<sup>せんせい</sup>の御<sup>ご</sup>性<sup>しやう</sup>分<sup>ぶん</sup>の美<sup>うつく</sup>しい御慈<sup>おじ</sup>悲<sup>ひ</sup>深<sup>ふか</sup>いのは誰<sup>だれ</sup>だつて知<sup>し</sup>つて居<sup>ゐ</sup>る。他人<sup>ひと</sup>も知<sup>し</sup>つて居<sup>ゐ</sup>る、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>も知<sup>し</sup>つて居<sup>ゐ</sup>る。先生<sup>せんせい</sup>で無<sup>な</sup>くちやあならんと言<sup>い</sup>つて、御願<sup>おねが</sup>ひ申<sup>まを</sup>すのに來<sup>き</sup>て下<sup>くだ</sup>さらん、そんな仁慈<sup>な</sup>の無<sup>な</sup>い先生<sup>せんせい</sup>では無<sup>な</sup>い。先生<sup>せんせい</sup>の御氣<sup>ごき</sup>性<sup>しやう</sup>も知<sup>し</sup>らないで、何<sup>なに</sup>を寢<sup>ね</sup>惚<sup>と</sup>けた挨拶<sup>あいさつ</sup>をするのだ。』

と、口<sup>くち</sup>も開<sup>あ</sup>かせず疊<sup>た</sup>みかけて、猶<sup>なほ</sup>も止<sup>と</sup>め度<sup>ど</sup>無<sup>な</sup>く罵<sup>のの</sup>らんとす。此<sup>こ</sup>の時<sup>とき</sup>藥局<sup>やくぐきやう</sup>の内<sup>うち</sup>ことくと音<sup>おと</sup>して、物騒<sup>ものさわ</sup>がしき此<sup>こ</sup>場<sup>ば</sup>の様<sup>やう</sup>子<sup>す</sup>を、何<sup>なに</sup>事<sup>こと</sup>かと他<sup>た</sup>の書生<sup>しよせい</sup>の覗<sup>うかが</sup>ひに來<sup>き</sup>しとおぼしく、又<sup>また</sup>今<sup>いま</sup>の間<sup>ま</sup>に來<sup>き</sup>し二<sup>に</sup>三<sup>さん</sup>人<sup>にん</sup>の藥取<sup>くすりとり</sup>りは、こそくと隅<sup>すみ</sup>の方<sup>かた</sup>に潛<sup>ひそ</sup>み居<sup>ゐ</sup>て成行<sup>なりゆき</sup>を見<sup>み</sup>、はや門<sup>もん</sup>の外<sup>そと</sup>にはちらりほらりと、人<sup>ひと</sup>さへ立<sup>た</sup>ちて見<sup>み</sup>居<sup>ゐ</sup>るさまなり。

書生<sup>しよせい</sup>は心<sup>こころ</sup>も心<sup>こころ</sup>ならず、

『マア左様<sup>さよう</sup>大<sup>おほ</sup>きな聲<sup>こゑ</sup>を立てゝは困<sup>こま</sup>るぢや無<sup>な</sup>いか。』  
と制<sup>せい</sup>すれども耳<sup>みみ</sup>にも入<sup>い</sup>るればこそ、

『つまり君のやうな取次は先生の不利益だ、先生の評判を悪くする。技術ばかり良い先生では無い、御優しいので人徳のある先生をそれぢやあ臺無しに仕て仕舞ふでは無いか。さつさと猶一度奥へ行つて願つて來てくれ。願ひ直して呉れなければ此處は動かん。病人が先生で無ければと云つて首を延ばして待つて居るのだ、先生のお供を仕て歸らなけりやあ此處は動かん。書生の癖に有る間敷事だ。碁なぞに凝つて居るやうだから取次が間違ふのだ。さあ確乎として先生に願つて見て呉れ。うるさい、ゑつゝこい、とは何の事だ。ゑつゝこい人間に恨まれたら、先生に飛んだ御迷惑が掛らう、祟りかね無いものだと思ふか。』と、次第々に聲高に云へば、門外に人は愈々嵩みて、奥の方は人の氣もせず靜謐になりぬ。

時に此室と奥との劃域はするりと開いて、立出でたる猶若き此家の主人は、福々しく肥りたる其顔に、莞爾なる笑をつくりて、

『や、取次のものを御叱りでは恐れ入る。直と今から出ますから、さあ一足御先へ。相田！、所は分かつて居るだらうな、ム、左様か、直と

くるま  
車の支度しどくをさせろ。』

と、卒直そつちよくに水野みづのに満足まんぞくを與あたへぬ。

水野は、此この己おのれに克かつことを知しつて非ひを遂とげんともせざる良醫りやういの前に、  
心こころよりの感謝かんしゃの禮れいを深々ふか／＼と施ほどこして、欣よろこび勇いさんで室外おもてに出いでぬ。

惡あしき兆しるしかと忌いまはしかりし彼の蛾がの弄なぶりし電燈でんとうの下したは去さつて、

藍色らんしよく滴したるが如ごとき澄すみたる天そらに、星ほしは梨子地なしじを描かきたらんやうに光ひかり

輝かがやけるを、振ふり仰あおぎて眺ながめたる可憐かれんの水野みづのは、我わが意いの中うちの其人そのひとのた

めに、思おもふ事こと遂とげたる嬉うれしさに頭高かしらたかき心地こゝちして、水色みずいろの光ひかり特ことに優すぐれ

たる一ひとつの星ほしに眼まなこを止とどめて、少時しばしは人知ひとしらぬ胸むねの涼すずしさを味あじはひたり。

## 其十

先挽後推の勢よく、矢を射る如くに走れる相良の車は、長橋を東に渡つて小梅にかゝり、引舟通りを眞直に北へと、夜風のやや寒きを衝いて進みに進みぬ。道は砥の如し、人の往來は無し、車夫は脚一杯に駆くるほどに、おほよその二里を瞬く間に過ぎて、忽地にして目ざす四ツ木へと着きぬ。

病人の大切さは貧富に關はらぬ事ながら、市街離れたる遠きところより、夜にさへ入りたるに無理強に強ひて、我が先生を迎へたるは、田舎とは云へ、定めし門構への立派に、庭前廣く、がつしりとしたる楓柱の太きが、二尺も厚さのある茅葺屋根のいと高く大なるを支へたるやうの家ならんと、車夫は心の中に算り居けるが、分り兼ねる闇の村逕を迷ひくへて、やうやくに尋ね當てたるは是は如何な事、寒竹の藪疊の不體裁に歪みたる其の構の中こそは意外に濶けれ、空しく明

け置く地を惜んでか、通ひ路をも埋むるまでに作りたる芋の圃の奥に、  
微けき星のひかりを浴びて黒みて立てる、見るからが悲しき草の屋  
なり。

餘りの思はくの違ひの忌々しくてや、車夫は憚り氣無く人力車を挽き  
入るれば、車輪に觸るゝ芋の葉は左右に開けて、湛へられし露の珠は  
墜ちて聲あり。

人ありや無しや岑閑として、たゞ燈のみ洩るゝ板戸を敲き驚かしつゝ、  
車夫は聲明らかにそれと云ひ入るれば、何を擱きても飛んで出でゝ、  
喜びくゝて迎へ入るべきを、是はまた何たる事ぞ沈着き拂つて、

『ハア、左様ですかい!。』

と、田舎詞の素氣無く答へたるのみにて嬉しき顔もせねば、請じ入れ  
んともせず、折から自裂け兼ねたる大豆の莢を取るにやあらん、箕を  
前にして乾きたる豆を弄り居し婆の、面は赭黄色く焦け皺びて、髪  
は天蠶絲屑の如く白く光るが交れる、年の頃は六十ばかりなるが、  
不承不承に身を起して戸口に立塞がり、



『病人は此處には居りましねえ。別室の方に寝て居りますから、直とそつちらへ御座らしつて下さい。暗くつて分りますまいが足元は好いですが。家へさへ付いて廻れば直ですがよ。あ、まかし菜園へでも轉げられると詰らない。水野さんが後になつただから仕方が無い、妾が案内を仕てあげやう。や、車夫さん、提灯があるの、其の提灯を妾に貸さつせえ。さあ先生さん、妾に隨いて御坐らつせえ。』

と、藁草履つゝかけて先に立つたり。相良は是非無く後に隨きて、家の横手を斜に奥へ、此方には燃料の柴木の積まれ、彼方には玉蜀黍幹の埒無く置かれなどしたる間を縫ひて、さて、下は夏時の菜の圃の細徑の滑り易く、上は柿の樹の幾本の枝低くして帽子危きところを過ぐれば、前の家よりは彼は二十間餘りも距れたりとおぼしきところに、椎の樹ならん眞黒に見ゆる丈矮き樹のいと大なるを後楯に取りて、僅に二タ室ほどなるべき離屋立てり。

『さあ此處でが、あす、上つて下さい。』

と、婆は戸を引き明けてつかくと上りぬ。

『お前さまが頼み度いと云つた先生がござらしたつた。』

と、云ひながら次の室の長四疊を過ぎて、六疊の其の室に至りたれど、熱の一ト退退きし汐合の時にや、病人は答へも無く音も無く眠り居れり。

醫師は婆につゞきて上りけるが、先ず此の室に籠りたる不快の臭氣に、不審の眉を顰めてゐると見渡せば、廣からぬ一室の内法外に明るく、病人が枕上の洋燈は何時か燃え高じて、其の火屋の上の方は眞黒に煤け、毒々しき黒き油煙は今やしたゝかに舞ひ上り居れり。

『オーヤ、洋燈が出過ぎて居る！。何とマア危い事だつた！。いくら病人だつて、意氣地が無いつて、ハア、此様な事つて有る譯で無い。』と婆は獨語して其の心を引込ませぬ。

臭氣の源は仔細無き事なりけるが、悩み疲れし後の睡りたる間に、洋燈はおのづと燃え高じて、またゝかに惘然なる人に惡氣をや吸はせけん。相良は眼のあたりに見たる此の一事と、婆が今洩らしたる其の一語とに、誰看護るものも無き此の病人の、何病に悩めるかはいざ知

らず、萬般のあはれさ推し測り知られて、  
身も、先づ惻然として心を動かしぬ。  
他の憂を見るには馴れたる

## 其十一

思ふまゝに世を振舞ふは下人の常なり。相良の車夫等は此の狀態に呆れ果てゝ、せめては番茶なりと飲んで寢ころんで寛がんと、母家をさして戻りけるが、

『何と飛んだところへ来たぢや無えか。とても眼も鼻も明きさうぢや無えぜ。』

『ハ、ハ、あの婆さんは大方、御醫者さんの御抱は澤山給金を取るだらう位に思つて居るだらうよ。』

『ウツ、違へ無え。一體吾家の先生は人が好過ぎるからナア。此方等あ何様したつて取るものあ取るが、先生が第一馬鹿を見らあ。』

と闇にはびこる胸間聲太く、遠慮も無く二人して喚き散らしたり。

婆は此等の聲を聞かざりしと見ゆ。いたはり氣も無く病人を揺り起こして、

『お前さまが頼みたいと云つた先生が御坐らしたよ。』  
と、同じ言葉をやかに繰り返して、重き暁を力無く擧げて、  
微に點頭を見るより、

『さあ先生様、見てやつて下さい。濟んだらば別に水はあげ無いから、  
其處の椀先の手水鉢で、勝手に手を洗ふが可いですが。ナア二一昨  
日汲んだばかりで、誰も使はないから奇麗ですが。そして彼方へ  
寄つて温茶でも上らつしやい。どれ妾は先へ行つて火でも燃きまし  
やう。』

と、他人同士とは本より一目にも知れわたりたれど、さりとては乾き  
切つたる心の鬼々しくも人情無き婆かな、と竊に驚ける相良を後にし  
て、恰も機關仕掛の人形かなんぞの動くやうに、四圍への斟酌も氣兼  
も無く、我が行かんとする方へ早速と行きぬ。

『水野さんが居ないで、ハア餘計な暇潰しな。ア、江戸の人と挨拶する  
のは面倒な。』  
と、つぶやきながら婆は火を焚きはじめたり。

急いそぎに急いそぎて今いま歸かへり來きたれる水みづ野のは、額ひたひに汗あせの玉たまを散ちらして、蒸むされた  
 るが如ごとくになりたる面おもては、薄うす紅くれなひに血ちの色いろ潮さしたれば、引ひき立たつて見みゆ  
 る眉びもく目のあたりに清せい秀しうの氣き満みち溢あふれて、これこそ水みづ野のが往むかし時の面おも貌わか  
 と、天あつぱ晴うつくれ美いきくしく生な々なとしたり。早はやくも既すでに相さがら良らの見みえたるに欣よろこび悅こ  
 び、取とり敢あへず先まず車しや夫ふを犒ねぎらひて手て當あてを與あたへ、更さらに病びやう室しつには行ゆかんと  
 もせずして、こゝに數すう分ふん間の後のち我わが受うくべき吉きつ凶きよういづれかの報しら告せの、  
 醫いによつて齎もたらさるべきを恐おそる懼おそる待まちたり。

程ほど經へて相さがら良らは歸かへり來きたりぬ。むさくろしき此この婆ばが茶ちやの間まの中うちにて、  
 水みづ野のと互たがひに挨あい拶さつして、さて婆ばと水みづ野のとに向むかつて徐おもむろに、病びやう人うにんの中なか々くに  
 重ぢゆう體たいなる事こと、徵ちよう候こうの不ふ完わん全ぜんなるをもて今いままでの醫いは、何なんと診しん斷だんした  
 るか知しらざれども、病やまひ氣きは全まく腸ちやう窒ちふ扶ふ斯すなる事こと、傳でん染せんの處ところある病やまひ氣きな  
 れば其その心こころすべき事こと、患くわん者じやのためには設せつ備び宜よろしき病びやう院あんに入いらしむる  
 を良よしとする事こと、されども遠ゑん路ろを伴ともなひ行ゆかんと難なん儀ぎにして、聊いさか懸ねん念ねん  
 も無なきにあらねば、一いつ軒けん建だちの離はなれ家やなるを幸さいひ、彼か處こにて療れう養やうさする  
 も惡あしからぬ事こと、たゞし此この病やまひは藥くすり劑じよりも寧むしろ看かん護ごの良よし否あしによりて、

回復くわいふくすると爲なさるとも生しやうずるもの故ゆゑ、今の如ごとき狀さまにては宜よろしからぬ事こと、彼處かしこにて其儘療養そのまゝれうやうせんには是非ぜひとも智識經驗ちしきけいけんの十分じうぶんなる良看護婦りやうかんしふを添そふべき事こと、くれぐれも患者くわんじやをして強つよき身動みうごきなど爲なしめざるやう、取り扱あつかひも極きはめて手柔てやはらかにすべき事こと、看護かんごの力足ちからたらねば危あやふき事こと、今まで投劑とうざいし居をれる醫いに此由このよしを語かたりて、其そのつもりしよほうの處方こを乞こひ、且かつ種々いろくの注意ちゆういを受うくべき事こと、其他そなたさし當あたつての様々さまぐの處置しよちなど、我わが職分つとめの上うへより云いうべきほどの事ことは、一々物柔いちくものやはらかに言いひ盡つくして、御大ごたい切せつにと靜々しづくと歸かへりぬ。

醫師いしが親切しんせつの長々ながくしき物語ものがたりの間あひだに、雲間くもまの月つきの如ごとき唯ただ僅わずの間あひだだけ美うつくまかりし水野みづのは、其その往時むかしの倅おもかけもいづくへやら、唇くちびるは微かすかかに顫ふるへて自然ひたりにに戦おのき、眼めは洞然どうぜんとして何處いづくを見みるとも無なく据すわりたるに、引ひきかへて冷酷れいこくなる主人あるじの婆ばは、晒しやれ古ふるしたる木彫きぼりの假面めんの、いづくにも潤うるほひの無なきが如ごとき顔かほして、

『傳染病うつりやまひぢやあハア大變たいへんな事ことだ。死しなれでも仕したらまあ、オゝ厭いやな事ことだ。早速さつそくに逐ぼひ出だして仕舞しまは無なけりやあ。』

と、慈悲も人情も無く云ひ出しさまは、  
たゞ地獄物語の奪衣婆を、  
今  
眼の前に見るが如し。



其十二

重き風邪なりと村の醫の尾竹の云ひし時だに、其の容態の傍觀にもたゞならぬに、淺からず心をも使ひ氣を揉みしものを、淺草以北にては上無き人に頼みおもへる相良に今、病はこれこれなり、看護行き届かずば危からんと云はれては、愕然として打驚きつ、胸のたゞ中に鐵槌の一撃を受けたるやうにおぼえて、我先づ死にもすべく惱ましきに、垂死の人を逐ひ出さんといふ苛酷き婆の言葉を聞きては、怒火心頭に起つて堪ふるにも堪へられず、思はず目に稜角立て、峻しく睨みしが、ハット心づきて自ら警め、燃え立つ瞋恚を押鎮め押鎮めて、わざと何氣なく粧ふ言葉つき平穩に、

『そんな酷らしいことを云つたつて仕様が無いぢや無いか、歩けも仕無い病人を逐ひ出すなんて。』

と、打碎けて云へど婆は應ぜず、

『歩いてても歩けないでも構ひは有りましねえ。そんな病で死なれた日には、彼の家へ入る人は無くなつて、後が廢物になつて仕舞ひます。早速と出て貰つて掃除を仕て、行者さんにでも清めて貰ひます。行者さんを喚ぶだけは痛みになるが、それだけは時の不祥と勘辨するであす。』

と、飽くまで我欲の云ひ草なり。

『だつて病人が自分で出て行きやうは無し、又五十子さんのお母さんは、汝の知つて居る通りの自分勝手ばかりの繼母さんで、平常から五十子さんには無理を云ふけれど、五十さんの世話は毫末も仕無い、酷いゝ人情の無い人ぢあ無いか。今度の病氣を知らせて遣つても、顔も出さ無けりあ、手紙一つ遣さない位の人だもの、病人を引取らうとは云ふまいぢあ無いか。』

『けれども親は親があす。引き取らないとは云はせましねえ。親が引取らないほどの厄介者を、他人の婆がハア擔がう理由は有りましねえ。たつて引取ら無けりやあ、ナアニ譯は無い、巡查さん頼んで引取らせ

るだ。ハア、道理の違つた事云はない婆だよ。婆は他人だよ、身寄で無いだよ、錢金づくで彼の家に置いたばかりだよ。貯金も有るか無いか知れない病人を預かる、――まかも傳染病の大病人を預かる、其様な鈍くさい事出来ないだよ。お前様も病人には他人で無いか、恨みっぽい其様な眼つきをし何も此婆を視さつしやることは無い。』

『なるほど其は左様でもあらうが、いくら他人でも病人を突出さうといふのは、それは餘り酷いぢやあ無いか。』

『病人だから逐ひ出さうといふので、酷かあ酷いに仕て置かつしやい。』  
『お婆さん、お前、そんな事を云つたつて、人間には人道といふものがある。動かしてさへ悪いと醫者の云つた病人を逐ひ出さうとは非道では無いか。』

『非道なら非道に仕て置かつしやい。金の出處の覺束無い其様な大病人を、世話をして損をするのは婆は嫌ひだ。』

『でも有らうが汝が今逐ひ出して仕舞へば、よしんば繼母さんが引き取るにしても、あちこち持ち廻られるのは病人の不利益、まかも何様し

て彼の繼母さんが、碌な世話をする事では無い。仕て見れば看護が悪  
 けりやあ危いといふ病氣だもの、十に一つも助る瀬は無い、見すく  
 病人は殺されるやうなもの！。譯の分らない汝でも無し、こゝのどこ  
 ろを考へて、私が此の通り手について頼むから、どうか左様あこぎな  
 事を云はないで、當分——。』

『イ、エ、あこぎな事を云ふでがアすよ。手について頼んだつて、芋塊  
 が一つ自然に出來て來るものぢやあござら無い。頼むなら頼むやうに  
 して頼まつしやい。』

『頼むやうに仕ろつて、何様すれば好いと云ふのかえ。』

『婆は年をとつて氣が短い、打撒けて汝様に云つて上げやう。病人の月  
 々のものは今まで通りに屹とお前様が受合つて、それから病人がいけ  
 なかつたら、後の始末は皆此婆に迷惑を掛けないで、そして座敷に死  
 穢を付けた謝罪に二十兩、癒つたら祝に十兩遣すと、確乎御前様が吞  
 込んで、先づ十兩だけ渡して置かつしやい。その代り病人には構はな  
 いから、どうなりと勝手に介抱さつしやい。さ、お前様もあかの他人、

これだけ踏ふみ込んで世話せわもなるまい。それとも病人びやうにんが愍然かはいさうで、金かねを出だしてもと云いはつしやるか、どつちでもお前様めへさまの好すきにさつしやい。』

『ム、』

手てに在あらば千金せんきん萬金ばんきんも何なに惜をしかるべきを、及およぶことの及およばぬに口惜くちをきは金沙汰かなさたなり。水野みづのは生うまれてはじめて日頃ひごろ此阿堵物このもを卑いやしみしを悔くいぬ。

## 其十三

おのづから横さまに降る雨はあらじ、風の添はるにこそ、音あらけな  
く夜の窓をも打つなれ、と胸ゆたかなる古の人の云ひける。かゝる鬼  
くさき婆も、齢の十七八には、女の本性とて、臙脂白粉に色つくりて、  
人に悦ばれんと願ひたる日もあるべきに、其の後如何なる世の風に吹  
き曲められてか、今は如是直ならず人には當るならん。水野は一度は  
此の婆を憎しと見しかど、憎む心は忽ちに失せて、且つは其の欲深き  
に呆れ、且つは其の意剛きを怪み、且つは其の人らしからぬまでに尊  
き愛情の既に壞れ盡して、卑しき我のみの残りて高ぶれるを、哀み慙  
みて打見やりたり。

されど今は他人を慙みてあるべき時ならねば、水野は直に差し當つて  
の我が上に掛れる事に心を悩ましめぬ。  
五十子を如是忌はしく親切無き婆の家にならせんよりは、良き病院に

移さんかた萬般に就けて心地よしとは思ひながらも、今宵の如く穏や  
 かに晴れてのみあるべくはあらぬ秋の天候の習なれば、時に臨みて如  
 何なる雨風の妨害に遇はんも知るべからず、又然無きだに遠路を伴ひ  
 行く途上は病人も特に心悩ましかるべく、それがために萬一惡き事も  
 やとの懸念も少からぬに、由無き金錢を婆に貪らるゝは愚なるに似た  
 れど、これも病める人のためと忍ばんには露厭はしからずと、水野は  
 終に意を決して、彼の離れ室に置きたるまゝ、介抱する事と定めたり。  
 もとより一つには其の奥深き底の底の心に、五十子と我との相距らざ  
 らんを望む思の潜めばなるべし。たとひ自己が身は如何なる故にか五  
 十子に嫌はれて、特に病のため癩の高ぶりて我の強くなれる此の頃の  
 彼女には、面を會はすをさへ厭はるゝより、自ら病床に近づきて問ひ  
 慰めも支度く、看護も仕て遣りたき心の、遣る方も無く逸るを抑へに  
 抑へて、裏面にてこそ力の及ぶ限りを盡して駆けも走りもすれ、病人  
 の氣に逆はじと其の前には身影をさへ見することも無くて、たゞ竊に  
 外に立つて、細りたる聲の孱弱きを聞き、或は物の罅隙より窺れたる

其の面貌の悲しきを見ては、男兒たる身の人目はづかしくも、にじみ  
 来る涙を止めかねて、神も我が誠心を憐れませたまひて、此の人の  
 病苦を救はせたまへ、と何の神に祈るとも無く、何時か我知らず祈り  
 居る、思へば愚しき朝夕に甘んじて、猶これより幾日と定まらぬ其の  
 間を、せめてもの果敢なき心遣りに、猶其のおろかしき振舞を續けん  
 とはするなり。

『では汝の云う通りに仕やう。一切私が受合つて置く。』

と、決然として水野は云へど、

『たゞ受合つてもいけましねえ、何時その十兩は渡して呉れさつし  
 やる。』

と、婆は手に握らぬことには人を信ぜず。

『明日の朝渡す。』

『大丈夫かね。』

『大丈夫だ。』

『看病人はエ。』



『矢張私が雇つて付ける。相良さんに良いのを世話して貰ふ。まあ一切かういふ事を、私が爲たのだと病人に云つてはならぬ。病人が私の世話になるのを厭がつて居るから、たゞ學校の人達が爲るのだと云つて置いてくれ。』

『はア、ようがす、それは無益な口きく婆でないがア。まあ甚い金がかゝりませうに、親切な事だネ。』

と、冷やかに笑ふ口の左右に、深き皺あらはれて物凄じく、さもく水野が爲す一切の事の、やがては朝の霜の柱を彩色り夕の露の珠を綴らんとする痴なる企畫の如く甲斐無く終らんを見徹きて知りたりと云はぬばかりの面色したり。

『快くなるまでみんな御前様が一人で爲つしやるかネ。』

『ム。』

『百兩位では追付きましねえかも知れましねえヨ。』

『ホー御前様は學校の教員もつて、其様に御金有つてゐるだかネ。』  
水野は苦りきつて答をもせず、

『何でも可い、其様なことを云つて居る暇は無い。わたしはこれから尾竹のところへ行く。』

突と立上つたる水野は此處を出で、村の醫を問ひて相良の言を傳へ、手ぬかり無きやう十分に其の職分を盡さんことを乞ひ求め、これより直にも見舞はんといふ親切籠れる答を聞きて、

はじめて我が宿とせる山路が方に歸りぬ。

物の味さへ知るや知らずや、湯漬け飯忙しく夜食を濟ませて、長き夜も既更けて何時かを打つ時計の音の折から聞ゆるを數へも敢へず、急

ぎ周章て、又戸外へ出でんとすれば、

『水野さん、何處へ今から御出になります?。』

と、低く沈める聲音の呼び止めたり。

## 其十四

云はゞ我が假の宿所の主人なりと云ふまでなれど、東京あたりに黒塗の小札懸けならべたる商賣づくの下宿屋といふにはあらで、我が校長の高田と懇意なる間柄なるより、其の云ひ入によりて、唯我一人を賓客同様に、萬般親切に世話し呉るゝ此家の老夫の吉右衛門に呼び留められては、心の急いたる折からとて、あらずもがなには思ひながら、後振り返りて立停まり、

『ア、一寸濱町まで行つて來ます。何程急いでも遅くはならうが、歸ることは屹度歸ります。濟まんけれど敲きますから、關はず戸締りを仕て仕舞つて寢んで下さい。』  
と云ひつゝ、燈火さす茶の室を窺へば、讀みさしたる新聞を傍に置いて、兀げたる頭の澤々と光れる吉右衛門は、眞鍮縁の鏡玉圓き昔風眼鏡を掛けたる、清らなる赤ら顔を此方に向けたる其の右の方には、孫娘

の一昨年をど、しせうがく小學を卒をへたるばかりなるが、何を讀めるならんか燈火の下に身を低く俯して、疊に置ける書に餘念無く讀み入つたる、其の黒き頭髪に何やら紅き巾美しく、一幅の平和の夜の圖は眼の前に現はれて、身の疲れ心の勞れを休むる間も無き水野をして、人は斯く無邪氣に世を送るもあるをと、そゞろに其の無事の清福の價値貴きを思はしめぬ。

『ハア、左様でございますか、宜しうございますとも。ゑかし大變せかくしていらつしやいます、氣を御付けなさいまし、争ひなんぞ爲すつてはいけませんぜ。平井のお澤婆のところへ御出なすつたと聞きました、あの婆と物言なんぞ爲さりあ仕ますまいネ、彼奴はどうせ人ぢやあ無いのですから。それは左様と岩崎さんは何様でございます？。』

『岩崎はどうもいよく悪い。ナーニお澤婆さんには此方で負けて居るから論は無いよ。争ひなんぞ仕て來たのでは無い。たゞ早く濱町へ行かうと思つて急いで居るので。』

『濱町は島木さんのところへで御座いますか。』

『ア、左様、島木のところへだ。』

『それぢやあ路は遠いし、御會話は長くなりませうし、御歸りは大變遅くなりましやうが、なんなら明日になすつては何様でございます?。』

『明日と云つて居るわけには行かないのだから。』

此時娘は書を棄てゝ、急に頭を擡げたるが、さつと燈火を浴びたる面の、色は初花の日に匂ふかと麗はしく、細けれど鮮やかなる眉、小けれどもはつきりと仕たる眼つき、まだ罪も無く慾も無く、たゞ生々と愛度なく美しきが、突と立上りて走り出で、

『なぜ其様に他所へばかし入らつしやるの!。戸外はもう眞闇で、いけませんわ。妾御願ひだから御止しなさいよ。』

と、甘へたる調子に云ひく、水野を扯きて、はや女づくるべき齡なれど猶兒童くさく、遠慮も無く此方へ扯き入れんとすれば、水野はおのづと催さるゝ笑ひの顔を顰めながら、そつと其手をはづして、

『マアお濱ちゃん、堪忍してお呉れ、どうしても行つて來なくてはならない事だから。』

と、周章<sup>あは</sup>て、土間<sup>どま</sup>へ下りて出<sup>い</sup>でかゝるに、媚<sup>なまめ</sup>ける笑<sup>わら</sup>ひを帶<sup>お</sup>びたる聲<sup>こゑ</sup>美<sup>うつく</sup>しく我<sup>わ</sup>が背後<sup>うしろ</sup>に當<sup>あた</sup>つて、

『あら、いやな人<sup>ひと</sup>！、きつと又<sup>また</sup>五十子<sup>いそこ</sup>さんの事<sup>こと</sup>で心配<sup>しんぱい</sup>して居<sup>ゐ</sup>るのよ！。』

と、婦人<sup>をんな</sup>は口頭<sup>くちう</sup>より先<sup>ま</sup>づませて、戀<sup>こひ</sup>知り顔<sup>がほ</sup>に獨語<sup>ひとりご</sup>つが聞<sup>きこ</sup>えぬ。

心<sup>こゝろ</sup>もこゝにあらず思<sup>おもひ</sup>の忙<sup>せは</sup>しければ、平生<sup>ひごろ</sup>はいと可愛<sup>かはゆ</sup>しと思<sup>おも</sup>へる濱<sup>はま</sup>子が

言葉<sup>ことば</sup>をも、我<sup>わ</sup>が胸<sup>むね</sup>の中<sup>うち</sup>に留<sup>とど</sup>むる暇<sup>いとま</sup>無<sup>な</sup>くて、急<sup>きふ</sup>に村徑<sup>むらみち</sup>の闇<sup>やみ</sup>を衝<sup>つ</sup>いて歩<sup>ある</sup>き

出<sup>い</sup>せば、門<sup>かど</sup>を出<sup>い</sup>づるや否<sup>いな</sup>や足元<sup>あしもと</sup>近<sup>い</sup>き蓮田<sup>はすだ</sup>の中<sup>うち</sup>より、人<sup>ひと</sup>に驚<sup>おどろ</sup>ける五位<sup>ごゐ</sup>鷺<sup>さぎ</sup>

の其聲<sup>そのこゑ</sup>淋<sup>さび</sup>しく人<sup>ひと</sup>を驚<sup>おどろ</sup>かして、ぎやあと鳴<sup>な</sup>きつつ立<sup>た</sup>つて去<sup>さ</sup>りたり。

# 其十五

勞<sup>らう</sup>を厭<sup>いと</sup>ひてにはあらず、時<sup>とき</sup>を惜<sup>をし</sup>みて、勸<sup>すす</sup>むる人力車<sup>くるま</sup>のありしまま、さ  
 るところより其車<sup>その</sup>には乗<sup>の</sup>りしが、やうやく濱町<sup>はまちやう</sup>に着<sup>つ</sup>きしときには、  
 流石<sup>さすが</sup>に人<sup>ひと</sup>の家<sup>いへ</sup>を音<sup>おと</sup>づれんは後<sup>うしろ</sup>目痛<sup>めいた</sup>きほど更<sup>ふ</sup>けに更<sup>ふ</sup>けたり。日頃<sup>ひごろ</sup>心遣<sup>こころづか</sup>ひ  
 の鹵莽<sup>おろか</sup>ならぬ水野<sup>みづの</sup>は、鎖<sup>とざ</sup>し固<sup>かた</sup>めたる戸<sup>と</sup>を思<sup>おも</sup>ひ遣<sup>や</sup>りなく打<sup>うち</sup>敲<sup>たた</sup>きて、近隣<sup>あたり</sup>  
 の寢耳<sup>ねみみ</sup>をまで驚<sup>おどろ</sup>かさんことを憚<sup>はづか</sup>り、聊<sup>いさ</sup>か自<sup>みづか</sup>ら躊躇<sup>ためら</sup>ひしが、愚<sup>おろか</sup>なり、臆<sup>おく</sup>  
 して已<sup>や</sup>むべきにはあらぬものと、手<sup>て</sup>を舉<sup>あ</sup>げてほとくと星<sup>ほし</sup>の下<sup>した</sup>に敲<sup>たた</sup>  
 きぬ。

心<sup>こころ</sup>の優<sup>やさ</sup>しさにおのづから手<sup>て</sup>も柔軟<sup>やはらか</sup>に當<sup>あた</sup>りて、其<sup>その</sup>の音<sup>おと</sup>は左<sup>さ</sup>まで強<sup>つよ</sup>からざ  
 りしが、幸<sup>さいはひ</sup>にして未<sup>ま</sup>だ睡<sup>ねむ</sup>らざりし女<sup>をんな</sup>のありけむ、ハイと明<sup>あき</sup>らかに答<sup>こた</sup>ふ  
 る聲<sup>こゑ</sup>して、

『誰<sup>どなた</sup>様<sup>さま</sup>?。伊東<sup>いとう</sup>さん?。』  
 と、云<sup>い</sup>ひながら開<sup>あ</sup>けにかゝりたり。

伊東とは島木を外にして唯一人の此の家の止宿者にて、無類の極樂蜻蛉なるよしを島木より聞きしが、さては今宵はその男の、何處の花の陰にか憩ひて、更けて猶今に歸り來らざるを、婢の待ち居たりしならんと早くも猜しぬ。

『イ、エ、島木さんを急用で尋ねて來ました。わたしは水野といふものです。』

と、云ふ間に雨戸は一枚繰り明けられて、細帶姿のまどけ無く背後の上り端に置きたる小洋燈の光の中に現れたるは、丸顔の色白の氣さくものゝ、名は忘れたれど見記憶ある女なり。

『オヤ、水野さんでしたか。存じてましたよ。たしか彼の菖蒲のある四つ木とかの。能くおぼえて居たでしやう。褒めて頂戴な、ホゝゝ、まあ御入んなさい。大層遅く入らした事ネ。エエ、居らつしやいますとも島木さんは。ハア、イエ未だ御睡り就きやなされますまい、今しがた他所から御歸りになつたばかりなんですから。』

と、一人で饒舌りながら後を鎖めて、やがて、



『ホ、此様な姿を仕て居て、御免なさいましよ。』

と、云ひく先<sup>さき</sup>に立つて二階<sup>にかい</sup>へ導<sup>みち</sup>びき、

『島木さん、さあ御起きなさいまし。貴下<sup>あなた</sup>の好きな水野<sup>みづの</sup>さんが御來臨<sup>おいで</sup>なすつてよ。明日<sup>あした</sup>は驕<sup>おご</sup>つて下<sup>くだ</sup>さるでしようネ。』

と、其室<sup>そのへや</sup>に入<sup>い</sup>つて遠慮<sup>えんりよな</sup>無く洋燈<sup>らんぶ</sup>の火<sup>ひ</sup>を明<sup>あか</sup>るくしたり。

『何だ驕<sup>なん</sup>つて下<sup>おご</sup>さるでゑやうも無いもんだ。自分<sup>じぶん</sup>が岡惚<sup>をかぼ</sup>れて居<sup>ゐ</sup>やがるんだ癖<sup>くせ</sup>に。』

と、輕<sup>かる</sup>く罵<sup>ののし</sup>りながら島木<sup>しまぎ</sup>は起<sup>お</sup>き出<sup>い</sup>でしが、既<sup>はや</sup>水野<sup>みづの</sup>の近<sup>ちかく</sup>々と入<sup>い</sup>り來<sup>きた</sup>り居<sup>を</sup>りて、今<sup>いま</sup>の戲言<sup>たはむれ</sup>を聞<sup>き</sup>きしや苦虫<sup>にくむし</sup>を嚙<sup>か</sup>みたる如<sup>ごと</sup>き顔色<sup>かほつき</sup>なせるを見<sup>み</sup>て、

『や、失敬<sup>しつげい</sup>々々。戲言<sup>じやうだん</sup>だよ。大層<sup>たいそう</sup>遅<sup>おそ</sup>く來<sup>き</sup>たちや無いか。さあまあ此上<sup>これ</sup>に坐<sup>すわ</sup>つて呉<sup>く</sup>れたまへ。』

と、慌<sup>あわ</sup>て、敷物<sup>しきもの</sup>を出<sup>い</sup>だ、自己<sup>おのれ</sup>は手早<sup>てばや</sup>く衣<sup>い</sup>を改<sup>あらた</sup>めたり。

『オイお作<sup>さく</sup>さん、此處<sup>こゝ</sup>は乃公<sup>おれ</sup>が片<sup>かた</sup>づけて仕舞<sup>しま</sup>ふがネ、もう火<sup>ひ</sup>は皆消<sup>みんな</sup>えて仕舞<sup>しま</sup>つたかエ、せめて御茶<sup>おちや</sup>だけ飲<sup>ほし</sup>いのだが。』

『ハア、もう樓下<sup>した</sup>にもありませんが打火<sup>おこ</sup>してあげましやう。ナア二別段<sup>べつだん</sup>

譯はありませんから。』

此家は家作りも什器も清潔に、四十五六の女主人と、此女と、下働き  
の婢と三人して、客はたゞ二人の島木伊東をかしづく下宿屋めかさぬ  
品の良き家なれど、又折々は骨牌に貸す窩ともなり兼ねぬほど、一切  
を金銭の光に美しく仕こなして見るところとは知りながら、深夜に  
人を煩はすことの氣の毒さに耐へかねて、

『マアいゝさ島木君、茶などは要らんよ、お作さんはもう寢んで呉れた  
まへ。』

と、水野は言葉を挿まざるを得ざりき。

島木は物に滞らずして、心の動きの早き男なれば、

『ン、それも左様だ。ぢやあお作さん茶はいゝからね、そら彼の葡萄酒  
と乾燥牛肉とを持つて來てお呉れ。』

と云へば、

『ハア、其の方が却つて宜しう御座んしやう。』

と、婢は下に降り行きしが、忽地にして一つの廣き盆に、燈を受けて

美しきポカラの玻璃盞二つ、薄手の白皿二つ、ニッケルの栓拔器、まだ開けぬ薄き罐詰、利休箸を載せて、片手に葡萄酒の罎を提げて來りぬ。

『よし。もうこれで好いから樓下へ行つて御就眠み。御客様が氣の通つた方だから御酌には及ばない。勝手に御免を蒙るさ。』

『それぢやあ、御二人で水入らずに御話なさいまし、まあ御睦まじいこと、些妬けますネ。ホ、ホ、ホ。ですけれど島木さん御用がありましたなら構はないで呼んで下さいましよ。』

婢は樓下に去つて行きたり。手早く片づけられたる座敷の好き程に坐りて、島木は葡萄酒の栓を抜きながら水野の面を見て、

『君、大層顔色が悪いぢや無いか。何様か仕はせんか、氣になるネ。さあ、まあ、飲つて呉れたまへナ。』

と、詞の調子こそ猶冴えたれ、顔には憂愁の曇りを上せて、友を思ふ情の温かくも温かく、強いて玻璃盞を執らせて注ぎて遣りたる酒はいつぱり無き血の色をなしたり。

## 其十六

いつもながらの島木が親切の、今宵は別けて身に染む心地して、今までは経験無き事なるが、おのずと脆くも涙の湧き上るを、水野は怪まれやせんと竊と拭ひて、わざと眼の行く方を逸らして床の間を見つ、其處に掛れる狩野風の達磨を、たゞ譯も無く見つめながら、

『ナニ何様も仕は仕無いよ、心配して呉れたまふな。』

と、然ばかり我が胸の中の苦惱の色に出で、人目に著く現はるゝかと驚かるゝ心を押し隠して答へぬ。

『左様かエ。それなら好いが餘り氣を使つちやあいけないぜ、今日――イヤ今日と云つちやあ既十二時過ぎだからをかしい。昨宵の會にも、君は幹事の山瀬のところへ、君の友人が大病で、介抱の仕手も無いから其の爲に出ぬ、と云つて遣つたさうだが、君は一體情が深か過ぎるから、餘計にそれで心勞でも仕や仕無いかと、一同が君の爲に心配し

てゐたよ。』

島木が言葉には何の事も無けれど、水野が胸には響くところあり。

『ム、昨宵の羽勝君の會に出無かつたのは、眞誠に諸君に濟まなかつたが、實は如是してまご／＼して居て、今頃君のところへ來る位だから、何様か察して赦して呉れたまへ。』

『ナアニ赦すも赦さないも有りあ仕無いが君のその友人の上は兎に角、一同は眞誠にたゞ君の上をいろ／＼に心配してゐたよ。』

『や、眞に諸君の厚意は深く謝する。誰も僕の不參を怒りは仕無かつたかね。日方君は何とも云は無かつたかね。』

『ム、日方は何を言つたつて管や仕無いがね、羽勝は君に會へなかつたのを、口には出さなかつたが酷く殘念がつて居たよ。』

『ア、羽勝君には僕も會ひたがつたが、何にしる一方の事があつたので、懷かしくは思ひながら意に任せ無かつた。ア、僕は羽勝君に負いた、濟まなかつた。』

水野は情に堪へざる如く、どつと俯首きて眼を瞑ぎつゝ、獨語のやう

に又再度、

『ア、濟まなかつた。』

と、繰り返しぬ。島木は其のいぢらしき様子を見て、此の猶心の醇なる年若き友を愛憐む情を起さざるを得ざりき。

『マア其りやあ其れで濟んだ事として、また羽勝に遇う時も有らうから好いぢやあ無いか。さうして君のわざく來た用事といふのは?。』

問はれて水野は猛然と我に復り、夜を冒し遠を歩みて此處に來れるも、たゞ此の一つの事のためなるをやと、津に舟を得し心地して、自ら奮つて面を擡げしが、慚ぶるところの有ればにや直に崩折れて、甲斐無くも伏目になりて我が膝を見たり。

されど云はでは叶はざることゝて、

『深夜に君を驚かしたのは濟ま無かつたが、かういふ譯だから聞いて呉れたまへ。實は僕の出で居る學校で、同じ職を取つて居るものに、僕の新しい友人がある。其人は物も出來れば氣立も立派な、まことに得難い人物なので、僕は非常に大切に思つて居る、ところが其人が

大病に罹つた。一體愍然な不幸な人で、母は有るけれども継しい中で、病氣を知らせて遣つても振り顧つても見無い位、それにまた家を貸して居る婆が残酷な奴で、病み悩んで居るものを逐ひ出さうといふ位な非道さ。左様いふ中に悶臥して居て、誰に世話をされるといふ事も無いので、可哀さうに病人は死を待つばかりになつて居るのだ。そこで何様しても餘所に見兼ねるから、僕が奔走して良い醫者に見せて遣ると、病は腸窒扶斯だといふ事で、看護が行届か無けりやあ無い生命だといふ。僕は自分の肉を削いで食はせてなりと、何様かして助けて遣りたいと思ふのだが、……』

と、虚言は少も無けれど忌むことは忌みて、此處までは云ひたりしが後は言ひ澁むを、其の聲の微に顫ふを聞き、其の眼の濕れ色なせるを見て、

『ア、解つたよ、もう可いさ、君。金子が先に立つからと云うのならう。あて何の位用立てやうかエ。』

と、輕々と事も無げに引取つて云つて、云ひ難き口數を多くはきかせ

ぬ同情の骨に徹するほど嬉し悲しく、

『濟まないけれども一時で無くとも可いから百圓ばかり、』

と、纔に口を洩らせし限り、あとは無言の頭を低れて、深々と頼み入りたりしが、何時より出で居し涙なりけん、人の情の凝りて滴る露の眞玉はぼらりと墜ちたり。

誠せて人を頼む心のいぢらしさも、何時の間にか謹みて律儀に端座り居たる、水野が身を窄めし姿の寒げなるを見て、島木は思はず慨然として、

『ナアニ可いさ。君、それんばかりの事を。宜しい、承知した。今直献げる。』

と、確然と明らかに先づ答へつ、少時間を置きて、

『まかし、君、僕は何も君に恨みを云ふのでは無いが、何故君は僕に其の友人の名を、岩崎五十子といふもののだとは云つて呉れぬ？。イヤ、吃驚しないでも宜い、意見は云は無いが、』

と、何事かを徐に云ひ出さんとすれば、水野が面はたゞ火となつたり。



## 其十七

自信は強くとも、學問は博くとも、氣の働きは八方に鋭くとも、未だ世に老いぬ心の柔輭に嫩ければ、人には知らさず秘め置きたることを、つけ／＼と觀面に云ひ出されては、胸の眞正中をまた、かなる箭に、羽中の節せめて射込まれたる思ひして、ハツと驚き惑ひしが、元來底の弱からぬ男なり、忽ち我に返つて惡びれず、靜かに我が腔内の血の跳りの鎮まるを待ちながら、身動きだにせずして大人しく、島木のいふところを聞かんと仕たり。

島木は人の情の流れの瀬に、慣れきつたる鵜の目の働き敏捷く、日の光の明らかなるに我が影を怯づる若鮎の振舞の、優しくもまほらしき水野が様子を見て取つて、曾て吉右衛門より聞きしと、今直接に聞きしとの二つの談話に照らし合はせて、大概の事は曉り盡しつ、今更にまた油然として愛憐む心の起るに堪へぬが如く、言葉づかひも碎けて

露隔氣なく、いと親しくも説き出したり。

『ねえ君、可厭なものは、無心を聴いた後で意見云ふ奴だと、古から云つてあるぢやあ無いか。ハ、まさかに僕だつて其位な事は知つて居るから、此處で下手な叔父さんの役を勤めて、何の彼のと難かしい事を云ふなあ自分で願ひ下げるし、又理屈なんぞといふ野暮なものを、餘り有り難いと思つてゐる僕でも無いから、君が何様仕やうと、それを兎や角いふ僕ぢやあ無い。悪い事さへ仕無けりやあ、好きな事を仕て面白く世を渡るのが、可いぢやあ無いかといふのが僕の宗旨なのは、君も知つて居る通りの事だ。だから意見と思つて聞いて呉れちやあ困るが、たつた一つ君に聞いて置いて貰ひたい事がある。下らない事では有らうが、聞いて呉れたまへ。僕は随分今までの品行が、疵瑕だらけの大馬鹿な奴なんだから、當世でよく云ふ神聖な戀愛、——そんな上品なものあ知らないが、戀愛も惚れたはれたも同じ事として、マア僕だけで云つて見りやあ、戀愛は可怖いものぢやあ無いが、戀愛に随いて來る随伴者は怖い、とつくづく身に染みて覺えて居るんだ。そこ

で君<sup>きみ</sup>に其<sup>そ</sup>の随<sup>お</sup>伴<sup>とも</sup>者<sup>も</sup>だけにやあ戒<sup>よう</sup>愼<sup>じん</sup>して貰<sup>もら</sup>ひたいと思<sup>おも</sup>ふ。云<sup>い</sup>つて置<sup>お</sup>きた  
いと云<sup>い</sup>ふのは只<sup>ただ</sup>これ一<sup>ひと</sup>つだ。いゝかエ、惚<sup>ほ</sup>れたはれたの其<sup>そ</sup>の迷<sup>まよ</sup>ひは、  
些<sup>ちつと</sup>も可<sup>こ</sup>怖<sup>は</sup>い事<sup>こと</sup>は無<sup>な</sup>いが、それに付<sup>つ</sup>いて來<sup>く</sup>る随<sup>お</sup>伴<sup>とも</sup>者<sup>も</sup>は怖<sup>こは</sup>い危<sup>き</sup>険<sup>けん</sup>ものだ  
といふのだよ。』

## 其十八

僕は元から學問は嫌ひだし、身に浸みて書を讀んだ事も無いから、どうせ僕の云ふ事などは下ら無からうが、まんざら正中に外れたことも云は無いつもりだ。かういふ理屈だ、聞いて呉れたまへ。僕に云はせりやあ色戀といふ奴あ、人間が一人並に成熟ると、一度は屹度發する熱病なので、身體の中から自然に湧く奴だ、各自の料簡から出て來るんぢやあ無い。そりやあ其の當人から云つて見りやあ、彼處が好いか、此處が好いとか、それぐに理由が有つて惚れるのも有らうが、ナア二年齡が爲せるんだよ、年齡が爲せるんだよ。彼の女あ好いからサア惚れて遣らうと、分別をつけてから惚れる奴は無い。誰の戀路も同じ事で、其の眞實のところを云やあ、自分にも理由は分らないけれど、何だか知ら無いが自然に好く、それが抑々の發端で、其の人の笑顔なんぞが何時の間にか眼に染み付いて遣つたり、物を云つた聲の色

が耳に遺つたりして、終にはすつかり其人が自分の胸の中に在るやうになる、サア忘れやうと思つても忘れられない、始終其人の傍に居て見たくなる、離れて居ちやあ物悲しくつて、何と無く氣が濟まないやうな心持ちがする、自分が其人を思ふやうに、其人にも自分を思つて貰ひたくなる、それから段々と泣いたり笑つたりが始まる、まあ斯様云つた順立ぢやあ無いか。あて見りやあ自然に好くといふのが戀の水上だが、自然の好惡だもの、理屈は有りや仕無い、みんな年齢が爲せるんだ。懷妊者は酸いものを自然に好く、溜飲持は香物で茶漬飯を自然に好く、其の自然に好くのは誰がさせる？、惡阻が爲せるんだ、溜飲が爲せるんだ、戀路の迷惑は年齢が爲せるんだ。男兒が男兒づくる頃にやあ髭鬚が生えて来る、髭鬚の生えるのは年齢が爲せるんだもの、それに善いも悪いも有りやうは無い、口の周圍に出て来る髭鬚も、心の上に萌む戀も、年端が爲せるに差異は無い、丁度同じ事だもの、ナニ戀愛を善いとも悪いとも云はう譯は無い。たゞ年齢が爲せる熱病をすらりと濟せて仕舞へば、疱瘡や麻疹が濟んだと同じに、つまり芽出

度と云へば云へるので、戀は怖ろしいものでも何でも無い。併し又、  
 君は學問もあり思慮もあるから、萬々承知仕て居やうが、お互いに  
 男兒といふ奴は、戀愛の奴隷に生まれて居るものでも何でも無い、そ  
 れゝ男子一匹前の目的のために意氣地を磨いて一生を働いて行かう  
 といふ身、戀に捲き倒されちやあならねえ身體だ、其の熱病に身體を  
 遣る譯にやあいかねえ約束がある。病にも軽い重いもあり、戀にも深  
 い浅いは有らうが、如何に戀に悩んでも苦しんでも、吐く息が火にな  
 つて燃えるほどに狂はうとも、戀に負けて死んぢやあ男子たる身の、  
 眼が瞑げねえ筈だ。イヤ瞑げねえ、どうしても死きれねえ、死ね無え  
 筈だ。乃公あ死な無え、死にも仕無えが、汝も死ねめえ、死にもすめ  
 えナ。知れ切つた事だが、ナア水野、お互いに幾干若干の苦勞を仕て、  
 今日まで遣つて來たなあ何の爲だ？。志こそ異ふけれど、男兒と生  
 れた生れ甲斐にやあ、各自の念願を遂げやうと、そればかりの爲ぢ  
 やあ無えか。特さら汝は乃公から云やあ、マア慾の無さすぎる偏人  
 で、取れる錢も取らず出世も望まず、大根人參の尻尾を咬つて、それ

で濟<sup>す</sup>まして居<sup>ゐ</sup>るやうな遣<sup>や</sup>り方<sup>かた</sup>。ア、世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>はいろ／＼のもんだ、水野<sup>みづの</sup>  
 だつて不味<sup>まず</sup>いものあ不味<sup>まず</sup>く、美味<sup>うま</sup>いものは旨<sup>うま</sup>からうが、其<sup>それ</sup>にも此<sup>これ</sup>にも  
 頓着<sup>とんちやく</sup>無く、若<sup>わか</sup>い身天<sup>みそら</sup>で色氣<sup>いろけ</sup>も無く、下<sup>へ</sup>手<sup>た</sup>な律僧<sup>りつそう</sup>は及<sup>およ</sup>ばぬ身持<sup>みもち</sup>で、たゞ  
 學問<sup>がくもん</sup>に凝<sup>こ</sup>つて居<sup>ゐ</sup>る、ア、聖人<sup>せいじん</sup>と云<sup>い</sup>ふなあ彼様<sup>あんな</sup>な男<sup>をとこ</sup>の事<sup>こと</sup>知らん、餘所<sup>よそ</sup>  
 目<sup>め</sup>から見<sup>み</sup>ては氣<sup>き</sup>が竭<sup>つ</sup>きて、何<sup>なん</sup>だか憫然<sup>かあいさう</sup>なやうな氣<sup>き</sup>がすると、思<sup>おも</sup>つた位<sup>くらゐ</sup>  
 に月日<sup>つきひ</sup>を經<sup>へ</sup>て來<sup>き</sup>た、其<sup>その</sup>の汝<sup>おめへ</sup>の難行苦行<sup>なんぎやうくぎやう</sup>も何<sup>なん</sup>の爲<sup>ため</sup>だ。やつぱり何時<sup>いつ</sup>か一  
 度<sup>ど</sup>は汝<sup>おめへ</sup>は汝<sup>おめへ</sup>で、男兒甲斐<sup>をとこがひ</sup>のある仕事<sup>しごと</sup>を仕<sup>し</sup>やうためばかりの事<sup>こと</sup>ぢやあ無<sup>な</sup>  
 いか。その木食坊主<sup>もくじきばうず</sup>かなんぞのやうな、味<sup>あじ</sup>の無<sup>な</sup>い長<sup>なが</sup>い月日<sup>つきひ</sup>の生活<sup>せいかつ</sup>さへ  
 も、笑<sup>わら</sup>つて仕<sup>し</sup>て來<sup>き</sup>た汝<sup>おめへ</sup>だもの、何様<sup>どんく</sup>な苦<sup>くる</sup>しい戀<sup>こひ</sup>に落<sup>お</sup>ちても、よもや本<sup>ほん</sup>  
 心<sup>しん</sup>を失<sup>うしな</sup>つて、熱病<sup>ねつび</sup>に負<sup>ま</sup>けて仕舞<sup>しま</sup>ふやうなことは有<sup>あ</sup>るめえが、さあ、戀<sup>こひ</sup>  
 愛<sup>ひ</sup>は怖<sup>こは</sup>かあ無<sup>な</sup>えが隨伴者<sup>おとも</sup>が怖<sup>こは</sup>い、案<sup>あん</sup>じられてならねえところが其處<sup>そこ</sup>に  
 ある！。

## 其十九

『随伴者と云ふな、他ぢやあ無えが、戀に隨いて來る心氣の疲勞だ。お  
 互いに覺えのある事だが、男の兒といふ奴あ十三四から、そろ／＼野  
 心が燃え立つて來て、威張つて見たい、人に勝ちたい、功が立てたい、  
 名が立てたい、天下が取りたい、と氣象相應の望みを起すが、それで  
 も其の時分の腹中は清潔なもので、たゞ醇酔の大望心があるばかり、  
 乃公あ太閤だぞ、拿破崙だぞと、各自に力む其勢で、伸びも育ちも仕  
 て來るが、遅かれ速かれ時節が來て、戀という奴に魅入られちやあ、  
 さあ腹の中が揉めて來る。大望心は大望心で居しかつて居る、戀の心  
 は戀の心で自由に働く。双方が頭は下げないから、衝突りやあ何様し  
 ても忽ち戰爭で、那方が勝つにしても負けるにしても、なか／＼樂な  
 争闘ぢやあ無い。戀が負けて倒れりやあ其の傷口から、溢れる血潮が  
 急にやあ止まらず、大望心が負けりやあ其の英氣は、未練氣無く去つ



て仕舞つて呼んでも還らねえ。つまり何様なつても根が同士討の、酷  
 い戦争に國土は荒れて、遺るものは怖ろしい心氣の疲勞！。櫻色して  
 居た面は白けて、葛の葉裏を見るやうになり、眼は冴えなくなる、白  
 髪はさす、強い奴は癩癩持になる。弱い奴は萎縮漢になる。筋骨は弛  
 んで仕舞ふ、勞苦嫌ひになる。其の位なのは未だ可い分で、随分怖ろ  
 しい病氣さへも引出す。よしんば大望心と戀愛とが衝突らないで、腹  
 の中がそれほどには揉め無いでも、向ふに的の無い戀は無いから、星  
 に中る中らぬは時の運身の運！。相手と馬が合ふ合はぬもあるし、相  
 手とは死ぬほどに好き合つても、自分たちばかりのために出來て居る  
 世界ぢやあ無いもの、何がさて外道も居る、惡魔も居る、敵も居る、  
 おせつかいも居る、義理もある、人情もある、時もある、場合もあつ  
 て、随意ならぬ憂き世を泣くものが多い。左様で無くつてさへ戀を知  
 るなあ涙を知る始で、氣が優しくなる、脆くなる、感じが早くなる、  
 深くなる、何でも無い事にハツと思つたり、小な事をくよくくと案じ  
 たり、前表といふやうな事を氣にしたり、何かにつけて思ひ過しを仕

たり、寝るべき時に寝られなかつたりする。そこで段々心氣が弱る。  
 心氣が弱りやあ愈々氣が脆くなる、感じが強くなる。氣が脆く、感じ  
 が強くなりやあ又心氣が弱る。雁齒鑢がかゝるやうなものだから堪ら  
 う譯は無い。一日一日に弱つた擧句は、魂魄が薄手になりきつて、觸  
 るものさへあれば碎けたがる玻璃かなんぞのやうになつて仕舞ふ。よ  
 く世間にある戀路の果の、飛んでも無い不幸福は皆其處で出来る。た  
 とひ嫌はれても嫌はれても、好かれないのが戀の慾で、また憂いも辛  
 いも堪忍して添ひ遂げたいのが戀の意地だ。ゑて見りやあ戀に生命の  
 捨てやうは無い、戀は生々と美しいものだ。世の不幸福な人を見りや  
 あ、戀で死ぬものは一人も無く、皆心氣の疲勞に堪へ切れ無くなつて、  
 おのが魂魄を碎いて仕舞うのだが、避けやうにも避け難いのは此の隨  
 伴者だから、戀は毫末も怖かあ無いが、其の隨伴者の心氣の疲勞は恐  
 ろしい。實を云やあ僕が君の事を素破抜いて饒舌つたから、羽勝も  
 日方も君のために、二人とも甚く心配して居る。特に日方は彼の氣性  
 だから、強い意見を云ひに行かうかも知れないが、乃公あ何も意見は

云はない。何も彼も解つて居る君の事だもの、君が詰まら無い事を仕やう氣遣ひは無いが、たゞ心氣の疲勞に負けぬやうにと、これだけを君に頼んで置く。見りやあ顔色と云ひ容態といひ、心氣が疲れて居ないやうでも無い、氣をつけて呉れ無くちやあいけないぜ。何時かは云はう／＼と思つて居たので、つい圖に乗つて長く饒舌つて、言葉さへ亂暴に言ひ過ぎしたが、意だけは是非とも汲んで呉れたまへ。千言萬言饒舌つても、身體を大切に仕て呉れるといふ、たゞの一句に止まるのだ。飯の不味い時も堪忍して食つて、成るだけ精々身體を使つて、寝るべき時にやあ整然と寝て、力足を踏んで確乎と、快活に日を送つて貰ひたいのだ。君の氣に入つたほどの人だもの、僕は其の人を知らないが、屹度好人だらうと思つて居て、君の運命の好いやうにとばかり祈つて居る。僕の力の要る事があらば、何なりと遠慮無く云つて呉れたまへ、君のために幸福になる事ならば、何様な事を仕ても僕は厭はない。馬にでも牛にでもなつて働かうが、其の代り今言つた戀の随伴者にやあ必ず負けて呉れたまうな。世界に人間は多いけれど、――

そりやあ偉い人も多からうが、此の何年を過ごして來た、君の行狀の  
 殊勝さを見ては、ア、眞似たつて眞似られない事だ、あゝいふ男は  
 今の世には、中々二人とは有りはすまい、島木萬五郎は俗物だが、朋  
 友にやあ幸福にも心の氣高い水野のやうな人を持つて居ると、天にも  
 地にも唯一人の大切な朋友に思つて居る君の事だから、どうか身體を  
 大切に仕て呉れたまへ、君の其の顔つきを見ちやあ案じられてならな  
 い。くどいやうだが今言つた事を能く聽いて置いて置いて呉れたまへ。』  
 と、眞情こめて云ひ終りたり。

## 其二十

磊落なれども思遣りあり、粗きが如くなれども精細なるところある  
島木が長々しき物語は、わざと我が上には貼かぬように云いたりとは  
聞えたれど、その言葉の中の節々には、既全然と我が近來の狀態を知  
り盡くして言ふと思しくて、ひし／＼と身に徹ふところの少からぬ  
に、氣息をさへ潜めて聞き居たりし水野は、胸の中は石川の清き瀬を  
流るゝ水と爽快にして、底の心は春と溫き我が友が、虚偽ならず我を  
思ひ呉るゝ其の眞情に、其と指しては捉へ難き香氣の物を罩むるが如  
くに我が身心の全部が引き包まれたるを覺えて、嗚呼我不幸福の月日  
の下に生れて、物の心も知らぬ頃より、父をも母をも失ひて、兄も無  
ければ姉も無く、世の剩され物となつて生長ちしまゝ、幼き時の心  
にも、丁稚奉公せし家に、巢くひし燕の親鳥の、日に百度も千度も飛  
んで去つては飛んで返つてまだ弱き雛に餌を運ぶを見て、顔もおぼえ

ぬ吾<sup>わ</sup>が母戀<sup>は、こひ</sup>しく、親<sup>おや</sup>のある子<sup>こ</sup>の羨<sup>うらや</sup>ましきに、あゝ泣<sup>な</sup>いたる事<sup>こと</sup>の  
 記憶<sup>おぼえ</sup>さへ、まぎ／＼と今<sup>いま</sup>に遺<sup>のこ</sup>れるなるが、それには引換<sup>ひきか</sup>へて幸運<sup>しあわせ</sup>にも、  
 ア、我<sup>われ</sup>何<sup>なん</sup>の福<sup>ふく</sup>のあつてか、自然<sup>しぜん</sup>々々<sup>／＼</sup>に知<sup>し</sup>り合<sup>あ</sup>つたる六<sup>ろく</sup>人<sup>にん</sup>の良<sup>よ</sup>き友<sup>とも</sup>の其<sup>そ</sup>  
 の中<sup>うち</sup>にも、分<sup>わ</sup>けて親<sup>した</sup>しき羽勝<sup>はがち</sup>島木<sup>しまぎ</sup>、特<sup>こと</sup>に島木<sup>しまぎ</sup>が眼<sup>ま</sup>の前<sup>あたり</sup>の友情<sup>なせけ</sup>！。お  
 澤婆<sup>さわば</sup>の言葉<sup>ことば</sup>の通<sup>とほ</sup>り、手<sup>て</sup>をついて頼<sup>たの</sup>んだつて芋塊<sup>いもひと</sup>一つも、自然<sup>ひとりで</sup>には出<sup>で</sup>  
 來<sup>こ</sup>ない此<sup>こ</sup>の世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>に、いづれ身<sup>み</sup>の油汗<sup>あぶらあせ</sup>が化<sup>ば</sup>けたに違<sup>ちが</sup>ひ無<sup>な</sup>い多額<sup>おほく</sup>の金子<sup>かね</sup>  
 をも、紙<sup>かみ</sup>の一枚<sup>いちまい</sup>でも呉<sup>く</sup>れるやうに、惜<sup>お</sup>しむ色<sup>いろ</sup>さへ無<sup>な</sup>く快<sup>こゝろよく</sup>く呉<sup>く</sup>れて、ま  
 かも君<sup>きみ</sup>のためになる事<sup>こと</sup>ならば、馬<sup>うま</sup>にでも牛<sup>うし</sup>にでもなつて働<sup>はたら</sup>いて遣<sup>や</sup>らう  
 と、身<sup>み</sup>を入れて呉<sup>く</sup>れる其<sup>そ</sup>の俠氣<sup>をていき</sup>！。人世<sup>うきよ</sup>の場数<sup>ばかず</sup>を踏<sup>ふ</sup>んで來<sup>き</sup>た人<sup>ひと</sup>には、  
 随分<sup>ずぶん</sup>幼稚<sup>こども</sup>にも若輩<sup>じやくはい</sup>にも思<sup>おも</sup>はれようか知<sup>し</sup>れぬ事<sup>こと</sup>なるに、我<sup>わ</sup>が情緒<sup>おもひ</sup>の上<sup>うへ</sup>に  
 就<sup>つ</sup>いては咎<sup>とが</sup>め立てもせず、年<sup>とし</sup>齡<sup>れい</sup>の所爲<sup>せゐ</sup>にして仕舞<sup>しま</sup>つて一<sup>ひ</sup>ト言<sup>こと</sup>も云<sup>い</sup>はぬ  
 寛大<sup>おほやう</sup>さ！。たゞ身<sup>み</sup>體<sup>からだ</sup>を大<sup>だい</sup>切<sup>じ</sup>に仕<sup>し</sup>て呉<sup>く</sup>れると云<sup>い</sup>つて呉<sup>く</sup>れる其<sup>そ</sup>の親切<sup>しんせつ</sup>！。  
 嗚呼<sup>あゝ、あに</sup>兄<sup>にい</sup>と云<sup>い</sup>はうか、姊<sup>あね</sup>と云<sup>い</sup>はうか、兄<sup>あに</sup>も姊<sup>あね</sup>も中々<sup>なか／＼</sup>かうばかりはあるま  
 い。まして朋友<sup>ともだち</sup>と云<sup>い</sup>はうには勿體<sup>もつたい</sup>無<sup>な</sup>いほど。人<sup>ひと</sup>に云<sup>い</sup>はれぬ苦悶<sup>くるし</sup>みを抱<sup>いだ</sup>  
 けば、何<sup>なに</sup>につけ彼<sup>か</sup>につけて此<sup>こ</sup>の世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>を、味氣<sup>あぢき</sup>無<sup>な</sup>く思<sup>おも</sup>ふ時<sup>とき</sup>のみ此頃<sup>このころ</sup>は

多かりしが、あゝ有り難き天の恩恵、水野静十郎幸福にして、かゝる信義の友にも未だ棄てられねば、ア、思へば我は世にも稀なる幸運を受け得たる身なるかな我が行末も光ありて、強ち黒闇のみならず見ゆ、と悦ぶにも先づ涙にて、謝する言葉もたどくしく、

『ア、島木君、感謝する。免して呉れたまへ、僕は何にも言ふことが出来無い。言ひたい情懷は澤山あるが胸が張つて居て何にも言へない。實に々々君の親切は深く謝する。君の談は骨に浸みて解つた。決して忘れ無い、決して忘れ無い！。成程何に巻き倒されては濟まない身體だ！。僕も果敢ない思に死にたかあ無い！。いや僕は怎樣まかり間違つても脆くは死なゝい！。戀情は戀情だけれど、大望心は大望心だ！。身體も必ず大切にする。』

と、強て勉めて答へたり。  
夜は彼一句此一句の二人が親しき物語に漸く盡きて、早くも曉天近くならんとすれば、水野は終に島木が許を辭して、情中に阿堵物あるに勢ひ好く、紫色立てる天の星薄れ行きて朝風の徐徐に吹き出す頃、相

良<sup>が</sup>家<sup>いへ</sup>を敲<sup>たた</sup>き起<sup>おこ</sup>して昨<sup>きの</sup>日<sup>う</sup>の恩<sup>おん</sup>を謝<sup>しや</sup>し、猶<sup>なほ</sup>信<sup>た</sup>頼<sup>た</sup>むに足<sup>た</sup>るべき看<sup>かん</sup>護<sup>ご</sup>婦<sup>ふ</sup>を世<sup>せ</sup>  
話<sup>わ</sup>せんこ<sup>こ</sup>を乞<sup>もと</sup>ひ求<sup>もと</sup>めて、其<sup>そ</sup>の快<sup>こゝろ</sup>く諾<sup>うけ</sup>ひ呉<sup>く</sup>れたるに心<sup>こゝろ</sup>勇<sup>いさ</sup>み、足<sup>あし</sup>輕<sup>かろ</sup>く  
歸<sup>かへり</sup>路<sup>り</sup>を急<sup>いそ</sup>ぎて、淺<sup>あさ</sup>草<sup>くさ</sup>の雷<sup>かみ</sup>神<sup>なり</sup>門<sup>もん</sup>前<sup>まへ</sup>にさしかゝりぬ。



## 其二十一

おもふ人の病は篤けれども、思ひし事は皆爲し得たり、相良も今一度  
 見舞ひて尾竹にあひて種々の心添をもなし置かんと云ひ、良き看護婦  
 をも晝までとは過ぎず四つ木に遣り呉るゝ手筈に定まりたり、この上  
 はたゞ健やかなる婢一人を看護婦の指揮の下につけて雑事に當らすれ  
 ば、もとより介抱の此上無く行届きて善を盡くしたりと云うべきには  
 あらねど、今の身にての我が心の及ぶほどだけは盡くしたるなり、と  
 思ふにつけて人知らず楽しく、愁の中にも幽なる笑の催さるゝ心地し  
 て、願はくは我が五十子の病の漸く痊りて、心盡しの甲斐もあれか  
 し、暴き雨風に根を揺がされて敢無くも天壽ならず枯れんとする樹  
 を、おぼつか無きながら支へ培ひて、復び花咲く春の曉に、丹誠の甲  
 斐ありて美しく日に匂ふを見ば、如何ばかりか心の嬉しからん、それ  
 につけても昨日よりの長き夜一夜を、我が五十子は如何なる状態に送

りたらん、熱の烈しく進すことは無かりしか、強く苦む事は無かりしか、ともすれば心臓肺臓の此の病には悪くなるものと聞きたるが其等の凶きことは無かりし歟、尾竹も親切の男なれば、容態悪くば附き、りに附きても居ては呉れたるべけれど、氷より冷い心の彼のお澤婆、くれぐれも頼み置きたる氷囊の世話さへ、既に一昨日といひ昨日と云ひ、碌に身に染みても爲て呉れざりし、あゝいふ不幸の處に居合はせたる病人の、思へば一夜が氣遣はるゝ、と偶然思念の其處に片荷づゝては矢も楯も堪らず、物淋しく薄暗き離れ屋の中の、孤燈力無く照らす光の下に、頭髮は亂菊の花瓣の霜に傷める姿と崩れて、悶え悶えつゝ、埒無く病み臥せる態の、眼の前にありくと浮み來るやう覺えて、島木が寓を敲きたりし折、頭を反して、偶然見し北の空に、大なる美しき星の長々と光を曳いて流れて消えしも、思ひ合されて今更急に何と無く忌はしく、おもはず慄然として天を偷み見たり。

天は今日白みわたりて靜に、星辰は潛みつ、瑠璃の盤上に金砂を撒きし數時間前の光景は痕も無く消え去つて、またありしおもかげを忍ぶ

べくもあらぬ狀なるに、おのづと新しき清旦の氣を受けて胸も開き、  
 ア、前表といふやうなる事を氣に仕たる愚さ、島木の言葉にも羞かま  
 かりし、と私に自ら女々しきを慚ぢたり。されど心は一度動きて復安  
 まらず。曉に消えし星は再度夕に見るべけれども、一度去つては行く  
 方知れぬ人の身の、死生の抑々何に繋りて、禍福の將又何に本づくか  
 も分からぬ茫々たる劫運の測り難く窺ひ難きに思ひ到りては、あゝ頼  
 まれぬ人の世なるかな、我が心の膏を燃やし、骨の髓を焚きて、願望  
 は大ならぬ我が身の周圍に、聊かの光明を得んと願ふも、運命の風の  
 容赦無く吹き荒まんには、頼む影なき裸火の、脆くも忽ち吹き滅され  
 て、天地は情無き闇となるべし。おもへば小きは人の力なり。かほど  
 に身を勞らせ心を盡して、我が思ふ人好かれと我は願へど、慈悲有り  
 や無しやおぼつかなき、運命といふものゝ、意任せ！、其の心が人情  
 を知つて呉れうでも無ければ、思へばく悲しきは人の世！。平生は  
 天翔ける事も爲さば爲すべき雄心持ちし我なりしが、身に染みて今ぞ  
 人間の甲斐無きを知りつる！。天は限り無く大なるに、我は糠星の其

より微かすけく、地ちは涯はても無なく廣ひろやかなるに、身みは塵ちり土ひちと小ちひなる、此この某なに甲がしが懷いだける念おもひの、運うん命めいに對むかへる其その眞ありさま態たは、譬たとへば一いち縷るの細ほそきく、毛けの如ごとく蜘蛛くもの圍いのごとき絲いとを、千せん萬まん馬ば力りきもて轟とろろき廻まはれる大だい車しや輪りんに繫かけて、其その車しや輪りんの我わが願ねがふ方かたに廻まはらんことを、竊ひそかに願ねがひ求もとむるが如ごとし。嗚あ呼ゝ、我わが願ねがひの聽きかるべきや?。心こゝろ細ほそくもまた心こゝろ細ほそくて、情なさけ無なく物もののみの思おもはるゝ世よかな!。我わが智ち慧ゑの今いま効かひ無なきを知しり、我わが意おも念ひの今いま孱よわ弱じやくきを知しり、斷たえぬ泉いづみと湧わき上ある戀こひの誠まことに洗あらはれて、心こゝろは無む垢くの往むかしに返かへりぬ。ア、今いま我われは嬰みどり兒こなり!。天てん地ちの那いづ處くに慈は母はの御お坐はす?!。泣なきて呼よび度たき心こゝろ地ちぞする。と曉あか天つきの猶なほ靜しづ寂かにして人ひとの通とほりも稀まばらなるに、深ふかくも心こゝろの奥おくに思おもひ入いつたる水みづ野のは、ふつと我われに返かへつて頭かうべを擡あぐれば、身みは何いつ時ほどの程ほどにか來きたりけん、塵ちり埃な無あき朝あしたの露つゆけき石せき路ろの、長なが々くしきを知しらぬ間まに過すぎて、今いまや淺せん草さう寺じの山さん門もんを、既すでに半なかばは潛ひそり居ゐたり。

晝ひる間まは賑にぎやかなる中なか店みせも、猶なほ寂しやく々くとして物ものの響ひびき傳つたへず、御み扉とびらを今いま開ひらきしばかりの、御み堂だうの内うちは仄ほの暗くらきに、御み燈あかし明みの煌きら々と黄こ金がね色いろに見みえて、

朝勤<sup>あさづと</sup>めの讀經<sup>どきやう</sup>の聲<sup>こゑ</sup>は殊勝<sup>しゆしやう</sup>に澄<sup>す</sup>み渡<sup>わた</sup>り、御堂<sup>みだう</sup>の萱<sup>いらか</sup>は天<sup>そら</sup>に聳<sup>そび</sup>えて、そこ此<sup>こ</sup>處<sup>ゝ</sup>に立<sup>た</sup>てる老樹<sup>おいき</sup>の銀杏<sup>いでふ</sup>は、まだ下<sup>お</sup>り立<sup>た</sup>たぬ鳩雞<sup>はとり</sup>を宿<sup>やど</sup>して、睡<sup>ねむ</sup>れるが如<sup>ごと</sup>く靜<sup>しづか</sup>かに秋<sup>あき</sup>の曙<sup>あした</sup>の色<sup>いろ</sup>を見<sup>み</sup>せたり。

水野<sup>みづの</sup>はあはれにも頭<sup>かうべ</sup>を下<sup>さ</sup>げて、か<sup>を</sup>つて拜<sup>をが</sup>みしことなき觀世音<sup>くわんぜおんぼ</sup>菩薩<sup>さつ</sup>を、  
此日<sup>このひ</sup>はじめて涙<sup>なみだ</sup>の眼<sup>め</sup>を閉<sup>と</sup>ぢ、一<sup>いつしん</sup>心に拜<sup>をが</sup>み奉<sup>たてまつ</sup>りたり。

## 其二十二

我が戀叶へかしとも祈らばこそ、たゞ人の命の暴風雨に揉まるる芭蕉  
 葉と危きを悲みて、只管に我が五十子禍災無かれとのみ、堪へがたき  
 思の誠を致して、他念も無く水野の願ひ奉れる折から、我傍にも人あ  
 りて、先刻より普門品をほそくと唱へ居けるが、既に偈のところにかゝりて漸く勢づき、弘誓深如海の句あたりより噺れたる聲もおのづ  
 から張り來りて、いま、或漂流巨海、龍魚諸鬼難、念彼觀音力、波浪  
 不能没と調子に乗りて打誦せるを見たり。  
 たゞ一ト筋に頼み奉る思は聲の色にも現れて願ひ求むる態の偽ならず  
 聞ゆるは、如何なる苦惱のある人なるか、と我が胸に疼痛あれば他の  
 胸の疼痛も餘所ならず覺えて自己念じ終りたる水野は其人を見るに、  
 衣服こそは見苦しからね、がりゝと瘦せて手足のみ徒に長う見えたる、  
 髪は既に薄くして光澤無き猫毛のほやくと烟のやうに残れる、脱け

上りたる額の特に廣く、下り長き鼻の細くして淋しき、下作にはあら  
 ねど甚く貧相なる男の、眉間に苦しげなる八字の皺を深々と疊みて、  
 猶しきりに念彼觀音力、應時得消散など、誦しつづけたる状態の、老  
 いたる人だけに愍然さ勝るのみならず、時々ときどきの聲の曇りて顫ふに、其  
 の胸の中も推測られて物悲しく、あゝ憂を懷くものは我ばかりにはあ  
 らざりけり、心の痛苦に堪へかねて、此人も御佛を頼むなるべし、妻  
 や病み臥せる、子や患へる、或は老いて子の無き歟、子ありて或は不  
 孝なる歟、いづれ悲しき事情あらんと、そゞろに心惹かれて直には見  
 棄てかぬる思したり。  
 早歳の冷氣早き秋の曉天の事とて、寒きやうに廣々としたる御堂の  
 中は、此人と我とのほかに人も見えず、香の氣しづかに薰じて殊勝さ  
 身に浸み渡り、見上ぐる眼を照らす施無畏の三大字は、一世に秀し佐  
 文山が長櫃三個の反故をつくつて纔に書きしといふ傳説さへ、おのづ  
 と想ひ起さるゝばかり筆勢適麗に、金光美しく高く懸りて、まこと  
 に人をして慈眼視衆生の菩薩の威力を仰がんとする心を發さしめ、た

まゝに鳩のはたゝと飛んでは静かさを破るのも却つて寂びて、平生の賑はじさに引反へて今朝の此の御堂の神々しく尊さに、水野は今まで知らざりし趣味をおぼえたり。

妙音觀世音、梵音海潮音、勝彼世間音、と老いたる人の誦する聲は、いよく眞心籠りて澄み行き、普門品は今や終るに近からんとす。

時に御堂の内俄に騒がしく、がたごと、薩摩下駄踏み鳴らす音を憚り氣無く伽藍に響かせて、太きく洋杖もて益も無く床板を突きちらし、撲きちらしながら、入り來れる二人の書生あり。酔を帶びたりとは見えねど反響の起るほどの馬鹿聲をあげて、

『ハツ、オイ、まだ此様なものを本氣で禮拜して居るものがあるぜ!。』

と、紺絞の兵兒帶を締めたるが云へば、

『ウン、可憐なものさ、五六世紀も前の思想に養はれて居るのだからナ。』

と、白金巾の帶したるが答へたり。

『我輩の親分は、基督が代表した馬鹿思想を奴隷道德と罵つたが、我輩



は法然日蓮の代表した馬鹿思想を乞食道徳と斷言するが、何様だ、可からう。』

『ウン、偉い！。釋迦が事實上乞食だから猶可笑しい。それなのに、木佛金佛を拜む奴さへあるのだからナ。ほんとに本能主義の有り難い、大もての美的境界でも教へて遣りたいナ。ハ、ハ、ハ、ハ。』

『や、酷いところで自惚る奴だナ。ハ、ハ、ハ。』

十八間四面の御堂も動ぐばかりに高笑ひして、繪に見る惡鬼羅刹が持てる鍬杖の如き恐ろしき重げなる杖もて、我が踏める床を、我が威風

を見よとばかりに、どしんと突きたり。

皆發無等々阿耨多羅三藐三菩提心と、念じ終りて禮拜し濟したる老いたる男は、頭を擡げて水野と顔見合はせて、おもはず互に眉を顰めざるを得ざりき。

## 其二十三

そら 天の彼方に颶風を起し、ニイチエが眞趣を實に知れりや、それも覺束  
 な 無げなる書生の放言の、餘りの事に傍痛くはおぼえたれど、意を動か  
 いた すほどにも至らざりければ、他は他なり、我は我なり、關係無き禽の  
 こゑ 聲の、それまでの事なりと聞き捨て、既に『ツアラツウストラ如是  
 せつ 説』をも窺ひ讀まぬにあらざりし水野は、ぶろりと冷やかに彼の二人  
 いちべつ をば一瞥せしのに止まりて、徐々此處を去らんと歩み出せば、彼の  
 おとこ 老いたる男も一齊にと隨へり。  
 さまひと 世の態人の情漸く移りて、礎は舊に依りて固く、棟は舊に依りて高け  
 いま れども、今は此の莊嚴なる御堂の内にさへも、謗法毀佛の暴れ聲起り  
 たへ て、譬喩を取りて云はゞ月黒き夜の大潮の、洲を呑み岩を噛みて漸く  
 をか 大地を犯さんとするが如くに、何時となく破壊の吶喊の押寄するは、  
 いはゆるまつばふげうき 所謂末法澆季の是非も無き當時の大勢なり。書生は猶がたりごとり

と、力足<sup>ちからあし</sup>を踏み杖<sup>つゑ</sup>を突き立て、歩き居<sup>ある</sup>しが、紺絞<sup>こんしほり</sup>の帶<sup>おび</sup>したるは、急に虚空<sup>こくう</sup>に杖<sup>つゑ</sup>を擧<sup>あ</sup>げて、掲<sup>か</sup>げられたる額<sup>がく</sup>の一つ<sup>ひと</sup>を指<sup>さ</sup>しながら、

『面白いナア、此<sup>こ</sup>の一つ家<sup>や</sup>の畫<sup>ゑ</sup>は！、どうも巧<sup>よ</sup>く出來<sup>でき</sup>て居<sup>ゐ</sup>るナ、氣<sup>き</sup>に入<sup>い</sup>つたナア！。』

と云<sup>い</sup>へば、

『ム、』

と、白<sup>しろ</sup>き帶<sup>おび</sup>したるは其意<sup>そのい</sup>を得<sup>え</sup>ぬげに應<sup>こた</sup>へつ、

『あかし御厩<sup>みうまや</sup>の喜三太<sup>きさんた</sup>も好<sup>い</sup>いぢやあ無<sup>な</sup>いか。』

と附加<sup>つけくは</sup>へたり。

『馬鹿<sup>ばか</sup>ツ！。そりやあ技術<sup>ぎじゆつ</sup>だけの論<sup>ろん</sup>だ。云<sup>い</sup>ふなあ其處<sup>そこ</sup>ぢやあ無<sup>な</sup>い。よく見<sup>み</sup>ろ！ 吾輩<sup>わがはい</sup>の此<sup>こ</sup>の一つ家<sup>や</sup>の圖<sup>づ</sup>を！。何様<sup>どう</sup>だ彼の婆<sup>ばあ</sup>さんの顔<sup>かほ</sup>の立派<sup>りつぱ</sup>なこと！。實<sup>じつ</sup>に立派<sup>りつぱ</sup>ぢやあ無<sup>な</sup>いか、立派<sup>りつぱ</sup>ぢやあ無<sup>な</sup>いか！。國家<sup>こくか</sup>の法律<sup>はふりつ</sup>なんぞといふ奴<sup>やつ</sup>ア踏<sup>ふ</sup>み付<sup>つ</sup>け切<sup>き</sup>つた彼の顔<sup>かほ</sup>つき！。世間<sup>せけん</sup>の善惡<sup>ぜんあく</sup>の沙汰<sup>さた</sup>なんぞを寄<sup>よ</sup>せつけも仕無<sup>しな</sup>い彼の顔<sup>かほ</sup>付<sup>つき</sup>！。戀<sup>こひ</sup>も人情<sup>にんじやう</sup>も無<sup>な</sup>い彼の顔<sup>かほ</sup>つき！。邪<sup>じゃ</sup>でも非<sup>ひ</sup>でもまかはない彼の顔<sup>かほ</sup>つき！。おれが勝手<sup>かって</sup>だぞといふ彼の顔<sup>かほ</sup>つ

き！。神でも佛でも對面へまはつたら斫殺つて遣らうといふ彼の顔つき！。あゝ何と立派な顔に書いてあるでは無いか。十分に惡人の偉大な精神が發揮してある！。誰だつて此の繪を能く見たらば、強惡が美しいものだといふ事に氣が付くだらう！。見ろ、彼の娘が卑小な惡びれた様子を！。人に縫りたがるやうな、哀愍を乞うやうな、泣き出しさうな、切なさうな、善惡の道理を怖がつて居るやうな、國家の規律なんぞにびく／＼して居るやうな、神佛なんぞにおど／＼して居る、まみつたれた、見つとも無い醜態が、すつかり見えて居る！。所謂善人といふ奴が卑劣なもので、下らないものだといふ事は、何様な馬鹿な奴の眼にも映るだらう！。何様だ、好いちやあ無いか好い晝ちやあ無いか。何様だ、分かつたか、好いか、オイ、君！。此の一つ家の御婆さんが國王になりやあ、世界中を斬り伏せて寢酒の下物に仕て遣らうと、手に持った利器を振り舞はすんだ！。もし此の娘が國王になりやあ、彼方へも此方へも氣がねを仕て、一年中ベそをかいて居なけりやあならなんだ！。何様だ、強惡に限るだらう！。一體眞實の理屈か

ら云やあ、此の娘の方が善なのだからナア。』

『ウン、成程々々。強悪は眞實に偉いナア！。だけれど憫然に今の世界ぢやあ、男子でも此の娘のやうな奴ばかり多いぜ！。ハ、、。』

『ハ、ハ、、、左様だ、く、笑つて遣れ、笑つて遣れ。アツハツハツハ、、。』

『アツハツハツハ、、。』

朝詣りする人のちらほらとは見え初めたれど、猶極めて四邊の物靜かなれば、聞けよがしに聲大きく語らふ二人の談は、既に御堂を離れて石路を歩める水野と彼の老いたる男との背後より響きて、態とらしき其の嘲り笑ひも一々聞こえたり。今しも水野と並びて歩ける彼の男は再び水野と面を見合はせつ、終に堪へ兼ねてか口を開き、

『大變な世の中になつてまゐりました！。私共の倅なんぞも學校へ遣つて置きましたら、まあ張張り彼様いつた調子になりまして、人に苦勞ばかりいたさせます。御参を致しますのも、實を申しますと、つまりは其様な譯から起つた事のためでございますが、……』

と、思ひ餘つたる憂さを漏らしかけしが、流石に心づきて、馴染無き

人に吾が家内の事を言はんもはしたなしとてや、

『御利生を現はさうとして書きました額を見て、一つ家の婆さんの方を  
褒めますなんて、ほんに淺草寺はじまつて以來無い事でございまいしや  
う！。まあ何といふ間違つた事で！。』

と、談を横に逸らしたり。水野は當たり障らずに、

『まことに左様でござります。』

と、穩やかに答へて多くは言はず、たゞ人の親には情篤きが多き  
に、人の子にはまた彼等二人の如く心放縱なるが多き世の相の、さ  
まぐなるを思ひて歎じながらも、今の書生の笑ひ聲には、少からず  
不快を覺えたり。

自ら知る我が昨夕のありさまは、取りも直さず旅の人を護へる彼の  
娘にも似て、病める五十子を恤らんがためとて、一つ家の婆にも似  
たらん彼のお澤婆に、下げがたき頭を幾度も益無く下げて、あかも益  
無く云ひ斥けられたる其事の今さら胸に浮み來れば、當無く放ちたる

には疑<sup>うたが</sup>ひ無<sup>な</sup>き嘲笑<sup>わらひ</sup>の矢<sup>や</sup>も、あたゝかに我<sup>わ</sup>が背<sup>そびら</sup>に立<sup>た</sup>てる心地<sup>こゝち</sup>して、厭<sup>いと</sup>はしき思<sup>おもひ</sup>の比<sup>たと</sup>ふるに物<sup>もの</sup>無<sup>な</sup>く、身<sup>み</sup>の内<sup>うち</sup>を搔<sup>か</sup>き撈<sup>むし</sup>りたきやうなる感<sup>かん</sup>じを懷<sup>いだ</sup>きつゝ、夢路<sup>ゆめぢ</sup>を辿<sup>たど</sup>るが如<sup>ごと</sup>く中店<sup>なかつせ</sup>を出<sup>で</sup>はづるれば、

『や、水野<sup>みづの</sup>さん。』

と、涼<sup>すず</sup>しき聲<sup>こゑ</sup>の玉<sup>たま</sup>を轉<sup>まろ</sup>ばすが如<sup>ごと</sup>くに呼<sup>よ</sup>びかけて、黒革<sup>くろかは</sup>の眉<sup>まゆ</sup>庇<sup>さし</sup>付<sup>つ</sup>きたる帽<sup>ぼう</sup>を傾<sup>かたむ</sup>けつゝ、身<sup>み</sup>を前屈<sup>まへかづ</sup>みにして走<sup>はし</sup>り來<sup>きた</sup>れる美少年<sup>みせうねん</sup>あり。彼<sup>か</sup>の老<sup>お</sup>いたる男<sup>をとこ</sup>は既<sup>すで</sup>に去<sup>さ</sup>つて在<sup>あ</sup>らず。

## 其二十四

近づくや否や帽を脱りて、眞率に頭を下げて挨拶するは、林檎の如く  
 うつくしき色澤、人形の如き端正しき目鼻立、姉の男にしても見まはしく  
 立派なるには異りて、此は女にしても見たく可愛らしと人に云はれた  
 る五十子が弟の松之助なり。

母は有りても繼しき中なり、財産は繼母に皆奪られたり、姉よりほか  
 に頼むべき人を有たぬ松之助は、往時の乳母なりしが今は下谷の廣小路  
 近くに、下梳の二人も使ふほどの女髪結となりて、堅く身を持てる  
 幸福には苦しげ無く日を送れるが許に、留守番を兼ねたる客寓人とな  
 りつ、月々姉が取る僅少な給料の内より、分けて貰ふ財布の塵芥ほ  
 どの金子を、一半は形式ばかりの食料として入れ、一半はおのれの學  
 資として、責めて某の學校の官費生となりて世に立つ道の緒を得る迄  
 と、足らぬ勝なる中にも心を勵まして、夜學の歸路は辛き冬の雪、籠



り居ゐの夏なつは堪たへ難がたき陋巷ろじやうの奥おくの矮屋こいへの暑熱あつさにも、萎めげず怯ひるまずして  
 勉強べんきやうすれば、齡としは猶數なほかぞへ年としの一七じうしちにして、思想かんがへこそは世よに磨すれざれ、  
 學問がくもんの出来できはいと佳よくして、行末ゆくすゑ發達ふたつづべく見ゆる少年せうねんなり。繼母ははは  
 不品行ふみちやうにして心曲こころがみ、有りても却かへつて無なきに劣おとれば、天てんにも地ちにも頼たの  
 み頼たのまるべきは只姊弟ただきやうだいと、深ふかくも此この弟おとの上うへをのみ思おもひて、自己おのれの今いま  
 の身みは差さし當あたりて田舎あなの草萊くさきの間に埋あひたもれ没かくるゝとも、如何いかにもして  
 弟おとの若わかき時ときを徒あだに過すしさしめず、出来できぬながらも人ひとの後のちに落おちぬほどに  
 は物學ものまなびをさせて、男兒をとこ一人前いちにんまへには生おふし立て、我が家いへの名なを擧あげさせ  
 ん、弟おとのためには挿さしたる搔頭かんざしを賣うり、着きたる衣ものを脱ぬぐとも惜をしまじと  
 は、五十いそ子こが日頃ひごろの念慮おもひなりき。  
 秋風あきかぜの中に嬰兒あかこの泣なきても、拾ひろふ人は少すくなき此この冷つめたき世よに、女をんななり、少  
 年ねんなりの、孱弱かよわき身みをもて、屈くつすること無なく凜り々々しくも立たてる、此この  
 姊あね此この弟おとの潔いさぎよくも健けんなる心掛こころがけは、同じく貧苦ひんくと戰たたかひ來きたれる水野みづのが心こころを  
 少すくなからず動うごかして、深ふかくも五十いそ子こを思おもひ思おもひて忘わするゝ能あたはざるに至いたり  
 し原因いはれの中の、力強ちからつよき一ひとつの個條かでうとはなりぬ。

されば我が五十子が身にも代へじと深くも愛しめりと思ふにつけて、  
 水野も自然松之助を他ならずおもへば、松之助もまた水野を他ならず  
 思ひ、五十子が許にて相識りてより、四五度も面を會はせたるには過  
 ぎねど、姉の如何なる故にか我をこのまざるに似ず、此兒は可愛くも  
 我に睦みて、我を眞の兄なんどの如くにあしらひ、隔意も無く打解け  
 て語らふなり。我が思ふ人の弟と思はんには、たとひ色黒く醜くとも、  
 猶厭はしき兒とは見棄てざらん、ましてこれは玉の如く美しくして、  
 加之我に親めるなり、今其の清しき眼を見張りて懷しげに我を見な  
 がら、  
 『君！、書狀を有り難う！。毫も知らなかつた。僕あ彼狀を見て吃驚し  
 た！。郵便が昨夜夜中に着いたから、それから今朝暗い中に飛で出て  
 來たんだ。姉さんは何様なだね、エ、悪いかな？、エ、エ。』  
 と、我を一家の人かなんどのやうに心易く思へる言葉つきの修飾無  
 く、姉を思へる情の溢るゝばかりに、取り繕ひ氣無く忙しく問ふを見  
 ては、今まで胸の中にもやゝとしたる一切の不快さ忌はしさも、朝

日<sup>ひ</sup>にあひて霜<sup>しも</sup>柱<sup>ばしら</sup>の嵯<sup>さ</sup>牙<sup>が</sup>として立<sup>た</sup>てるも忽<sup>たち</sup>ち<sup>ま</sup>に摧<sup>くだ</sup>き融<sup>と</sup>かさるゝ心<sup>こゝ</sup>地<sup>ち</sup>し  
て、水<sup>みづ</sup>野<sup>の</sup>は思<sup>おも</sup>はずも其<sup>その</sup>手<sup>て</sup>を執<sup>と</sup>りて、正<sup>ただ</sup>しく答<sup>こた</sup>ふるよりは先<sup>まづ</sup>一<sup>いつ</sup>句<sup>く</sup>、  
『マア安<sup>あん</sup>心<sup>しん</sup>したまへ。』  
と慰<sup>なぐさ</sup>めたり。

## 其二十五

氣遣はしさに堪へねばこそ知らず識らず大悲の御誓願を頼みて、その爲に書生の嘲笑をも受くるに至りたるなれ、それを今此の少年の姉を思ふ心根のいぢらしきとて、先づ安心したまへと眞實にもあらぬ氣休めを云ひたるは何の心ぞや、自ら欺き人を欺くとは此の事なりと、水野ははツと思ひしかど、既に口をすべらせたれば駟も及ばず、たゞ四ツ木に着きても松之助が驚く事などの無からんをば、今更又ひそかに切に念じたり。

松之助は嬉しげに水野を見て、

『では其様に甚くは無いの？、あゝ有難かつた！。僕は何の位心配したか知れない。併し平常の風邪では無いやうだつて、何病だつたの？。』と、人の一句を直に信じて無邪氣に悦べるさまの罪なさは、却つて水野の眼に憫然に見えたり。

『病氣は腸窒扶斯といふ事で、なか／＼軽くは無い病患なのだよ。あかし醫師も信用の出来る人を頼み、看護婦も今日から来る手筈になつて居るから、決して無益の心配は仕玉ふな。まあ大丈夫だと僕はおもふ。』

『ナニ窒扶斯だつて!。困つたナア、ア、其りやあ大變だ、大變だ!。ア、僕あ何様したら好いんだらう!。左様して醫者だの何ぞは誰が仕て呉れたの?。君が親切に?。姉さんにやあ其様な事の出来さうも無いナア僕が知つて居る。誰が仕て呉れたの?。君が親切に?。』

何と無く感じて知れる歟兒童心の敏くも、はや眼の中は涙ぐみて、泣き出さんばかりの顔つきの正直にも、其の然りとの一語を聞きて直に謝せんと、待ち設けたる意中はあり／＼と見えぬ。水野は自己が此度の振舞の、恩を賣るやうに取られん事を心苦しく思ひ居たれば、彼のお澤婆に對ひて云ひ置けるおもむきを、飽くまで徹さんと思へるなり。

『イ、エ。』  
思ひの外なる水野が答に松之助は合點行かぬところあり。

『ぢやあ誰が仕て呉れたの?。』

『學校の人たちが。』

『君だの校長さんだのが?。』

『マアそんなものだと思つて居たまへ。』

『ア、それぢやあ矢張り君の親切なんだ、きつと左様に違無い、僕は知つてゐる!。はんたうに君有り難う!。僕あ一生おぼえて居る!。』

淡泊にも頭を下げてあみぐと恩を謝せる松之助が心は其の手に籠もりて、水野は我が手の緊しく握られたるを感じぬ。談話は一ト先終り

けるが、問答は又突として起りぬ。

『君はこんなに夙く何處へ行つたの?。』

『少しばかり用があつて出たんだが、もう歸路なのだ。』

『其の次に觀音様へ詣つたのかエ?。』

『ム、。』

『虚言だらう。そりやあ可笑いナア、ハ、ハ。』

『何故そんなに君にやあ可笑いのかね?。』

『だつて君、君はいつか僕に教へたじや無いか。ホラ、此の觀音といふ人は聞いて思つて修めるといふ三つの學問の法則を、教へて遣した人なので、敬すべき人には違無いが、福を與へるものなんぞとして拜むのは、感心の出來ない卑しい事だと、僕が習慣でもつて拜まうとしたら、教へて呉れた事があつたもの！。その君が願ひ事なんぞ仕やう譯は無いもの！。』

實に嘗て此の少年が四つ木よりの歸るを送りがてら、共に心たのしく遊びあるきつゝ此處に來りし時、生さかしくも然る事を説きて、幸福を得んとて佛を拜む世の人の心の卑しさを笑ひし事ありしを、端無くも今云ひ出されて想ひ起せば、又新に毒箭を胸板に射立てられし心地して、堪へがたき不快さを再度覺えつ。おもへば其のみにあらず、はじめて東京にて羽勝島木等七人打揃ひて、詣るとも無く此の御堂に参りし折、島木と檀井と羽勝とは手を合せて拜み、日方と山瀬と名倉とは三人を冷笑ひしに、おのれは拜みもせねば冷笑ひもせで、我はたゞ古の賢人として大士を待たんと思ふなりとて、たゞ帽を脱ぎ

て一禮したりし古き事まで心に浮べば、一腔の中は火の散る如くに差  
 惡の情燃え立つて、菩薩の大威力を假りたき念は今猶こゝにありな  
 ら、今こゝに我を卑しくして、世の人並みに菩薩を拜みしを口惜くお  
 もふが如き感じも起りて、不安の色面に  
 出づらんを制せんとして制  
 しがたきを覺えたり。

『ハ、ハ、そんな事を云つた事も成程有つた。』

辛くも自ら克つて塞がる胸より答へ得たるは、全き意味も無き言葉  
 なり。

『さうして君は何を願つたの？』

心無く放つ少年の箭は、またもや水野が心窩の眞正中に立ちぬ。

されど水野は痛手を外にして、

『何でも可いから急いで行かう。』

と、松之助と共に四つ木へと志し、人の運命、我が運命の測り難き前  
 途を見んと、心に幾枝の箭を負ひながら、路を急ぎて歩み出しぬ。

此の時日は漸く昇ると共に、狂風滾々と吹き出して、美しかりし空は



何時いづと無く黄きばみ、暴風あ雨れ日び近ちかき天てんに氣味きあしき雲くものおだやかならず  
湧わきひろごりて、昨夜ゆうふべに變かはれる今日けふの狀態やうすの、そぞろに定め無なき人間ひと  
の上うへを示しめすが如ごとく、首かうべを傾かたむけて進すすむ水野みづのと松まつ之助のすけとの眞向まつかうに烈はげしく當あた  
る風かぜは、二人ふたりが心臓むねをして騒さわぎに騒さわがしめぬ。

## 其二十六

語りつゞけたる談話の間、息つきくにわれ知らず飲みし葡萄酒の量の少からで、既に其の六七分を盡したれば、酔興おのづから發して獨り機嫌よく、不規律の大將をもて自ら許せるほどありて、ふたゝび睡りには就かんともせず、島木は猶ぐびりぐびりと獨酌を續けたり。

むつくりと肥えたる身體ゆたかに胡坐をかきて、土多き山の岩を隠せるが如くに、肉ふくらかにして骨を見せぬ丸々としたる顔の、其の小さなる眼のあたりに笑を含み、今しもぐつと一盞を仰ぎたるが、

『もう出て來さうなものだがナ、畜生！、まだかナ。』

と、誰に云へるともなく自ら語れり。

島木は水野が胸中を知りたれど、水野は島木が肚裏を知らざりき。妻子兄弟も無く親も無ければ、氣まゝなる寄寓の面倒無きを悦びて、一家をこそは猶構へざれ、幾度か浮き幾度か沈みし末に、漸く合百の

果敢無きより、今は人の噂にも上るほどの玉高を動かすに至りし島木  
 も、もとより右は地獄左は極樂の間の綱を渡つて日を送る投機師の身  
 の上は、貨物を積み問屋を控へて十の十一の二の利を征りて行く堅氣  
 の商人とは異なれば、此處一ト伸と有らん限りの力瘤を入れて蒐れる  
 此の秋の、天候を重ねる相場の時季に、捉へかねたる雲の心風の料簡  
 は我が思はくと違ひて、追敷々々と取り立てらるゝに懷中危く、既  
 に其の剩すところは幾何もあらぬ端錢となりて、運と志との今少時  
 反かば、またもや身の皮も無き赤裸々となりて、賽の河原に積める石  
 の瓦落離と崩れたる情無さを見るべしと、流石に心もおちつきかぬる  
 ところへ、折も折とて水野の無心なり。運を背負へる時には其の二倍  
 三倍も與ふるに易けれど、夜明けての天地の狀態次第にて我が生命は  
 とさへ思へる矢先に云ひかけられては、敗軍の退き際に頼みきつたる  
 持鎗を所望されたる心地して、流石の島木も行き詰りしが、竹を割つ  
 たる如き持前の氣象は義を見て勇んで、エ、どうせ曲つて仕舞えば無  
 くなる金を、今遣つて仕舞へば友達の利益！、踏張れく男の兒だ、

裸々になつても怖くは無い、百兩ばかりの鼻糞金を出し惜んでは、萬五郎の男が廢たる！、情無い！、行末が見える！、百萬兩分限になつた時の額疵になる！、握つた錢から煙を出すのは三文野郎の事だ、と早くも決着して臟腑を見せずに、奇麗に快く用立てて歸しやりつ、さて其がためにもあらざるべけれど、何と無く心に怡悅を覺えて、今は氣も冴えぐと飲み居れるなり。

『もう出て來さうなものがナ、まだかナ、畜生！』

ふたゝび獨りごちて酒盞を取りぬ。

『まだ出て來ないかナ、畜生！』

何を待てるにか三度獨語ちしが、答ふるものは有るべくも無く、室の一隅の小机の上の懷中時計の音のみの有るか無きかに響けり。

相手無き淋しさに堪へかねてか、

『畜生ッ、出て來やがらなくつても仕方が無いかな。ハ、ハ、怒るほど乃公も野暮ぢやあいけねえ。それはさうと水野はもう大分行つたらう。愍然に、堅い正直な男だから、人一倍何彼につけて物思を仕て

居<sup>ゐ</sup>る！。

「へ粹すな浮世うきよを戀故こひゆゑに、野暮やぼに暮くらすも心こころがら。あゝ端唄はうたの文句もんくぢやあ無ないが迷まよつちやあ野暮やぼになる！。フン、ナンダ此方こつちやあ戀故こひゆゑぢやあ無なえで、慾故よくゆゑに野暮やぼになり切きつて居ゐやがる！。ア、もうそろ／＼出でて來きて呉くれても好よさゝうなものだが、チヨツ忌々いまくしい、まれつたいナア。ア、豪氣がうきに酔よつて來きた、好いい心持こころもちだ！。何だかもう出でて來きさうな心持こころもちがする！。エ、ト、

へ起きて見<sup>み</sup>つ、寝<sup>ね</sup>て見<sup>み</sup>つ待<sup>ま</sup>てど、たより無<sup>な</sup>く、チン／＼チンチン、蚊<sup>か</sup>  
屋<sup>や</sup>の廣<sup>ひろ</sup>さにたゞ獨<sup>ひと</sup>り、ツンテン、蚊<sup>か</sup>を焼<sup>や</sup>く火<sup>ひ</sup>より胸<sup>むね</sup>の火<sup>ひ</sup>の、燃<sup>も</sup>ゆるお  
もひを察<sup>さ</sup>しやんせカナ。ハ、、。

聲は美しからず錆びたれど、聞き記憶なるべきには似合はず我流の節廻しにもをかききところありて、小聲に唱ひ仕舞ひつゝ、今將に一壘の酒を盡し果たさんとして、手に取り上げて自ら酌がんと、其の尻下りの小き目を一トしほ下げて、莞爾と樂しげに笑ひしが、何をか聞きつけしや俄然として、

『ヤツ、來たぞ！　來て呉れたぞ！。おいでなすったぞ！。占めた  
ナ！、サア來いだ！。』

と飛び立つたり。

投げ出されたる壇は、びん　どんぼがへり 翻筋斗して、たみ　こぼ 疊に溢れたる紅色の餘瀝は、くれなゐ　したゝり まだ早  
もみぢ き紅葉をこゝに散らしたり。

## 其二十七

がらりと樓の雨戸を繰り開くれば、白みわたれる曉の天より、蓬々然として下し来る風は、おもむろに面を撲ち胸を撲つて、昨日の夜の静穩なりし佛は猶遣れども、日の將に出でんとする方の雲の色峻しく、何と無く物凄まじき景象は見る／＼動き展びて、やがて恐ろしくも一ト暴風の、暴れ立たんとする勢は現はれたり。

昔語の海坊主の如く、ヌツと突立つたるまゝ、四邊を見廻せる島木は、刻一刻に吹募る風の、袂を揚げ裾を扇るをも知らぬやうに、身じろぎもせずして居たりしが、終には此の風の高じに高じて、老木の枝を裂き、若樹の根を抜き、沙を舞はせ石を躍らすに至るべきさまの、十分に想ひやらるゝに及びて、大浪のうねりて寄するが如くに、肥つたる顔中を笑に動かして、

『ウフ、ウフ、ウアツハツハ、ハ、ハ。とう／＼來やがつたナ！ ヤイ

風の神！。男振が好いぞ！ まつかり遣れ。雨の随いて來やがらねえのは忌々しいが、仕方が無え、汝だけでウンと働け。男振が好いぞ、くー！。』

と、打戯れて引返せば、洋燈は既に風に消されて、室に満てる曙色はそのひかりかはる。其光に代り居たり。

島木が待ちに待つたるは、我を訪ひ來ん婦にもあらねば、他所より入るべき金にもあらず、唯此の野を拂ひ禾を偃すの風なりけり。數日前より、乾坤一擲と試みたる丁半の時、利あらずして思ふ目は出でず、まきりに敵に切り捲られて、踏み耐へ踏み耐へては戦ふものゝ、既に味方は崩れ立つて討死手負の數を知らず、大勢のほゞ定まりたるに、無念の牙を咬み血眼を瞋らして、大童になつて奮闘すれども、疲れきつたる身の思ふに任せねば、天運いよく我に恵まずば屍を原頭に曝すも今の間ならんと、覺悟の臍を固めつゝも、あはれ一ト暴風もあれかしと祈り居けるに、昨日の芝浦の會の席上より、羽勝の豫言といひ星の光と云ひ、頼もしく思はるゝ節の少からぬを知つて、危ぶみなが



らも待ち居たりし其風の、果して獵々颯々として吹き出したるに、今  
 見よ敗を轉じて勝となさんは瞬く間なり、盛り返して鏖殺にして呉れ  
 んと、駒の頭を立直して鞍蓋に突立上つたる將軍の意氣既に疾く敵を  
 呑んで槩を横へて眼も遙かに睥睨するが如く、勃勃たる英氣と限り無  
 き活力との、溢る、ばかり身に湧くを覺えて、流石の島木も押包み兼  
 ねつ、數聲の笑を漏らましなりけり。

死生存亡此の一擧と、鎬を削つて争ふべき戦闘は、今より二三時間の  
 後に逼り居れり。島木は重げなる身を無造作に動かして、自ら押入よ  
 り夜具取り出しつ、ごろりと其れにくるまりて、横になるが早きか頓  
 て睡りぬ。島木は自ら教へ自ら養ひて、教へ得養ひ得たるところある  
 男なりけり。

風は次第に烈しくなりぬ。鼾は漸く盛になりぬ。風の息む時、鼾の聲  
 あり、鼾の無き時、風の音あり。開き放されたる押入、投出されたる  
 酒瓶、消えたる洋燈、空虚の罐、歪に展べられたる蒲團、明けかけた  
 る雨戸、雷の如き鼾聲、波濤と轟く風の音、埒無しとも狼藉とも亂暴

とも、  
云<sup>い</sup>うべき言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>は無<sup>な</sup>き一<sup>いっ</sup>室<sup>しつ</sup>の状<sup>さま</sup>なり。

其二十八

『甚く寝込んで居たぢあ無いか。』

と、其頭に黄金細工の施しある美しき琥珀のパイプを口より放しさまに云ひたるは、梅幸の伊東と渾名呼ばるゝも無理ならず見ゆる其人を其儘の面立の、三十三四の色白き男にて、昨夜を何處にてか過しての今朝、何か用事ありて此家にたち戻りしが、今や既に朝食を済ませて率これよりと、戦鬪の場へ赴かんとする前の僅少の暇を、煙草休みに島木の室に来て、昨日今日こそ敵味方と立別れてこそあれ同じ修羅の巷の友の相語らへるなり。

『ア、ちよいと寝やうと思つたが、ついぐつすり寝て仕舞つた。』

『宵にやあ汝寝られなかつたず。』  
微に冷笑ふ様子の唇の端に見ゆるを、見て取つたる島木は一寸も退けては居ず。

『馬鹿あ云へ。汝のやうな繊細い野郎ぢやあるめえし、そんな卑小な根性は持たねえ萬五郎さまだ。お作に聞いて見りやあ解る事だ。』

『ハ、ハ、豪氣に今朝は氣が強いナ。背後から風が推してるからナア。』

『フン、嫌味を言ひやがる！。よゑにしろ、男が下がるぜ、下らねえ。』

どつと吹く風の音、ひゅーと鳴る物の叫聲、二人が居れる此樓も、ゆらりと今は一ト揺ぎして、一切の物皆震ひ動けば、ものこそ言はね伊東が眉はぴりりと縮みて、心の安からぬを現はしたり。

『何様した？ 梅幸！。氣が揉めるか？。』

前の返報と島木が調戲へば、此も男兒なり、癩癩らしく煙を吐きて、

『高が此様な無雨之風！。何が怖い。』

と、只一言に云ひ消しつ、強て笑つて、

『あかし中々吹きやがるナ。汝こそ内々嬉しからう！。曲り屋さんが立直つて來さうだぜ。』

と、云ひ足したり。

『左様さ、いつまで曲りつゞけで堪るもんか。汝ばかりに當つて居

られる世界ぢやあ無え。たまにやあ此様な風も吹いて呉れなくつちやあ!。』

『惘然に、空を見ちやあ百姓なんぞが何程泣いてるか知れや仕ない!。汝はもつと吹け位に思つて居るだらうが。』

『當然よ。吹いて吹いて吹き抜けと思つて居るんだ!。農夫が泣いたつて笑つたつて構ふもんか!。早稲も晩稲も吹き飛んで仕舞へと思つて居るんだ。』

『いゝ蟲だナア!。酷い野郎だぞ!。他に百兩の損をさせても、自己がいちりやうまう一兩儲けりやあ好いといふ料簡方だ。』

『ナンダ、悪く素人くせえ事を吐かしやがる!。今の世界で金を儲けて大顔を仕て居る奴に、唯の一人でも其の料簡で無え奴が有るものかい!。大な門構を仕て居る奴あ、悉皆いゝ蟲に羽が生へたのぢやあ無えか!。』

『ハ、、、違無え!。言つて見りやあまあ其様なもんだ。併し汝は平常から、觀音なんぞを信心して居るが彼やあ何だ!。矢張り觀音様を

取<sup>と</sup>捉<sup>と</sup>め<sup>つか</sup>へても、其<sup>そ</sup>様<sup>ん</sup>なあこぎな料<sup>れう</sup>簡<sup>けん</sup>でもつて、金<sup>かね</sup>持<sup>もち</sup>になるやうと祈<sup>いの</sup>つて居<sup>ゐ</sup>るのか?。』

『ム、他<sup>ほか</sup>に祈<sup>いの</sup>らうことは無<sup>な</sup>えぢやあ無<sup>な</sup>えか!。』

『ぢやあ惡<sup>わる</sup>い暴<sup>あ</sup>風<sup>れ</sup>も祈<sup>いの</sup>りか無<sup>な</sup>えが、そんな我<sup>が</sup>欲<sup>よく</sup>の願<sup>ねがひ</sup>を掛<sup>か</sup>けたつて、觀<sup>くわん</sup>音<sup>のん</sup>は正<sup>しょう</sup>路<sup>ろ</sup>の佛<sup>ほとけ</sup>ださうだぜ。』

『ナニ乃<sup>お</sup>公<sup>ら</sup>の觀<sup>くわん</sup>音<sup>のん</sup>は乃<sup>お</sup>公<sup>ら</sup>の觀<sup>くわん</sup>音<sup>のん</sup>だ!。汝<sup>おめへ</sup>の觀<sup>くわん</sup>音<sup>のん</sup>たあ異<sup>ちが</sup>つたつて管<sup>かま</sup>はねえ。乃<sup>お</sup>公<sup>ら</sup>あ乃<sup>お</sup>公<sup>ら</sup>で濟<sup>す</sup>んでるんだから、これで可<sup>い</sup>いんだ。』

『何<sup>なん</sup>だか道<sup>す</sup>理<sup>じ</sup>が通<sup>とほ</sup>らねえやうだが、アツ、また吹<sup>ふ</sup>きやがる、甚<sup>ひじ</sup>くなつて來<sup>き</sup>たぞ。オ、塀<sup>へい</sup>が飛<sup>と</sup>んだぞ、棟<sup>むな</sup>瓦<sup>がはら</sup>が落<sup>お</sup>ちたぞ!。』

『どうだ情<sup>なさけ</sup>無<sup>けな</sup>いか、心<sup>しん</sup>配<sup>ぱい</sup>か!。』

『馬<sup>ば</sup>鹿<sup>か</sup>あ云<sup>い</sup>ふな、篋<sup>べら</sup>棒<sup>ぼう</sup>ナ!。天<sup>うん</sup>運<sup>ん</sup>は何<sup>ど</sup>様<sup>う</sup>循<sup>ま</sup>環<sup>は</sup>つたつて手<sup>う</sup>腕<sup>で</sup>は手<sup>う</sup>腕<sup>で</sup>だ!。逆<sup>むかひ</sup>風<sup>かぜ</sup>を乗<sup>の</sup>つ切<sup>き</sup>つて腕<sup>うで</sup>前<sup>まへ</sup>を見<sup>み</sup>せてやらあ。此<sup>こ</sup>方<sup>ち</sup>あ昨<sup>ゆ</sup>夜<sup>ふべ</sup>辨<sup>べん</sup>天<sup>てん</sup>様<sup>さま</sup>に、ま  
た、かお寶<sup>さい</sup>錢<sup>せん</sup>を献<sup>あ</sup>げて來<sup>き</sup>たんだ、はゞかりながら辨<sup>べん</sup>天<sup>てん</sup>様<sup>さま</sup>が付<sup>つ</sup>て居<sup>ゐ</sup>るんだ!。』

笑<sup>わら</sup>ひながら云<sup>い</sup>ひたる末<sup>すゑ</sup>の言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>は、暗<sup>あん</sup>に自<sup>おの</sup>己<sup>れ</sup>が昨<sup>きの</sup>夜<sup>ふ</sup>の豪<sup>がう</sup>遊<sup>いう</sup>を誇<sup>ほこ</sup>つて、遊<sup>たは</sup>

謔むねの中うちにも威ゐを張りて、聊いささか自ら強みつうせるなり。

『何なんだ、薄うすら腥なまぐさい辨べん天てんが何なにが有ありがたい?!。此こ方ちあ清しやう淨じやうな仙せん人にんにお初はつ穂ほ

が献あげてあるんだ!。今日けふは此この乃お公こうが大おほ當あたりだ!。』

これも私ひそに自みづから快こゝろよしとするとところあるなり。

『ナニ此この鼻はなが矢やつ張ばり當あたる!。』

『ナニ此この乃お公こう様さまが屹きつ度と當あたる!。』

『おれが、』

『おれが、』

『ハ、ハ、ハ、』

『ハ、ハ、ハ、』

『なにも此こ處ゝで喧けん嘩くわあ爲する事ことも無なえ。』

『二人ふたりとも當あたらう!。』

『夕ゆふ方がたまでだ!。』

風かぜはいよく狂くるへる中なかを、二人ふたりはおのれおのれが本ほん陣じんへと、勇い威きを含ふくんで立たち出いでたり。風かぜも慾よくに使つかはるゝ人ひとの世よの中なかや。

## 其二十九

其の日晝を過ぎて風いよく烈しく、天は塵埃に濁れるが如くに一面の黄雲に包まれて、常ならぬ暖氣の氣味惡ければ、人皆安き心も無くて、若し此上に雨も混らばと氣遣ふ折しも、頭上の雲やうやく墨色さして、蔽ひかぶさる様に昏くなれば、如何になり行く魔日ぞと誰しも恐れあひぬ。事無くて家にある爺媼さへ是の如くなれば、まして、遣らん買はんの呼び聲は戦場の矢叫びと入り亂れて、打振る兩手は浪寄る尾花と空に揉まるゝ其場の混亂は、猜するにも猶餘あり。

伊東はいづれへ逸れしにや歸り來らねど、雨下りんとして下りず風衰へぬ夕近く、島木は悠然として歸り來りぬ。島木につゞきて上り來れる婢は、例となり居れると見えて茶を入れて薦めつ。

『伊東さんは？、御存知無くつて？。』

『知らねえよ、一所ぢやあ無えから。まかしおほかた彼女のところだ』



らう。』

『ほんとに凝<sup>こ</sup>つて行<sup>い</sup>らつしやるのネ！。幸<sup>い</sup>運<sup>い</sup>につけても、悪<sup>わる</sup>運<sup>い</sup>に付<sup>つ</sup>けてもネエ！。』

『ウン。ハ、今日は幸<sup>い</sup>運<sup>い</sup>につけてもぢやあ無<sup>な</sup>さうだ！。でも彼<sup>あ</sup>女<sup>れ</sup>の方<sup>はう</sup>でも招<sup>よ</sup>ぶやうだから堪<sup>たま</sup>らねえや。汝<sup>おめへ</sup>も女<sup>をんな</sup>の端<sup>はし</sup>くれだ、どうだ、些<sup>ちつと</sup>あ妬<sup>や</sup>けるかい？。』

『何<sup>なん</sup>ですつて、端<sup>はし</sup>くれですつて？。あんまり酷<sup>ひど</sup>い事<sup>こと</sup>ネ。ようござんすよ、たんと悪<sup>わる</sup>口<sup>くち</sup>を仰<sup>おつしや</sup>いまし、告<sup>い</sup>訴<sup>つ</sup>て遣<sup>や</sup>るところを知<sup>し</sup>つてますから。ア、そりやあ左<sup>そう</sup>様<sup>や</sup>と貴<sup>あなた</sup>君<sup>くん</sup>は今日<sup>けふ</sup>は大<sup>おほ</sup>當<sup>あた</sup>りでしやう。あなたも男<sup>をとこ</sup>兒<sup>こ</sup>の端<sup>はし</sup>くれだ、ちつと些<sup>ちまへ</sup>前<sup>まへ</sup>を見<sup>み</sup>せて御<sup>お</sup>奢<sup>おご</sup>んなさいな。風<sup>かぜ</sup>の音<sup>おと</sup>を聞<sup>き</sup>いちやあ主婦<sup>おかみ</sup>さんと一<sup>いち</sup>にちい日<sup>いち</sup>云<sup>い</sup>ひ暮<sup>く</sup>らして居<sup>ゐ</sup>ましたよ。』

『左<sup>さう</sup>様<sup>や</sup>かい、其<sup>その</sup>奴<sup>やつ</sup>あ頼<sup>たの</sup>もしかつた！。奢<sup>おご</sup>つて遣<sup>や</sup>らう。』

『オヤ、其<sup>それ</sup>あ早<sup>さつ</sup>速<sup>そく</sup>に有<sup>あ</sup>り難<sup>がた</sup>う！。さうして何<sup>なに</sup>を奢<sup>おご</sup>つて下<sup>くだ</sup>さる？。』

『生<sup>あ</sup>憎<sup>にく</sup>劇<sup>げ</sup>場<sup>ば</sup>は好<sup>い</sup>いところが開<sup>あ</sup>いて居<sup>ゐ</sup>ねえナ。』

『さうネエ。』

『秋草も今日の此の風ぢやあもう。』

『さうネエ。』

『矢張り下卑でも甘い物といふところで堪忍して貰はう。』

『さうねエ。それぢやあ、あの、何を?。』

『今川焼きの皮の厚い冷たいのでも。ハ、ハ、ハ。』

『エ、悔しいヨ、おぼえて居らつしやい。もう貴君の云ふ事は當に仕やしない。』

『オイ、左様ぶり、しちやあ困る。頼む事があるんだ、大まじめだ。』

『ヘイ、澤山お使ひなさいまし!。何の御用?。』

『悪く角ばるナ、怒つちやあいけねえ。好いかエ、客が一人来る筈に招んであるんだ。汝の見はからひで、例の家へでも電話をかけて、手一杯に御馳走を仕て貰ひてえのだ。他家へ行くなあ不妙いのだから。ヨ、頼むよ。客が堅人で、話が堅いと来て居るんだから。』

『ハア、左様。ようござんす。御酒は?。麦酒?。葡萄酒?。さうして

直に御入來ですか。』

『ウン、もうそろ／＼来る時分だから急いでネ。』

『あの水野さんとか仰ある方?。』

『ソラ惚れてやがるもんだから兎角名をいふ!。お生憎様!。』

『水野ぢやあ無え、羽勝といふんだ。まかし色の白い、眼の優しい、滅

法に好い男だから、又汝は直と惚れるだらう。』

『他聞の悪い!。よししても下さいよ。妾や男の美しいのに惚れるやうな耄

碌ぢやあ有りませんよ。ホ、ホ、ホ。』

『オヤ異なたんかを切りやあがる。それぢやあ何様な男に惚れる

んだ?。』

『知れた事でさアネ、明治ッ子ですよ。成功者さんばつかりに惚れるん

ですわネ。』

『畜生ッ、甚く當世なことを吐しやあがる。此奴は今川焼の髻を打たれ

た。ハ、ハ、ハ。』

『ホ、ホ、ホ。』

お作さくの笑わらつて樓にかいを下おりきつたる時とき、がらりと格子かうしの明あく音おとして、頼たのむ  
 といふ聲こゑの此家こゝの客きやくには似合にあはしからず堅かたく、洋服姿やうふくすがたのきりゝとした  
 る、日ひに焦やけきつたる顔かほの恐おそろしく赭あかく、潮風しほかぜに晒さらされてか眼めさへ  
 赤色あかいろを帯おびたる鐵てつづくりの如ごとき男をとこは入いり來きたりぬ。  
 お作さくは受うけ取とりたる名刺めいしの表おもてに羽勝はがちせんさう千造せんさうといふ四文字よんもじの記しるされたるを  
 見みぬ。

## 其三十

酒は舊友と飲むより甘きは無く、談は半醉の時より熱するは無し、雞黍の設け粗薄なりとも、膠漆の情の殷厚ならんには、杯を手にして相見て笑ふ一眇の中にも限無き味は有るべきを、ましてこれは范張陳雷の語らひのみならず、野心に燃ゆる若き男の、志は各々異なれども事を一にして功を擧げんとする相談に、意氣は齊しく昂りて興は湧くが如し。

亭主八杯の諺に洩れず、羽勝より先ず島木は酔ひて、其の肥つたる身體を柱に靠せながら、腫れたるが如き顔に笑を浮めつゝ、  
「兎も角も其ぢやあ一萬二千圓だけは君の權利の内に置くと決めた。船も借りるなら借りるが好い、買ふならばまた買ふが好い。一切君の考次第に任せる。一艘仕立てるとも二艘三艘仕立てるとも、それも君次第で論は無い。乃公あ素人だ、君は黒人だ。乃公あ何も彼も分らな

いんだ。おらあたゝ焰硝と彈丸とを出すんだ。狙つて撃つて鳥を獲る  
 なあ君の手腕一ぱいに仕て貰うんだ。後から臂に觸るやうな野暮は仕  
 ねえ。乃公あ資金を出す、君は手腕を貸す。利益は笑つて山分に仕や  
 うが、損は泣言を云ひつこ無しで、氣持好く骰子を轉がして見やうと  
 云うんだ。あかし僕も商人だ、算盤だけは合點の行く男だから、大づ  
 もりのところだけは都度々々聞きたい。其他にやあ何も注文は無いん  
 だ。全く君の料簡次第だ。なあに一と出やうと六と出やうと口惜かあ  
 無え、事業の巧く行くのと行かないのは、半分は手腕で半分は耳朶  
 だ！。遣付けるだけ遣付けて貰やあ、何様なつたつて驚かねえんだか  
 ら、斟酌無く存分に遣つて呉れたまへ。今も話した通り此の風が出無  
 かつたら、擴げられるだけ戦線を擴げて置いた此の萬五郎は、今ごろ  
 は何處へケシ飛んでるか分からないんだが、其の危ない瀬を渡つて揉  
 み合つたゞけに、とう／＼切り勝つて一ト伸伸して、如是した話も出  
 来るんだもの！。お互に度胸と腕とに掛けて敗を取ら無きやあ、少し  
 運さへ添やあ造作は無え。三井や岩崎を尻目に見て、笑つて一杯飲ま

無くつちやあ！。米や株ばかり打いて居るのも智慧が足り無えから、  
 乃公あ大蛸になつて八方へ手を出す！。五分や七分の口錢にヘイコラ  
 ヘイコラと頭を下げてこしらへた身上ぢやあ無し、根が泡沫錢だも  
 の、消えたつて未練は無えが、何か知ら那方かの手で攫むつもりだ。  
 おもひ出しやあソレ四五年前の事だつけ、七人揃つた其時に、おれが例  
 の法螺話の末、お互に那の路にせよ世を渡るにやあ、跣足ぢやあ歩け  
 ねえ、草鞋が要る。おれが一番巧く當りやあ、一同に一萬兩づゝの草  
 鞋を穿かせて、世の石高路を歩かせて遣ると云つたら、馬鹿に誰も彼  
 も怒りやあがつて、あの溫和しい水野までが、僕は踏み抜きを仕たつ  
 て其様な草鞋は貰はないと云ふし、日方はおらが背中を擲りやがるし、  
 榎井や山瀬や名倉までが、失敬だくと腹を立つたが、其時君はたつ  
 た一人、なあに島木が親切で呉れやうといふなら貰ふが好いぢや無い  
 か、氣が狭い！、成程世を渡るにやあ草鞋が要る、と沈着いて云つて  
 呉れた時あ嬉しかったよ。それでと云ふ譯ぢやあ更に無えが、云はゞ  
 其時云つた其草鞋を、今日から君に穿いて貰つて、君だけに歩いて貰

ふやうになつたなあ、嬉しい！。サア羽勝君！、これからだ。ウンと大腿に踏張つてくれ！。君の腿骨の達者なところと、男兒振りの好いところを見せて呉れたまへ。ナア羽勝君！。』

と、これは飽まで酔に乗じて碎けて云へど、羽勝は酔うて酔はぬ姿勢さへ正しく、堅固の言葉つき力強く、

『ム。悉皆了解した。確に承諾した。面白い。行れるだけは屹と行る羽勝だ！。運が逃げれば運を追尾ける！。たとひ草鞋は穿き切つても、歩きだしたら必ず歩く。中途では休まぬ、運は掴む！。其代り悉皆屹度任せて呉れ。』

と、云ひも終らぬに島木は烈しく、

『オ、任せないで何とするもんだ。屹度頼んだぞ！。』

と、口を衝いて答へたり。

『ムツ、頼まれたぞ。』

『オ、頼んだぞ。』

『さあ始まつたぞ！。』



『双六が』

『ハ、ハ、ハ。』

『ハ、ハ、ハ。』

玻璃<sup>こ</sup>菱<sup>つ</sup>は玻璃<sup>こ</sup>菱<sup>つ</sup>とカチリと觸<sup>あた</sup>つて、  
酒<sup>さけ</sup>は二人<sup>ふたり</sup>に一時<sup>いちじ</sup>に仰<sup>あふ</sup>がれたり。

## 其三十一

授業も爲し難く見えたるほどの暴風の一日の生暖きに、平生の如く教鞭を執りて太郎次郎を相手に仕たりし水野は、私の強きところあれば職務を怠りこそは爲ざりつれ、前日よりの心身の疲れに、五體の綿の如くなれるを我と覚えつゝ、やうやく午後何時の今、始めて我が身の我が物となりたる心地する氣の緩みに、歩調さへ遅々として、脱力して歸り來れり。

手を掛けたるにはあらねど小さき樹草など好きほどに生えたればおのづからの庭となりたる空地を前に、南を受けたる長き一棟の、其の奥の一間は我が起臥のところで定まりたるなり。水野は常の如く庭先を家に沿ひて廻りて、椽より直に座敷に上らんとするに、今日は烈しき風を厭ひて、雨戸さへ幾枚か引かれ居たり。

『ア、風が甚いので雨戸を引いて置きました。薄暗くつてお嫌なら明け

てあげませう。方向が好いので此家は其程ぢやあ有りませんが、何にしろ甚い嫌な風です。』

我が聲音を聞つけての吉右衛門が言葉に、

『なあに今日は別に細字書を読まうとも思はないから、矢張り此儘にして!。』

と云いながら水野は身を側めて、隙かして引かれたる戸の間より上り、『ほんとに氣持の悪い、頭の痛くなるやうな風で、——早く止んで呉れなくちやあ仕方が無い。』

と座敷に入りつゝ言葉足せば、

『左様でございます。雨が隨いて来ないで先々ですが、土地によつちやあ餘程の損害です。この嫌に暖い事は何様でしやう。病人なんぞにやあ感さますネ。オ、病人と云やあ今朝お頼みの婢は、私の本家の方の小作人の娘で、がせいに能く働くのがありましたから、能く云ひつけて其を遣つて置きました。看護婦さんも來たさうです。』

と、間の襖は開き居たる中の間にありて敷居越しの挨拶なり。水野は

床近く置きたる机の前に坐りて、始めて昨日以來の疲勞を息めつゝ、  
 『ア、今一寸歸路に立寄つて來ました。いろ／＼お世話を有り難かつ  
 た。先これで一切思ふやうになつた。』

と、重荷を卸したるが如き顔色すれば、例の眼鏡の中より一寸見て、  
 『昨夜は碌に御睡眠はなさりますまいのに、今日は又平生の通り御勤務  
 では、大抵な御疲勞ではありますまい。今夜はまあ早く御睡眠なさい  
 まし。』

と、云ひさして茶の間の方を顧みて聲大く、

『お濱や。また其様なに書にばかり取付いて居ちやあいけない。先生が  
 お歸りなすつたぢやあ無いか、御茶を持つて來ないか。』

と、悠然としたる調子に呼ばゝつたるは、言葉つきなども異しからぬ  
 ほど江戸の水も飲んだる果の老夫なれど、流石は根が此の邊の田舎風  
 なり。

小さき刳盆に大なる筒茶碗載せて、嫣然と笑みて持出でたるお濱は、  
 水野が膝近くそれを置いて、おのれは祖父の傍に甘えるやうに坐り。

『昨夜は怖かつたでしょうねえ、眞闇で！。あれから妾床へ入つたら、先生の行しつた方の、遠くの遠くから、狗の鳴く聲が聞えて來て、淋しかつたわ！。』

と云ひ出せば、

『ハ、ハ、何んだ下らない、叩頭も仕ないで！。突然と其様な事を云ひ出すよ。狗が鳴いたつて何淋しい奴があるもんか。』  
と笑を帯びて吉右衛門は叱るを、眞赤なる番茶の味も無く香も無けれど、熱きみに人の情は有るを啜れる水野は、

『ハ、ハ、お濱ちゃんはいつでも面白い事を云ふ！。そして昨夜は一生懸命に書を読んで居たぢやあ無いか、あれは一體何の本だえ。』

と問ふに、お濱は忽ち不足らしき恨みを其色に現はしたり。

『だつて先の中は毎晩々々いろんな面白いお譚を仕て聞かして下すつたのに、此節は毫も御談話なんぞして下さらないんだもの。妾はほんとに詰まらなくつて、仕方がないから本家から書を持つて來て讀んで居るのよ。』

『でも書ほんがおもしろけりやあ可いぢやあ無ないか、私わたしの不器用ぶきような談話はなしなんぞより。』

頭髮かみもゆらくと頭かうべを振ふつて、

『イ、エ、矢張り御談話おはなしの方が妾好きわたしずなのよ。あの本ほんは面白い事ことは面白おもしろいけれど、むづかしくつていけないところが有あるんですもの！。今夜こんやは何處どこへも行いかないで御話おはなしを仕して。ネ、御願おねがひですから泣なくやうなのを！。妾泣わたしなくやうな御話おはなしが大好きだいすなのよ。』

と遠慮えんりよも無く強請ねだれば吉右衛門きちゑもんは苦にがりて、

『また其様そのんなに直汝ちきおまへは甘あまつたれるよ！。そんな氣樂きらくな事ことどころぢやあ無なくつてゐらつしやるのだ。』

と、少し叱しかり氣味きみに遮さへぎり止とどむるに、

『ア、妾知わたししつてますよ、五十子いそこさんが悪いわるから？！。妾今日わたしけふ見て來きてよ五十子いそこさんそこを。ほんとに惘然わうぜんに病重わるいのねえ。』

と、然さも心配氣しんぱいけに艶つややかなる面おもての美うつくしき眉まゆを打顰うちしかめたる、云いふに云いはれぬ可愛かはいさありて、此室こばかりには騒さわがしき風かぜも吹ふかぬが如ごとし。

其三十二

『人にも云はないで何時の間に岩崎さんのところへ行つて見たのだ。彼方ぢやあ御煩く御思ひだらうに!。』

『いゝえ祖父さん、一寸行つたばかりで、上りも何も仕やあ仕ないのよ!。たゞそ一つと外から見ただけなの。だけれども肥つた看護婦さんも見だし、丁度松ちゃんにも會つて話を仕て來たのよ。松ちゃんは曩日吾家で一所に遊んだ時なんかとは違つて、泣きさうな顔を仕て居るんだもの、妾ほんとに惘然になつちまつたの!。だもんだから彼の椎の樹の傍で、二人でつい泣いて話を仕て居たら、彼家のお澤婆つたら眞箇に憎らしい!、お濱子!、汝まで心配して居るだけえ?、だけれど泣いたつて無益なこんだ!。心配で癒る病氣あ無えだから、つて菜圃の對から大な聲をして怒鳴るんだもの!。妾ほんとに口惜しくつて口惜しくつて、風の中を駈け出して歸つて來て一人で怒つて泣い

たわ。ほんとに彼様な意地悪な婆つたら有りや仕ない!。今度また彼様な事を云つたら引爬いて遣らなくつちやあ。』

『ハ、ハ、また其様なお轉婆な事をいふよ!。何様して、彼の婆さんにやあ汝なんぞの爪も立つもんぢやあ無い。婆さんを引爬きやあ汝の爪は悉皆脱れたつて、彼方にやあ蚯蚓も出来や仕ない。そんな事はまあ何様でも可いが、もうそろそろと日が暮れかゝる、お鍋が何かことかせて居る、汝も彼方へ行つて夕方の事を、些は傍から手傳つて遣りナ。』

『先生が今夜面白い御話を仕て下さるなら。』

『祖父さんが命令るのに先生のところへ掛つて行くとは、何だか理由のわからない理屈合だナ。サアマア何でも可いから御働き、お働き!』

『ハイ。ぢやあ先生屹度後刻に先日のお話の續きをネ。』

頭を曲げて水野の顔を覗き込むやうにして自己が勝手を云ひつつお濱は纔に彼方に去りたり。

祖父は孫娘の背姿を見おくりながら、



『身長ばかり彼様なに大きくなつて、いつまで彼様な調子で居るのでしやう！。もう少しは女らしくなりさうなものですのに、あゝやんちやんでは仕方が有りません。いくらお澤婆さんが憎いと云つたつて、引爬いて遣らうなんて、ハ、ハ、ハ、ハ。』

と獨語の如く又辯護の如く云へば、其の語に隨いて、

『あかしお澤といふ婆さんは眞箇に甚い！。何様した人だか知らないが、全で普通ぢやあ無い、先鬼婆だから、誰だつて何様か仕て遣りたい位には思はうぢやあ無いか。』

と、水野は我が思へるところを打ち出したり。

『貴君も何かで御腹立でしたネ。其やあ左様でございますとも、普通ぢやあ有りません！。仰ある通り鬼になつて居るのですから！。あれでも舊は人の好い婆さんでしたが、親一人娘一人の秘蔵娘の、お里といふのに婿を取つたー其婿が悪かつたところから彼様なつたのです。』

『フーン。』

『婿は兵作といふ悪い奴で、今は東京の牛込あたりに、樂な生活を仕て

居るさうですが、出は二合半領の可成な大盡の二番生で、男振の悪く  
ない應對の上手な男です。婆さんの家は村でも指折の物持でしたが、  
其の兵作といふのが猫を被つた狼でして、何を爲る、彼を爲ると云つ  
ては金を持出し、終には家屋敷まで抵當に打込んだのです。あかし其  
が眞實に商賣事で損を仕たといふなら未だ好うございますが、實は婿  
になる前から他に情婦が有つて、其方に悉皆こかしたのです。左様し  
て置いて平井の家に塵ツ葉一つ無くなつた時分に、さあ自分が逐出さ  
れて仕舞ふ心算で、彼の婆さん親子に無理ばかり云つて、打ちます、  
蹴ます、暴れます、散々に酷い事を致しました。それが爲にお里が癆  
瘵氣質になつて、氣は異々くなるし、生きながら幽霊のやうに痩せて、  
苦しんでく居りましたが、其中を畢竟別れ話を仕て、兵作は身を退  
いて仕舞ひました。』

『や、それは恐ろしい酷い談で。』

『それこれでお里は死んで仕舞ひます。婆さんは住んで居た家も逐出て  
られて、他人の物置小屋を假りて入るやうな始末にもなりましたが、

それから彼の婆さんは鬼のやうになりました、誰彼の見さかひ無く人を疑ひ、一生懸命に持いでは一文二文を溜めて、其錢を苛い高利で貸し出しました。左様して五年六年と立つ内に段々太りまして、舊の自分の家を取り返して手に入れたのです。他手に渡つて居る中に焼けましたので、母屋や藏は残つて居ませんが、丁度今岩崎さんの借りて居る室が、兵作を婿に取つた其初に、老人は若い夫婦に香ばしく有るまいからつて、自分の隠居所にと建てた別室で、今自分の入つて居る汚い家は、平井の家の榮えて居た頃の雑物小屋です。左様いふ婆さんですから、今ぢやあたゝ、金より外に味方は無いと思つて、まるで鬼のやうになり切つて居て、村の者にも憎がられりやあ、自分も村の者を對敵にして居るので云つて見りやあ愍然な筋もあるのです。』

『大に、成程！。』

水野は此談を聞きて黯然として、情の傷ける人の末路の恐ろしさを思ひつゝ、歎ずるところへ、忙だしく人の駈け來る聲音して、椽前より、  
『水野さん！ 水野さん！。』

と呼ぶは他人ならず松之助なり。

其おろ／＼したる悲しき聲音を聞くより、何とは無しに胸潰れて、

『ど、何様かしたか？、悪いのかえ？、姉さんが。』

と、サツと障子を開けば、暖き不快の風はムツと吹きて、黄昏の空の光線の弱きに、恐怖を懷ける松之助の顔は影さへ淋しく薄々と白みて見えたり。

『大變に悪い！。いけないかも知れ……。ア、僕あ何様したら宣からう！。』

既泣き聲の、あどろもどろの其言葉を聞くや聞かずや、水野は忽ち全身に氷の水を浴びし心地して、アツとばかりに仆れんとしけるが、辛くも堪へて自ら保ち、次いで烈しき戰慄の止めても止まらず起り来るを強ひて制しつ、

『ナニ、そんな事が……。大丈夫だ！。』

と、我が耳にも知るゝ顫聲に云いさま、我知らず我が座より飛び立つて、踵も地に着かぬ跣足の危く、轉ぶが如くに走去つたり。

## 其三十三

槇籬まきがき隣となる木槇籬むくげがき、杉籬すぎがきつゞく數疊やぶだたみの、村徑むらみちの黄昏たそがれを息急いきせはしく走る水野みづのは、後あとより追おひ縋すがれる松まつ之助のすけの手てを引ひ立て、夢ゆめに高たかきところより落おつるが如ごとき膽縮きもすくむ思おもひに、何なんの分ぶん別べつも無なく駈かけに駈かけたり。

今朝けさよりの風かぜに葉はは裂さけ茎くきは折おれ伏ふして、滿目まんもくの光景ありさま忌まいはしく狼藉らうぜきたる芋圃いもぼたの間あひだを、突つと行ゆき抜ぬけて、例れいの婆ばばが家いえの横よこを奥おくへと通とほらんとすれば、折おりしも例れいのお澤婆さはばは、風かぜに挽もがれたる柿かきの實みの、或あるひは猶なほ青あおく、或あるひは半黄なかばきばみ赤あからめるを、あたゝかに取とり入いれたる重おもげなる箕みに、枯かれ柴しばの如ごとく骨立ほねだつたる兩腕りやううでを長ながく露あらはして掛かけつ、一ひト歩あしひ一あしト歩あしに強欲がうよくの力ちからを入れて辛からくも吾家わがやに運はこばんと、未まだ止やまぬ風かぜに霜しもの薄すくと騒立さわだつ白しろ髪がを吹ふきたせながら此方こなたへ來きかゝりしが、水野みづのが慌あわて狼狽うろうたへて入いり來きたれる態さまを、圓つぶらなる眼めにぎろりと見みて、さも心地こゝちよげに冷笑あざわらひ、『とうく甘雨にじりやうになつて來きたゞかね?。』

と、恰あたかも病やめる人ひとの疾とく死しなんことを待まち設まうけ居をりし其その甲か斐ひありて、  
 今いまや我わが望のぞめる時とき機きの至いたらんとするに、自みづから先まづ聲こゑを揚あげて祝しゆくし悦よろこべ  
 るが如ごとく云いひぬ。

おのが手てに些すこ少しばかりの金かね子この落おちんことを希ねがふ意こゝろより、他ひとの生いのち命めい掛か  
 けて思おもへる人ひとをも死しねがしに云いひなしたる此この老は婆ばの面つらの憎にくさ！。人ひと  
 にはあらずと豫かねてより思おもひ居ゐたれど、まのあたりに骨ほねを刺さす此この酷こく毒どく  
 の語ことばを浴あびせられては、頭あたま腦まんなかの眞ま中なかより烈れつ火くわの奔はしる心こゝち地ちして、おのれ憎にく  
 き獸けだもの畜ものめ、たゞ一ひト攪つかみに引ひ攪つかんで、天てん狗ぐ裂さきに裂さきて木きの股また高たかく掛かけ  
 て呉くれんと、むら／＼と恐おそろしき忿い怒かりの衝つき上あり來きて、流さすが石こに堪こへ  
 情じやう強つよき水みづ野のも眞まつ青さになりたり。

其三十四

吉右衛門が物語によりて此の婆が身の上を聞かざりせば、或は走り  
 かゝりて一ト踢に踢倒すか、左なくば其面に唾して罵るほどの事は爲  
 たらんを、其の如是鬼々しくなれる所以を思ひ浮むると、且は如是老  
 婆を相手に取りて何となすべき、田は生れて田に死する蟲にも等しき  
 田舎婆の一言に、氣を動かして我を忘れんとしたるは愚かなりと、飽  
 まで強く見下げたるとに、おのづと心も緩み和きて、水野は満腔の燃  
 ゆる忿恚を僅に怪しき侮蔑の笑に洩らして、言葉も無く突と擦れ違つ  
 て去り行けば、婆は猶其の後姿を見送つて、

『怖い顔して怒つたつて無益な事だ。そんなに怒つて歩いて柿實を踏み  
 潰してはならねえだよ。ハ、ハ、ハ。』

と、侮り笑ひぬ。

面を對せたる時にだに既に忍びたれば、背後の笑には耳をも假さず、

柿<sup>かき</sup>の樹<sup>き</sup>幾<sup>いく</sup>本<sup>ほん</sup>の下<sup>した</sup>を潜<sup>くぐ</sup>りて、我<sup>わ</sup>が五十<sup>いそ</sup>子の病<sup>や</sup>みて臥<sup>ふ</sup>せる別<sup>はな</sup>室<sup>なれ</sup>近<sup>ちか</sup>く到<sup>いた</sup>れば、  
風<sup>かぜ</sup>の騒<sup>さわ</sup>がしきを厭<sup>いと</sup>ひたりと見<sup>み</sup>えて、はや戸<sup>と</sup>を引<sup>ひ</sup>きたるが、中<sup>なか</sup>には燈<sup>ひ</sup>の  
光<sup>ひかり</sup>弱<sup>よわ</sup>く籠<sup>こも</sup>りて、人<sup>ひと</sup>の動<sup>うご</sup>ける影<sup>かげ</sup>のちらくとしたり。

今<sup>いま</sup>までは先<sup>さき</sup>に立<sup>た</sup>ちて來<sup>き</sup>れる水<sup>みづ</sup>野<sup>の</sup>の、此<sup>こゝ</sup>處<sup>ち</sup>に至<sup>いた</sup>りて俄<sup>には</sup>に歩<sup>あゆ</sup>み鈍<sup>にぶ</sup>れば、松<sup>まつ</sup>  
之<sup>の</sup>助<sup>すけ</sup>の方<sup>かた</sup>、先<sup>さき</sup>になりて、既<sup>すで</sup>に沓<sup>くつ</sup>脱<sup>ぬぎ</sup>一<sup>ひ</sup>足<sup>あし</sup>踏<sup>ふ</sup>み入<sup>い</sup>るゝに水<sup>みづ</sup>野<sup>の</sup>は其<sup>そ</sup>の執<sup>と</sup>  
たる手<sup>て</sup>を力<sup>ちから</sup>無<sup>な</sup>く放<sup>はな</sup>して、續<sup>つづ</sup>いて入<sup>い</sup>らんとせぜ立<sup>たち</sup>迷<sup>まよ</sup>ひ居<sup>ゐ</sup>たり。

此<sup>こ</sup>の心<sup>こゝろ</sup>得<sup>え</sup>難<sup>がた</sup>き舉<sup>ふる</sup>動<sup>まひ</sup>の意<sup>い</sup>を、松<sup>まつ</sup>之<sup>の</sup>助<sup>すけ</sup>は更<sup>さら</sup>に解<sup>よ</sup>く由<sup>よし</sup>無<sup>な</sup>ければ、振<sup>ふり</sup>顧<sup>かへ</sup>りて此<sup>こ</sup>  
度<sup>たび</sup>は我<sup>わ</sup>が手<sup>て</sup>に水<sup>みづ</sup>野<sup>の</sup>の手<sup>て</sup>を執<sup>と</sup>り、疾<sup>と</sup>く此<sup>こ</sup>方<sup>なた</sup>へ上<sup>あ</sup>れよと眼<sup>め</sup>に云<sup>い</sup>はせて引<sup>ひ</sup>張<sup>つば</sup>  
つたり。

言<sup>い</sup>はず語<sup>かた</sup>らずの我<sup>わ</sup>が誠<sup>まこと</sup>の情<sup>こゝろ</sup>は、知<sup>し</sup>らず識<sup>し</sup>らずに他<sup>ひと</sup>の優<sup>やさ</sup>しき胸<sup>むね</sup>に響<sup>ひび</sup>きて  
は、可<sup>か</sup>憐<sup>はゆ</sup>き我<sup>わ</sup>が松<sup>まつ</sup>之<sup>の</sup>助<sup>すけ</sup>は我<sup>われ</sup>を兄<sup>あに</sup>などのやうに思<sup>おも</sup>ひ做<sup>な</sup>し取<sup>と</sup>り做<sup>な</sup>して、泣<sup>な</sup>  
き顔<sup>がほ</sup>に姉<sup>あね</sup>が急<sup>きふ</sup>を訴<sup>う</sup>つたに來<sup>きた</sup>りしそれ釣<sup>つ</sup>り込<sup>こ</sup>まれて、ハツと驚<sup>おどろ</sup>きし餘<sup>あま</sup>り  
に何<sup>なに</sup>といふ考<sup>かんが</sup>へも無<sup>な</sup>く、走<sup>はし</sup>り出<sup>い</sup>で、此<sup>こゝ</sup>處<sup>ち</sup>へは來<sup>きた</sup>りしものゝ、如何<sup>いか</sup>なる  
宿<sup>しゆく</sup>世<sup>せ</sup>の仇<sup>あだ</sup>のありてか、我<sup>わ</sup>が五十<sup>いそ</sup>子の我<sup>われ</sup>を厭<sup>いと</sup>ふ情<sup>こゝろ</sup>も漸<sup>やう</sup>く募<sup>つ</sup>りて、特<sup>こと</sup>に病<sup>びや</sup>  
氣<sup>うき</sup>の爲<sup>さ</sup>する癩<sup>かん</sup>の所<sup>わ</sup>爲<sup>ざ</sup>とは云<sup>い</sup>へ、此<sup>こ</sup>の頃<sup>ごろ</sup>は我<sup>わ</sup>が面<sup>おもて</sup>を見<sup>み</sup>るをさへ甚<sup>はな</sup>しく忌<sup>い</sup>



み嫌うやうになり居れるなれば、我はこそ其の人の傍に在りて兎も角  
 もなるを見果んと願へ、今その病狀の凶き盛りに我が面を見せて、そ  
 の人に快からぬ思させんことは、たとへばまた復び戀しき人の此の世  
 の顔を見るを得ざるに至らん其の悲しさは、能く忍ぶべしとするも、  
 これは忍ぶに忍びがたきところなり。特にわれは死を起し生を回すの  
 道を知れるにもあらず、また我が岩崎氏に何の因縁もあるにもあらず、  
 云はゞ赤の他人の身をもて、然ならぬだに生くる死ぬるの境に惱める  
 人の枕頭に見れて、其の人に忌はしき思をさするほかには何の能も無  
 き面を差し出さん心無さは、我爲し得べきところならんや。瘦せたる  
 其の人の手をも執り、冷えんとする其人の身をも温めて、及ばぬまで  
 も心限りの介抱を仕たき望は熾盛なれども、因縁の恨めしくも悲しく  
 も厭ひ嫌はれたる身の其も叶はず、たゞ戸の外に泣き惑ひて、あだに  
 物を思ひ心を苦しめんためばかりに此處に來りし冥利の拙さ！、我が  
 愚さ！。思へば何とせん意にて此處に走りては來りしぞや。甲斐なく  
 も甲斐無く氣を揉みて、たゞたゞ亂れて絲の如き思に、獨り泣くより

ほかには爲すべき我が事もあらざる情無さを如何にせん。

と松之助の手をそつと拂つて、面をかくしつゝ逸れたる水野は、家の背後の椎の老樹の幹に頭を埋めて、こんもりとしたる其陰には、はや夕闇の逼りて昏くなれるが中に立盡せり。

風は猶吹けどや、衰へて『四十七士の墓どころ、雪は消えても名は残る、』と、村の兒が遠方にて唱ふ金切聲の幽に聞えくるも時に取りて忌はしく、瞬に急ぐ歸り鴉の二三羽鳴きつれたるも耳立つて淋しく、其後は物音も無く日は暮れんとす。

## 其三十五

我<sup>われ</sup>は今<sup>いま</sup>何<sup>なん</sup>として來<sup>きた</sup>りけん我<sup>われ</sup>知らず、我<sup>われ</sup>は今<sup>いま</sup>何<sup>なん</sup>となさば宣<sup>よ</sup>からん我<sup>われ</sup>知ら  
 ず、我<sup>われ</sup>はたゞ此<sup>こ</sup>處<sup>こ</sup>に來<sup>きた</sup>では叶<sup>かな</sup>はざるやう思<sup>おも</sup>ひて此<sup>こ</sup>處<sup>こ</sup>に來<sup>きた</sup>り、我<sup>われ</sup>はたゞ  
 此<sup>こ</sup>處<sup>こ</sup>を去<sup>さ</sup>りがたき心<sup>こゝろ</sup>地<sup>ち</sup>するばかりに此<sup>こ</sup>處<sup>こ</sup>に在<sup>あ</sup>るなり、來<sup>きた</sup>れるが他<sup>ひと</sup>の益<sup>やく</sup>  
 にも立<sup>た</sup>たず、在<sup>あ</sup>るが思<sup>おも</sup>ひの晴<sup>は</sup>るゝ業<sup>わざ</sup>にもあらざるを、女<sup>め</sup>々しくも男<sup>をとこ</sup>兒<sup>こ</sup>  
 らしからぬ振<sup>ふる</sup>舞<sup>まひ</sup>をするかな！。愚<sup>おろ</sup>かなりとも日<sup>ひ</sup>頃<sup>ごろ</sup>の我<sup>われ</sup>は如<sup>かく</sup>是<sup>く</sup>はあらざ  
 りしものを、意<sup>い</sup>氣<sup>き</sup>地<sup>じ</sup>無<sup>な</sup>くも崩<sup>くづ</sup>折<sup>を</sup>れたる心<sup>こゝろ</sup>の何<sup>なに</sup>を待<sup>まち</sup>てるぞや！。醫<sup>い</sup>藥<sup>やく</sup>の  
 力<sup>ちから</sup>は限<sup>かぎ</sup>り、定<sup>ぢやう</sup>命<sup>めい</sup>は如<sup>い</sup>何<sup>なん</sup>とも爲<sup>な</sup>しがたければ、そ<sup>ひと</sup>の人<sup>ひと</sup>の魂<sup>たま</sup>魄<sup>なまけ</sup>の情<sup>なさけ</sup>無<sup>な</sup>  
 くも天<sup>そら</sup>に去<sup>さ</sup>つて、松<sup>まつ</sup>之<sup>の</sup>助<sup>すけ</sup>の泣<sup>なき</sup>聲<sup>こゑ</sup>のわつと起<sup>おこ</sup>らん時<sup>とき</sup>、我<sup>われ</sup>は其<sup>その</sup>の聲<sup>こゑ</sup>を聞<sup>き</sup>  
 て世<sup>よ</sup>を思<sup>おも</sup>ひ切<sup>き</sup>り、此<sup>こ</sup>の椎<sup>しひ</sup>の幹<sup>みき</sup>の岩<sup>いは</sup>のごときに、額<sup>ひたひ</sup>を打<sup>うち</sup>付<sup>つ</sup>け頭<sup>なづき</sup>顚<sup>てん</sup>を破<sup>や</sup>  
 て、よしや身<sup>み</sup>は輪<sup>りん</sup>廻<sup>ね</sup>の闇<sup>やみ</sup>に迷<sup>まよ</sup>ひ入<sup>い</sup>るとも、一<sup>おも</sup>念<sup>ひ</sup>は芳<sup>はう</sup>魂<sup>こん</sup>の行<sup>ゆく</sup>方<sup>へ</sup>を追<sup>お</sup>ひて、  
 紫<sup>し</sup>雲<sup>うん</sup>の空<sup>そら</sup>の遙<sup>はる</sup>けくもあれ、黄<sup>こ</sup>泉<sup>わうせん</sup>の涯<sup>はて</sup>の遠<sup>とほ</sup>くもあれ、つれなき風<sup>かぜ</sup>の持<sup>も</sup>  
 去<sup>さ</sup>れる花<sup>はな</sup>の香<sup>かをり</sup>に引<sup>ひ</sup>かされて、あくがれ漂<sup>さまよ</sup>泊<sup>ふ</sup>蝶<sup>てふ</sup>の如<sup>ごと</sup>くに、飽<sup>あ</sup>まで戀<sup>こひ</sup>し

き人に伴はんとて、こゝには空しく佇める歟。或は又強く忌み嫌はれ  
 たるより、堪へがたき苦悶に自ら堪へて、其人に近づきもせず過し居  
 けるが、若し不幸にして其の遠慮の俄に失すべき時にも至らば、先ず  
 枕の邊に走り寄つて、我が火と熱き萬石の涙を、せめては其の冷き骸  
 に親しく濺ぎ、情無かりし其の人の手を執り揺ぶりて、心ゆくばかり  
 號哭せんとて此處には居るにや。それにもあらねば、これにもあらず、  
 何せん心は更に無くして、我にも我の解らぬ感想に、たゞ此處を去り  
 かねて水野は猶立てり。

暮るゝに連れて風は収まり、闇は葉の密みたる椎の梢より廣がつて、  
 終に其黒き懷の中に四邊を包みぬ。

森々と靜なる此の日の宵天に星無し、星は死したるならん、地には  
 風は弱りぬ、風は今おのが墓穴を尋ねて永く休まんとせり。古りたる  
 椎の木は忽然として人の聲をなし、

『衆生被困厄、無量苦逼身、觀音妙智力、能救世間苦、』  
 と囁くが如くに誦し出せり。

椎しいのいづく那處に彼の額ひたひひろ廣く鼻細はなほそき老おいたる男をとこの潛ひそみ居をれりや、聲こゑは全まつたく其その聲こゑなりけり。

愚おろかなり！、こは我わが招よばずして我わが記憶きおくの現あらはれ來きたれるには過すぎざるも  
 のをみづのと水野ひやが冷ひややかに聞ききし時ときは、其聲そのこゑは既失はやうせて遺響ひびきも無なかりしが、  
 當時そのとき椎しいの大木おほきは忽たちまち二ふたつに裂さけて、其處そこに明あきらかなる世界せかいの朗ほがらかに  
 現あらはれたるが中うちに、年齡としは二に十じう四し五ごなる男をとこの戀こひに寔やつれたる顔かほの勇威いきほい無なく  
 光采ひかり無なく、五月雨さみだれの檐のきの雫しづくと涙なみだを放はらし落おし居をれるさまの醜みにくくも醜みにくき  
 を、右みぎの肩かたには恐おそろしき猛鷲あらわしを宿とまらしめ、後うしろには凄すさまじき大蛇だいじやを隨したがへ  
 たる氣味きみ惡あしき大男おほをとこの、神かみに似にて神かみの威あな無なく、人ひとかと思みれば人ひとらしか  
 らぬが、憐あはれむが如ごとく侮あなぐるが如ごとき眼めして見詰みつめ居あたるが分明ありくと見えぬ。

## 其三十六

落葉を誘ふ山下しの風を其儘なる猛鷲の打翫く音の中には、『神明は殪れたり、』『佛陀は死したり、』といふ響の聞え、首を擡げて蜿蜒る大蛇のざわくと木茅を倒し行く音の中には、「神明は想像のみ」、「佛陀は假説のみ、」といふ聲あり。

水野は自から思はずして自から如是想ひ、外に見聞せずして内に如是見聞させる時、靜なる五十子が家の方にて、かたりと微の物音の仕たるを聞きつけ、豁然としてわれに返れば、我が止め途無かりし涙の何時か乾き、我が疲れたる心の何時か奮ひて、倚りかかりたる椎の幹を離れ、それを背向にして挺然と獨り樹陰の間に立ちつ、魔の如くに来り魔の如くに去る蝙蝠の、ひらひらと梢の盡頭を飛かへれるを、雲透にぞつと打見やりたり。

有りや神佛の？、有るにも似たるかな！。無しや神佛の？、無きにも

似たるかな！。

有るには無きの疑あり、有りとも爲難く、無しとも爲難し。有無のいづれは今知らねども、世に無き方の眞實ならば、男兒の頭を下げて祈願を捧げんことの羞しくも口惜しく、若し世に在す事の定ならば、身をも魂魄をも犠牲にして、廣大の御慈悲を頼み奉らんと思ふ此の人間の心のみぞ偽り無き眞實なる！。二タ路かけて取舍しわづらひつゝ、利に就かんとする此の分別の醜さよ、智慧の狡猾さよ！。あゝ人間は卑劣しくも怯き心を有てるかな！。されど此の疑ひ惑ひて苦めるこそは、人間の偽り無き眞實の情狀なるべけれ。我こゝに在り、われこゝに思ふ。思はるゝものゝ有り無しは定かならず、思ふ我が在る事が眞實なるのみ。菩薩の言葉、驚の言葉、妙典の教、大蛇の教、我にいづれを取り那方を捨つる力無し、たゞ那方をも取り悩み、またいづれをも捨て悩む其事のみぞ我が眞實なる！。神明佛陀をも肯はずして、智慧の鋼鐵の杖に頼つて此の戦鬪の世に立たんとするも我が欺かぬ眞實なり。獸にもあらず鳥にもあらで、光明の國黒闇の國の境を飛

ぶ彼の魔魅まもの如ごとき蝙蝠かはぼりの、世よにも厭いとはしく醜みにくきは、我が胸むねの中の怪物くわいぶつの、化なりて出いでしかとも思おもはれて、何なにとも云いへぬ忌いまはしき氣きのする！。されど、されど、是こは眞實まことなり、我われは僞いつはらず、我われは矯ためず、我われは飾かざらず、恐おそるゝところ無なし。われこゝに思おもふ！。我われこゝに在あり！。天てん我が戀おもへる人ひとを何なにとせんとはする？！。天てんそもく我われを何なにとなれとかする？！。

と淺草あさくさの御堂みだうに身みを投げ伏ふして涙なみだにくれし曉あかつきには引ひきかへ、一文いちもん字じ口ぐち緊きんしく引締ひきしめて、猶なほ石人せきじんの如ごとく突立つたてる時とき、尾竹おたけと松之助まつのすけとは家うちの中うちより現あらはれ出いでゝ、

『そこに居ゐらつしやるのは水野みづのさんで？。ア、御入おはいんなされば宜よろしかつたものを。』

と尾竹おたけの云いふに續つづいて松之助まつのすけは、

『そこに居ゐたの？。僕は君きみは何なにか思おもひ出だして歸かへつたのかと思おもつた！。

水野君みづのくん、君きみは變へんな人ひとだネ。』

と、我わが姉あねの水野みづのを嫌きらへる事ことの如何いかばかり其その人ひとを苦くるめ居しるかをも知し



らずして云ふ。

尾竹<sup>をたけ</sup>はまた直<sup>ただち</sup>に引取<sup>ひつと</sup>つて、

『定めし案<sup>あん</sup>じて居<sup>ゐ</sup>て下<sup>くだ</sup>さるだらうといふので、今御宅<sup>いまおたく</sup>へ一寸様子<sup>ちよつとやうす</sup>を申しに上<sup>あが</sup>らうとしたところでござりました。熱<sup>ねつ</sup>が甚<sup>ひど</sup>く發<sup>はつ</sup>して譚語<sup>せんご</sup>が強<sup>つよ</sup>かつたりなんぞしたので、傍<sup>そば</sup>の人は一時驚<sup>いっしょおどろ</sup>いたのでしたが、別<sup>べつ</sup>の事<sup>こと</sup>も無<sup>な</sup>くつてまあ濟<sup>す</sup>みました。肺<sup>はい</sup>も心臓<sup>しんざう</sup>も故障<sup>こしやう</sup>は無<sup>な</sup>し、まづ今<sup>いま</sup>のところでは怖<sup>こは</sup>くは無<sup>な</sup>いです。あかし二三日<sup>にさんにち</sup>はまだ此<sup>こん</sup>様な事<sup>こと</sup>もありましようよ、此處<sup>こゝ</sup>二三日<sup>にさんにち</sup>が峠<sup>たうげ</sup>ですから。』

と、いと親切<sup>しんせつ</sup>に語<sup>かた</sup>り聞<sup>きか</sup>せたり。

## 其三十七

『あらお止なさいよ、頭髮が壊れまさあね。いやですよ。ほんとに、人を馬鹿にしたッ！。そんな事は妾や嫌ひですつてば、大きな聲を出しますよ。ほら、ほら御師匠さんの下駄の音ぢやありませんか。』

男の力の緩む間に辛くも逃れて、あどけ無く亂れたる衣服の前を引直しつ、膳の先に遠く離れて坐つたるは、さして美しといふにあらねど、光り流るゝが如き眼の中に情有つて、世にいふ男好のする何處と無く仇つぽき廿歳ばかりのすらりとしたる女にて、人前は此家の女主人の内弟子なり、娘分なりなれど、人の見ぬ時は水仕業も爲せらるゝ、寄食者ともつかず下婢ともつかぬ怪しきものなれば、置く方にも置かるゝ方にも、いづれ一寸したる關係は潜めるなるべし。男は顔の色黒く強壯さうに膩光のしたる、四十餘歳の品格の無きなるが、膳を前にして胡坐組めり。

格子戸は軽くからりと開きて、やがて入り來れるは果して女主人なり。五十に近きには疑ひ無けれど、ぶつてりと肥つたる平顔の、特に今は浴後とて照らつきて赤きに、絲の如く剃りつけたる眉の嫌味たらしく細く、髮際異様に濃き髪を、あたゝかに油つけて銀杏返しに結ひたる、みづからは未だ老い込まぬ意氣を示したるなるべけれど、人は見るより恐れて逃走るべき態なり。

女主人は糠袋の絲を口にしつゝ、手拭をばたりと一度鳴らして、ざろりと白けたる此場の状を見れば、男は何喰はぬ顔して酒無き猪口を吸ひ、女は徳利に手は觸れながら酌をせんとも爲で護り居たる其の呼吸は猶はづみて事實を語れり。

十分に男の何と爲たりしかを猜したる女主人の顔は、見るゝ紫色に脹れたるが如くなりて、

『何を仕ておいでだつたエ、貴郎さんは。』

と、先づ一句男の顔を見て詰りしが、

『先へ始めたなあ惡かつたが、飲つたばかりだわナ、堪忍しねえナ。』

と、男をとこもさるもの、穩おだやかに澱よじまず云いひ流ながすを聞ききて、いよいよ眼まなこを  
 嶮けはまくし、

『左さ様さうかい！。そりやあ堪か忍にするも何なにもありやあ仕しない。』

と冷ひややかに云いひ切きりつ、間あひだを隔おきて、

『だつて盜賊どろぼうねこ猫ねこが暴あばれたやうだからサ。留守番るすばん甲斐がひが無ないと思おもつて聞きい  
 たんだよ。お龍りゆう、お前まへ、氣きをつけ無なくつちやあいけないよ。

ほんとに碌ろくで無なしの盜賊どろぼうねこ猫ねこが居ゐるんだからネ。恐おそろしい圖々づうぐしい奴やつな  
 んだからネ。油斷ゆだんも隙すきもなりや仕しない。捕つかまへたら鼻はなづらを引ひ擦こすつて  
 遣やりたいぢや無ないか。』

と、云いひながら男をとこの對面むかふへ、むずと坐すわつたり。

男をとこは困こじたる顔かほに苦笑にがわらひして横よこを向むけり。

其三十八

見馴れ聞き馴れたるにさまでは感ぜねど、何と挨拶すべき言葉を知らねば、お龍は手拭糠袋を手渡しされたるを機に、其を臺所近き掛竿に叮嚀に懸けて、わざと暇取りて此方へ來れば、膳の上に伏せありたる我が猪口を、不興氣に取り上げたる主人に向ひて、男は自ら徳利を手にして、諂ひ笑を面に浮べつゝ、今や酌して遣らんとしたる其の狀態の、たとへば女主人は怒つたる蝦蟇の如く、男は又地に下りたる狡猾き烏の如くなるに、思はずも安芝居の安役者が出せる世話物の、下卑たる一ト場を見る心地して、おのれもまた其の同じ此の舞臺に交りて一ト役を演ることかと、身に染みてつくぐと嬉しからず思ひしが、漸く二人の仲の治まり行かんとするさまなれば、差當り先づ其事を悦びて坐に戻り、膳の上の聊か淋しきを見て、

『お師匠さん、あの傳さんの下すつたものを開けましやうか。』

と、機嫌取り顔に優しく云へば、主人も此女に對つては言葉を和らげつ。

『ア、たしか雀焼だったネ、ぢやあ開けておくれ！。オヤありやあ汝につて彼人が呉れたんだつたのに。』

『あらいやな、そんな事を！。どうだつて好いぢやありませんか。』

『左様かい。ぢやあ、まあ、貰ふよ。面倒くさいから取り分けずともだよ。あ、左様さ、其儘で好いやネ、構やあしないよ。』

大からぬ杉折は膳の傍に出されたり。

『オヤ此あ千住のだよ、あかも鮎だ、自轉車天狗が物を呉れると、いつでも奇妙に遠い所のものばかりだから可笑いのさ、帝釋さまのお水を何でも無い日に持つて來て呉れたりなんぞするのは、自轉車乗りで無くつちやあ出来ない事だよ。ン、中々おいしいよ、汝もお食りな、一杯あげやう。』

『イ、エ妾は。』

『ハ、ちつとも飲らないだけは、ほんとに汝にも似合はないよ。だ

けれど、其行狀で飲られちやあ大變だからネ、其も可いかも知れないよ。』

『あらまあ甚い事を。』

『だってお酒まで好だつた日にやあ何様したつてお前は、紀伊国屋が演さうな肌の女になるからねえ！。折角妾の名跡を取つて貰はうと思つて居たつて、何様な場をお前が出して仕舞ふか知れやしないもの！。』

『いやですよ、お師匠さん、そんな事を云つちやあ、妾はもう澤山凝りて居るんですもの、いつまでもおとなしく仕て居て一生獨身で、お師匠さんの傍にばかり居るつもりなんですから。』

『嬉しいねえ。お前が左様いふ氣で居て呉れりやあ妾あ此上無しさ。いよく左様なら妾の事をネ、これからお母さんお母さんと呼んでも可いよ。妾の方ぢやあ疾から既實の娘のやうに思つて居るんだから。』

『お師匠さん、そりやあ本當なの、きつと本當なの？。お母さんと云つても悪かあ無くつて？。』

『あゝ可ともさ。妾あ何様な嬉しいか知れやしないよ。』

男をとこは此時このときまで手持て無なくて、二人ふたりが對話はなしを聞き居ゐたりしが、こゝにむぐぐと口くちを動うごかして、

『お母つかさんにしちやあ變へんに若いナ。』

と、阿諛あゆに似にたる語ごを挿さめば、女主人あるじは忽たちまち、

『何なんだとエ、餘計よけいな御世話おせわだよ。黙だまつておいで!。』

と、たしなめは仕したけれど腹はらは立たてぬ顔かほなり。

『妾わたしもネ、お前は知しるまいが子こはあるけれども、——もつとも義理ぎりだけで根ねは他人たにんなのさ、だもんだからお前まへ、妾わたしを馬鹿ばかにして、一人ひとりは女の癖くせに生意氣なまいきに教員けういんなんぞになりやがつて、近在きんざいに一人ひとりで暮くろして居ゐるし、そのおとと其弟そのおとうとは書生しよせいを仕して居ゐるが、二人ふたりとも妾わたしを馬鹿ばかに仕しきつて居ゐて、此家こゝなんぞへは寄よりつきも仕しないんだが、ほんとにまあ何様どんなに高慢かうまんな憎にくらしい奴等やつらだらう!。だから妾わたしも其等そいつらを子こだとは思おもつて居ゐやしないのさ。同じ他人おななら妾わたしはお前まへを、ほんたうに妾わたしの娘むすめにして、何様どんなにでも好よくして遣やりたいよ。なあに何なんにも有ありや仕しないけれど、それでもお前まへ、妾わたしは妾わたし一人ひとりでもつて、どうやら斯様こうやら遣やつて來きて居ゐるんだか



らネ、それだけの事はお前に譲るつもりなのさ。エ、其の娘かエ、五十と云つてネ、容貌も悪かあ無いが、愛の無い、矢張りあの妾の大嫌ひな海老茶の袋を穿いてる奴なのさ。男の子は松之助といつて、直この下谷に居るのだがネ、此の方はまだしも素直な性質だから手なづけては居るけれど、やつぱし姉びいきだから妾の爲にやあ、末始終は爲りさうもない奴なのさ。此様いふ譯なんだから、お前次第で、ほんとにお前が妾の後を取る氣になつてお呉れなら、どんなにでも妾はお前に肩を入れるよ。其代りお前まつかりしてネ、よその下らない猫なんぞに手をかけられたりなんぞ仕ないやうに仕てお呉れで無くちやいけないよ。ハ、ハ、ハ。おや、暗くなつて來たネ、洋燈さへ準備が仕てあるなら構はないから、お湯へ行つておいでな。妾あお前が美麗だつて云はれると眞實に天狗なんだから、いくらでも悠々磨いておいで!。』

其三十九

『あら虚言うそばかり！。いくら磨みがいたつて、どうせ美麗きれいになんか成りやあ仕しませんよ。』

とは云いひたれど師匠しやうが言葉ことばに悦よろこべるさまは、掩おほはんとして掩おほひきれず、愛嬌あいけう溢こぼるゝ眼めのしほに見みえたり。女主人あるじはこれを見みて取りとりて、此これもおなじく笑顔えがほつくり、

『ナニ妾わたしがお茶々羅ちやくらを云いうもんかね。傳でんさんだつて清せいさんだつて勝かつさんだつて、みんなお前まへが美麗きれいだもんだから大騒おほさわぎ遣やつてるんだあネ。虚う言そだと思おもふなら聞きいて御覽ごらん！。』

と、重ねかさねて復またも悦よろこばせにかゝれば、

『あら、あんまりだわ御師匠おしよさん！。たんと御嬬おなぶりなさいよ、ようござんすわ。』

と、此度こたひはつんとして横よこを向むきしが、媚なまめきながら微瞋やゝいかれる顔かほは、女主ある

人が言葉もいつはりならず艶なり。

やゝありて思ひ出したるやうに、

『少し早くつても洋燈を点けましよう。』

と、云ひさまに立つてお龍は去りつ、何をなせるにや少時其姿を見せざりしが、火を点じたる釣洋燈を持ち來りて、座敷の中央に高く吊りし時には、今までのほつれかゝりたる鬚のあとかたも無く、其の頭髮は早くも結ひかへられて、さつぱりとしたる束髪の美しきが、燈の光に鮮やかに映し出されたり。

『オヤ早變りだネエ、吃驚させられたよ。チヨイと彼方を向いて御見せナ、ヘーエそれが花月巻とやらかエ?。』

『ハア、左様ですの。似合はなくつて?。』

『イ、エ似合はないどころぢあ無いよ、これは此でもつて、いつそ又好いよ。お前は徳な顔立で、何に結つても似合ふのが妙だネ。だが束髪も此頃は考へたネ、一トあきり人が爲た蝸牛の親方見たやうなのなんざあ、堪らなく可厭なもんだつたがねえ、ハゝゝ。』

『ホ、御師匠さんの口には叶いませんわ。ぢやあ一寸御湯へ。』

『あ、可いとも！。さあ、髪も出来たし、行つておいで、行つておいで！。』

『ぢやあ一寸。』

云ひながら會釋して身を起し、やがて徐に出て行きけるが輕らかなる下駄の音は幾程も無く消えぬ。

『大分念入りにあやなすぢやあ無えか。』

男は女主人がお龍に對する舉動を怪しむやうに云へば、や、酔ひたる女主人はそれには關はず、今迄は他の見る目を兼ねて堪へ居しが、今は憚るところも無きに、突然手あたり任せに男の口の端をいやといふほど捻りて、

『あやなすぢやあ無えかも無いもんだ。人の居ない中何を爲やうと仕たんだエ。』

と、新に罪を糺さんとする其勢なかく當りがたければ男はこれに辟易して聊か身を退きぬ。

『ナニたゞ調戲つたばかりだよ、戯談だわナ。』

『フン、戯談から駒が出無くつて御仕合さ。』

長煙管は忽ち烈しく膝頭を突きぬ。男はいよく後じさりするのみ。

『あやまつた〜。いゝ加減にして呉れ、痛えやナ。』

『痛くつても關ふもんか、碌で無しめ。』

『あやまつたと云ふに執念深いなあ。』

『執念深いなあ妾の性だよ。ほんとに彼女なんぞに指でもさして御覽、今度からたゞ置きやあ仕無いから。彼女あ妾が大事にかけてるんだもの。』

『だから彼様なに味に文なして何様するんだと聞くのだ!。』

『どうしたつて宣いよ、汝の御世話にやあならない。妾も取る年だし、

子は無いし、どうせ汝はちつとも當にやあならないしするから、彼女

に後を遣つて彼女にかゝるんだよ。』

『フーム、強氣に彼岸詣りでも仕さうな風な事をいふナ。そりやあ眞實かエ。』

『さうさ、ほんたうで無くつてサ。』

『ハ、ハ、虚言を云ひねえナ。止しねえ／＼！。繼子だつて何だつて二人も子もあるのに、其様な事がなんで出来るもんか。』

『出来無いものかね、爲るんだもの！。無理でも左様して妾やあ彼女にかゝるんだよ。相続人になつて五十は死ぬかも知れないのだから。』

『ハ、ハ、強氣に老い込んだ事をいふが、乃公まで食はせやうと云ふなあ、ちつと甚い！。どうしてお前が後を案じる風かエ。汝は彼女をすつかり取り込んで、あやぶつて遣らうと云うんだらう。』

『何だとエ？。』

『知れた事さ！。食物に仕やうと云ふんだらう！。何も一人で占めずとももの事だ、乃公にも半分遣しねえナ。圍でこしらへたものぢやあ有るまいし、たゞ穫つた魚ぢやあ無えか、吝みなさんナ。其代り骨つきの方は其方へ遣らあ！。』

『畜生！、惡徒め！、え、仕方が無い！。それぢやあ片身はあげるからネ、要る時に何時でも庖丁をお貸し！。』

其四十

互の胸中に塊物はあるながら、相酌の酒にいつしか解け合つて、男が勤むる亭主役、銚子のかはり目間を抜けさせねば、女主人は湯上の早くも上機嫌となつて、

『そりやあ幾千でも働かうが、一體彼女あ何様した譯の娘なんだ？。いつ聞いても些仔細があつてとばかりで、聞かされないが。』

と男の云ふを聞いて舌なめずりしつ低聲に説出したり。

『汝は成程知るまいがネ、一昨々年の春までは彼女も矢張り、妾のころへ稽古に來た娘さ。』

『ウン。』

『内務省とかの小吏の老人と、父子二人きりで暮して居たんだが、お父さんが日光羊羹見たやうに變に乾固まつた朴實な人だったのには似合はないで、あの子は蓮葉でも無いが妙に浮氣っぽい、お狭な面白いと

ころのある、好いた男になら生命でも抛り出さうツてつたやうな肌合の娘で、同じ齡ぐらゐな娘達が集つて談話を仕た時、お七の爲た事が道理だといつて一同に笑はれたつて、泣いて口惜がつて怒つた事がある程なのさ。そんな調子だつたもんだから年齡も行かないのに、これも矢張り吾家へ來て居た建具屋の息子の源といふいなせな男と人知れず出來て仕舞つたのさ。』

『フーム、なある程。お前が撮合山を行つたんだナ。兩方から拜まれて錢を取つたらう！。惡徒ツて云うなあ其様いふのゝ事だぜ。』

『交ぜるなら後を話さないよ。』

『あやまつた、あやまつた、それから。』

『其の中に彼の娘のお父さんが病ひついて、老齡だから叶はない、死つちまつたんだ。すると駿府とかゝら叔母さんが出て來て、あの娘を田舎へ連れて行かうといふのさ。そら情夫の一件があるから行きたかあ無いが、まさか十七八だから曝露け出して言ふことあ出來ず、自分の家に財産は無し、他に身寄も何も無いから、楯にして取る理屈が無い



んで、とう／＼駿府へ連れて行かれたアネ。』

『だつて其ぢやあ其の建具屋の倅が意氣地が無さ過ぎるぢやあ無えか。』

『それがお前、理由があるからなんさ。其あ其の源といふのにやあ嫁になる筈の娘が、親類内に決定つて居たんで、つまり源の方ぢやあ初手から當座の花にしたんだネ。だから彼の娘に捕まへられて煮え詰つた話をされる段になりやあ、いつでも間に合せを云つて巧く逃げて、とう／＼逃げて／＼悪くも思はれずに逃げおはせたんだよ。』

『や、そりやあ源といふ奴あ酷かつたナ、お龍こそ眞實に憫然だ。』

『ひどく御察しがいゝネ、何様かしてお遣りナ。』

『すぐと左様皮肉を云はずともだ。ウン、それから。』

『そこで生木を引裂かれて駿府へ連れて行かれたんだから、お龍は矢も楯も堪りや仕ない、雨の降るやうに手紙を遣したのさ。ところが源の方が其心なんだから返事も遣らない。斷念させやうといふんで關はずに置くから、お龍は餘程恨んだらしい。それでも此方ぢやあ關はずに置くと、流石は明治ツ子だから氣が強いネ、源の家へ押しかけやう

つて云つて來たんだよ。さあ、來られちやあ大事だから源は弱つて、一丈もある手紙を三日もかゝつて書いて、親々の壓制で仕方が無くつて、お前にやあ濟まないが實は既女房を貰つた。腹も立つだらうが何様か堪忍して呉れ、二人の中は無い縁と諦めて、汝も叔母さん次第に好い婿を取つて榮えてくれろ、と哀れつぽく巧く虚言をついたネ。』

『やれく！。いよく酷いナア、悪い奴だ。』

『するとお前、よくく、だつたと見えて、怖い話さ！、忘れもしない去年の一月の十三日、寒の眞中の雪のふるのに、安倍川とかいふ太な川へ飛び込まうとしたさうさ。幸福に助けられたから可いやうなもの、死なれりやあ差し詰め源は取り憑かれ無くちやあならないんだつたのさ。』

『フム、それから。』

『まあお待ち。さぞ湯の中で噴嚏を仕て居るだらう、惘然に。ハ、ハ、ハ。話しながら飲むんで大層發したよ。駿府へ行つたのが一昨年の夏の末で、飛び込んだのが去年の一月だから、其間の彼の女の事を思ふと實

は憫然ふびんさね。だが驚おどろいたのは源げんさ。離はなれて居ゐる土地とちだから助たすかつたのか助たすからなかつたも知しりやうは無ないし、とても生いきて居ゐても詰つまらないから死しんで仕舞しまふから憫然あはれと思おもつて、一いっ片ぺんの回向ゑかうでも仕して呉くれるといふ涙なみだの痕あとの一いっぱいにある不氣味ぶきみな手紙てがみを受取うけとつたのだから、眞青まっさをになつて慄ふるへて仕舞しまつて、いよく死しんで終しまつたものなら仕方しかたが無い、陰かげながら法事はうじでも仕して崇たりの來こないやうに仕やうと、彼地あつちの新聞しんぶんを取とつて調しらべて見みると、丁度ちやうど其その手紙てがみの日付ひづけの翌日よくじつの新聞しんぶんに、美人びじんの投身みなげといふ標題みだしがあつて、彼あの名なが見みえたから倏然しゅぜんとしたが、助たすかつて叔母おばの家うちへ引渡ひきわたされた、仔細しさいは解わからないが發狂はつきやうした所爲せゐだらう、と書かいてあつたのでホツと氣息いきを吐ついたネ。』

『ン、そこで源げんといふ奴やつは何様どうしたエ。』

天うつ浪 第一終